埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第30集

県道大宮東京線関係

埋蔵文化財発掘調査報告

I

中原前・駒前

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第30集

県道大宮東京線関係

埋蔵文化財発掘調査報告

I

中原前（なかはらまえ）・駒前（こまのまえ）

1983

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の道路網の整備は、交通量の増大および車輌の大型化に伴う交通の質的変化に対処するため、国道・県道の新設・改良が、地域開発を整合させながら計画されております。

県道大宮・東京線は、第２の産業道路としての役目を荷って計画され、大宮地区ではすでにその一部が開通しております。浦和地区の路線６キロメートルにかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いは、慎重に協議が重ねられましたが、５遺跡の一部について、やむなく発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、昭和55年に、県都市施設課の委託を受け、当事業団がこれを実施し、その結果重要な成果を納めることができました。

ここにその成果を埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第30集として記録いたしました。本書並びに資料の数々は、記録保存の成果はもとより、今後の学術研究に資するところが大きいものと思われます。

発掘から報告書の刊行に至るまで、終始御指導御協力を寄せられた埼玉県土木部都市施設課、浦和土木事務所、浦和市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和58年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　長　井　五　郎

例　言

1．本書は県道大宮・東京線にかかる、浦和市中原前・駒前遺跡の発掘調査報告書である。（昭和55年、委保第５の2836号、第５の4436号）

2．発掘調査は埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和55年８月４日から昭和56年３月27日に亘って実施し、整理、報告書作成作業は昭和57年度に実施した。

3．出土品の整理及び図の作成は、宮崎朝雄（現・県文化財保護課）、村田健二、鈴木秀雄、細田勝が主にあたった。

4．発掘調査における写真は、宮崎、村田、細田、島村範久（現・騎西町教育委員会）、遺物写真は、宮崎、鈴木、細田が撮影した。

5．本書の執筆は、各文末記載のとおりである。

6．本書の編集は、調査研究部第４課職員があたり、横川好富が監修した。

7．本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。

青木義脩（浦和市教育委員会）

高山清司（浦和市教育委員会）

目　次

序

例　言

Ⅰ　調査の概要……1

1　調査に至るまでの経過……1

2　調査の経過（日誌抄）……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……4

Ⅲ　中原前遺跡発掘調査……8

1　遺跡の概観……8

2　遺構と出土遺物……10

Ⅳ　駒前遺跡発掘調査……15

1　遺跡の概観……15

2　遺構と出土遺物……18

(1)　縄文時代……18

(2)　平安時代……43

(3)　近　　世……45

Ⅴ　結　語……51

1　縄文時代……51

2　平安時代……61

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……5
第２図　中原前遺跡地形図……8
第３図　中原前遺跡全測図……9
第４図　土壙１～４実測図……10
第５図　中原前遺跡出土土器拓影図……11
第６図　中原前遺跡出土石器実測図……13
第７図　中原前遺跡出土古銭拓影図……14
第８図　駒前遺跡地形図……15
第９図　駒前遺跡全測図(1)……16
第10図　駒前遺跡全測図(2)……17
第11図　駒前遺跡炉穴・土壙・集石実測図…18
第12図　駒前遺跡縄文土器拓影図(1)……20
第13図　駒前遺跡縄文土器拓影図(2)……22
第14図　駒前遺跡縄文土器拓影図(3)……23
第15図　駒前遺跡縄文土器拓影図(4)……24
第16図　駒前遺跡縄文土器拓影図(5)……26
第17図　駒前遺跡縄文土器拓影図(6)……27
第18図　駒前遺跡縄文土器拓影図(7)……29
第19図　駒前遺跡縄文土器拓影図(8)……30
第20図　駒前遺跡縄文土器拓影図(9)……32
第21図　駒前遺跡縄文土器拓影図(10)……34
第22図　駒前遺跡縄文土器拓影図(11)……35
第23図　駒前遺跡縄文土器拓影図(12)……37
第24図　駒前遺跡縄文土器拓影図(13)……38
第25図　駒前遺跡縄文土器拓影図(14)……40
第26図　駒前遺跡出土石器実測図(1)……41
第27図　駒前遺跡出土石器実測図(2)……42
第28図　駒前遺跡第１号住居跡実測図……43
第29図　駒前遺跡第１号住居跡出土遺物実測図……43
第30図　駒前遺跡第１号住居跡出土鉄製紡錘車実測図……44
第31図　駒前遺跡墓壙実測図……46
第32図　駒前遺跡１号墓壙出土遺物実測図…47
第33図　駒前遺跡グリッド出土土器実測図…48
第34図　駒前遺跡出土キセル実測図……48
第35図　駒前遺跡出土古銭拓影図(1)……49
第36図　駒前遺跡出土古銭拓影図(2)……50

図　版　目　次

中原前遺跡

図版１　遺跡遠景、遺跡全景

図版２　１号土壙、１号土壙土層

図版３　２号土壙、古銭

図版４　縄文土器、石器

駒前遺跡

図版５　遺跡遠景、南側調査区全景

図版６　１号炉穴、２号集石

図版７　１号住居跡、１号住居跡出土紡錘車

図版８　１号住居跡カマド、１号住居跡出土土器

図版９　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版10　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版11　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版12　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版13　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版14　縄文土器（１群）　縄文土器（１群）

図版15　縄文土器（２群）　縄文土器（２群口唇部）

図版16　縄文土器（２群）　縄文土器（２群）

図版17　縄文土器（２群）　縄文土器（３群）

図版18　縄文土器（３群）　縄文土器（４群）

図版19　縄文土器（５群、６群）縄文土器（７群）

図版20　縄文土器（７群）　縄文土器（８群）

図版21　縄文土器（８群）　縄文土器（９群）

図版22　縄文土器（10群、11群、12群）、縄文土器（底部）

図版23　石器（スタンプ形）、石器（石斧）

図版24　石器（石斧、磨石）、石器

図版25　１号住居跡出土土器、１号住居跡出土土器

図版26　かわらけ、かわらけ

図版27　古銭

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至るまでの経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を実施しているが、都市化の著しい県南では計画の基本となる都市計画道路の建設が特に進められている。都市計画道路大宮―東京線は大宮市、浦和市、川口市を結ぶ産業道路の東側を併走し、第２産業道路とも呼ばれている道路である。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。今回の事業の担当課である県土木部都市施設課とも同様の調整を進めていた。

都市施設課長から昭和53年１月23日付け都施第580号をもって、「浦和都市計画道路大宮・東京線建設予定地内の埋蔵文化財の所在等について」文化財保護課長あて照会がなされた。文化財保護課では、浦和市教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、路線内に５遺跡の所在を確認した。そして、昭和54年３月に都市施設課長あて照会文書に対する回答を行った。その内容はおおよそ下記のとおりである。

1.　文化財の所在

路線内には№１～№５の５遺跡が所在し、各遺跡は縄文～平安時代の集落跡として把握されている周知の遺跡であること。

2.　取扱い

これらの遺跡は現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状を変更する場合には、文化財保護法第57条の３の規定に従い、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。また、所在の有無が明確でない区域については事前に確認調査を実施すること。

その後、文化財保護課と都市施設課と協議を重ねた結果、路線変更は不可能となったためやむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、公共事業の増大に対処するため昭和55年に設置された（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団がその実施に当たる事が決定した。

昭和55年度は№２遺跡、№４遺跡を行う事になった。文化財保護法に基づき埼玉県知事からは埋蔵文化財発掘通知が、事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、昭和55年８月12日より発掘調査が開始された。

文化庁からは委保第５の2836号及び第５の4436号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

2　調査の経過（日誌抄）

中原前遺跡（昭和55年８月12日～12月26日）

８月　調査区全体に路線のセンター杭を中心線として一辺５m区画のグリッドを設定し、北から

南へ１、２、３…、西から東へＡ～Ｆとして１Ａ、１Ｂとグリッド名を呼称した。調査区中央の台地平坦部、最も遺構がありそうな場所から一区画おきにグリッド掘りを開始する。表土は30～40㎝２層黒色土は10～15㎝と薄くローム層に達する。遺物は縄文土器が少量出土。遺構は土壙１基が検出された。

９月　グリッド掘りを北側の斜面部へと拡大する。２層黒色土がいっそう薄くなりほとんど存在しなくなる。縄文土器を少量出土。遺構としては土壙１基を追加しただけであった。続いて、次は北側台地奥部へとグリッド掘りを延ばした。台地奥部は、宅地であったため表土がかなり削平され10～15㎝でローム面が露呈した。以上のグリッド掘りの結果に基づいて、バックホーにより調査区全面の表土排土を実施した。

10月　台地平坦部から斜面部へ向けて遺構の精査を行う。遺物は縄文土器少量を出土しただけである。既に確認されていた２基の土壙の他に、さらに２基が検出され計４基となった。

11月　土壙の調査を行う。１号土壙は縄文土器が数片出土。２号～４号土壙は遺物が出土しなかったが、フク土等より近世のものと考えられる。

12月　ローム層を掘り下げ先土器時代の遺物包含層の確認調査を行う。遺物の検出は全くなし。測量及び写真撮影を行い調査を終了する。

駒前遺跡（昭和56年１月７日～３月31日）

１月　路線センター杭を中心線として５ｍ区画のグリッドを設定し、北から南へ１、２、３…、西から東へＡ～Ｆとし、１Ａ、１Ｂ…と呼称する。調査区中央の道路を境として、最初に南側調査区のグリッド掘りを開始する。表土は褐色土が約30㎝堆積し、２層黒色土の堆積はほとんどみられずに、ソフトローム層、ハードローム層となっている。また、山林であったため木の根による攪乱が著しい。表土とソフトローム層の境付近を中心に撚糸文土器を主体とする縄文土器の包含層が確認された。

２月　グリッド掘りを南側調査区全域に拡大した。遺物は集中的に出土するグリッドも存在したが、全体としては極めて散在している。撚糸文土器としては多量に検出されたが層位的出土は全く期待できず、他時期の土器も混在して出土している。表土中の遺物を検出した後、ローム面を精査した結果、縄文時代の炉穴２基、集石２か所、平安時代の住居跡１軒、近世の墓壙４基を確認した。

３月　遺構の調査を行う。平安時代の住居跡からは鉄製紡錘車１点を出土する。土器の出土は少なく、甕の破片が出土しただけであった。近世の墓壙からは古銭とかわらけが出土した。各々、測量と写真撮影を行う。

４月　年度が変ってから北側調査区に入る。調査担当も宮崎、島村から村田、細田へと引き継がれた。北側調査区は、大部分が宅地であったために攪乱が著しく表土をバックホーによって排土した。遺構精査の結果、縄文時代の炉穴１基と、土壙１基を検出した。遺物は縄文土器を少量出土しただけであるが、南側調査区では出土しなかった前期終末～中期初頭の土器が出土している。炉穴、土壙を調査し、測量、写真撮影を行う。

（宮崎朝雄）

発掘調査の組織

1 発　掘（昭和55・56年度）

主 体 者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

昭和55年度	理事長	関　根　秋　夫
昭和56年度	理事長	長　井　五　郎
昭和55年度	副理事長	本　郷　春　治
昭和56年度	副理事長	沼　尻　和　也

庶務経理　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	伊　藤　悦　夫
	関　野　栄　一
	福　田　　浩
	本　庄　朗　人

発　　掘　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長兼第三課長	横　川　好　富
	宮　崎　朝　雄
	村　田　健　二
	細　田　　勝
	島　村　範　久

2 整　　理

主 体 者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	長　井　五　郎
副理事長	岩　上　　進
常務理事	渡　辺　澄　夫

庶務経理　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	佐　野　長　二
	関　野　栄　一
	江　田　和　美
	福　田　　浩
	本　庄　朗　人
	福　田　啓　子

整　　理　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長	横　川　好　富
調査研究第四課長	水　村　孝　行
	村　田　健　二
	鈴　木　秀　雄
	細　田　　勝

3 協 力 者

浦和市教育委員会、地元区長および地元住民

Ⅱ　遺跡の立地と環境

中原前遺跡は浦和市大字三室字中原前に所在し、国電京浜東北線北浦和駅から北東方向へ約2.4㎞の位置にある。およそ東経139°38′15″、北緯35°53′付近である。

現在の浦和市は人口約35万人を有し、東京からの通勤圏にあり、各時代を通じて遺跡の営まれた台地上は大部分が宅地化されている。それでも市街地を抜けると、武蔵野の面影を残す雑木林が散在し、当遺跡の台地から北方へ遠く臨まれる見沼の低地には水田や畑、植木畑などが広がっている。

遺跡が営まれる台地は、大宮台地の一支台で、浦和支台と呼ばれている。北側から東に回り込んで流れる芝川と見沼代用水の谷筋によって、片柳支台、鳩ケ谷支台と分断され、西側は鴻沼用水の流れる谷が与野支台を隔てている。台地の標高は約15m前後で、沖積低地との比高差は7mを測る。縄文時代の海進期、大宮台地は島状に周囲を海に囲まれ、現在の谷筋は入江となっていた。入江からはさらに奥深い溺れ谷が発達し、台地を複雑な地形にして、舌状台地の突端は海を臨む岬であった。浦和支台では南縁の奥東京湾を臨む地帯に多数の貝塚が形成されている。当遺跡は北側の見沼低地から南方へ向けて入り込んだ小支谷の内奥に面した暖斜面上に立地する。縄文時代の遺跡は、湾を臨む支台の縁辺部に限らず、湾を遡った台地の内奥部にも数多くみられる。

中原前遺跡から南東方向へ約1.6㎞に駒前遺跡が位置する。およそ東経139°38′15″、北緯35°52′30″付近である。

駒前遺跡は、複雑に入り込んだ溺れ谷が半島状に侵食した台地の、西側に僅かに突出した台地縁辺に広がっている。今回の調査ではその縁辺部が対象であったが、遺跡の主体は背後（東側）に続く台地上であることが解った。

中原前、駒前遺跡をとりまく周辺の遺跡については第1図に示した。現在浦和市内では先土器時代から中世に至るまで約200余りの遺跡が確認されており、図示したものは主に調査の行われた縄文時代の遺跡である。

駒前遺跡で主体を為し比較的まとまって出土した撚糸文系土器は、古くはえんぎ山遺跡（安岡1969）出土例がある。えんぎ山遺跡は鳩ケ谷支台の西方に見沼低地を臨む台地上に所在して、先土器時代の石器等も出土した。現在浦和付近の先土器時代遺跡は見沼低地に沿った周辺の台地に数多く発見されている。他に撚糸文系土器を出土した遺跡は、浦和支台で、東中尾、宮本、前耕地、松ノ木遺跡等から稲荷台式が出土し、山形押形文土器なども少量伴出している。この他に包含層から数個体分の土器片を出土した遺跡例はあるが、住居跡等の遺構が発見された遺跡は白幡中学校校庭内遺跡だけで確認されている。

沈線文系土器もまとまりを欠くが各遺跡で少量出土している。これに続く早期後半の条痕文系土器を出土する遺跡は、分布も増加し、炉穴群を中心に大規模な集落が営まれている。見沼低地を北側に臨む大古里遺跡（青木ほか1976）では、茅山期の住居跡が2軒と炉穴85基の他土壙等が発見された。出土土器も茅山下層、上層式を中心に鵜ケ島台式や東海系の上の山式などがある。早期後半の

1中原前遺跡　2駒前遺跡　3惣持院西遺跡　4鶴巻遺跡　5えんぎ山遺跡　6宮本遺跡　7馬場遺跡　8北宿遺跡　9大古里遺跡　10山崎貝塚　11前窪遺跡　12前窪西遺跡　13前耕地遺跡　14松ノ木遺跡　15梅所遺跡　16和田西遺跡　17大間木内谷遺跡　18吉場遺跡　19東中尾遺跡　20井沼方遺跡　21明花遺跡　22円正寺遺跡　23太田窪貝塚　24大谷場東貝塚　25大谷場貝塚　26根岸遺跡

第1図　遺跡位置図

住居跡が発見された遺跡例では、他に大北遺跡（青木ほか1981）で１軒検出されている。炉穴も40基以上が群在して発見され、出土土器は野島式を中心に、稲荷台式、山形押型文土器、田戸下層式等がいずれも少量であるが出土している。大北遺跡に近在する和田北遺跡（小倉ほか　1982）で竪穴状遺構１基、炉穴６基、西谷遺跡（小倉ほか　1982）で炉穴７基、大間木内谷遺跡（青木ほか　1980）で鵜ケ島台式期の炉穴２基、吉場遺跡（青木ほか　1980）で炉穴12基、鶴巻遺跡（青木、高山　1976）で住居跡１軒、炉穴２基が検出されている。この他にも数基の炉穴が発見された遺跡例は数多く、浦和支台では早期後半から、大古里遺跡や大北遺跡などの大規模に集落を構成する遺跡をはじめとして、キャンプサイト的な集落まで、質量ともに遺跡の増加が認められる。

茅山上層式以降前期初頭まで、該期の遺跡例はあまり知られていない。大古里遺跡では、東海系の土器を伴出する一群の土器が出土した。鶴巻遺跡は、下吉井式、打越式が少量出しているが、遺構は発見されていない。駒前遺跡からも、下吉井式が１個体出土したが、単独的な出土状態である。

前期の貝塚遺跡としては大谷場貝塚（青木　1976ほか）がある。奥東京湾を南方に臨む浦和支台の南縁部に位置し、黒浜式期の住居跡７軒、諸磯ａ式期の住居跡１軒が発見された。中原前遺跡が位置する北側の谷筋には、浅い谷を隔てて山崎貝塚（浦和第一女子高校　1967）が所在する。やはり黒浜式から諸磯ａ式期の住居跡が４軒検出され、貝層中からは貝刃やイノシシの頭骨等が出土した。関山式期の遺跡としては大古里遺跡（岩井ほか　1981他）や井沼方遺跡（岩井ほか　1980他）等がある。大古里遺跡では住居跡が５軒、また、井沼方遺跡では７軒検出されているが、各住居跡からは貝塚の存在は確認されていない。貝塚はほかに真福寺貝塚や太田窪貝塚等が知られているが、その多くは浦和支台の南縁地域で、岬状に突出した台地先端部に立地している。また時期的にも前期後半の限られた時期に形成され、その後の中期から後、晩期には継続しない。これは、芝川を境とした鳩谷支台で後期から晩期にかけての貝塚遺跡が盛行するのに比較して対照的である。

駒前遺跡で断片的に出土した前期終末期の土器は、鶴巻遺跡（青木ほか　1978）や井沼方遺跡（吉川　1969）等でやはり極く少量であるが出土しており、これらの土器についてみると、西関東と東関東地方の中間的様相を呈している。

中期の遺跡は、五領ケ台式期の住居跡が検出された根岸遺跡（浦和考古学会　1964）や中期から後、晩期にかけての遺跡である馬場遺跡（柳田ほか　1971他）があり、大北遺跡等でも加曽利Ｅ式期の住居跡が検出されている。そのほか、勝坂式から加曽利Ｅ式を出土する遺跡は数多くあるが、大規模な集落を構成する遺跡例は何故か発見されていない。

後、晩期では、堀之内式期の土壙が検出された明花遺跡（青木ほか　1968）や、椚谷遺跡（青木、高山　1976）は加曽利Ｅ式後半から称名寺式までが主体である。大古里遺跡も後期前半までの時期で、後期から晩期まで継続する遺跡では馬場遺跡がある。遺構は土壙が検出されており、土器や石器と伴に土偶、耳飾をはじめとする多数の土製品が出土した。特筆すべきは、男女一対の土偶が貼付けされた土偶装飾付土器で、何らかの遺構に伴うものかは不詳である。白幡中学校校庭内遺跡（青木ほか　1977）は、晩期終末の荒海式を主体的に出土し、住居跡も１軒検出された。無文、条痕文、撚糸文の鉢形土器で断片的ではあるが、県内でも貴重な資料である。

以上、中原前、駒前遺跡が立地する浦和支台を中心に、両遺跡において主体をなす縄文時代について時期を追って概観した。この地域では、早期から晩期まで各時期を通して継続的に多数の遺跡が営まれながら、大規模な集落が目立って存在しないなど、時代を通じて全体的なまとまりを欠いた散逸した遺跡のあり方が認められる。これは当時の地形景観や自然環境に大きく関係するものだろう。これ以後、荒川の自然堤防が形成される時期には、現在の浦和市西部から戸田市方面に渡って、弥生時代以降の遺跡が広く展開する。

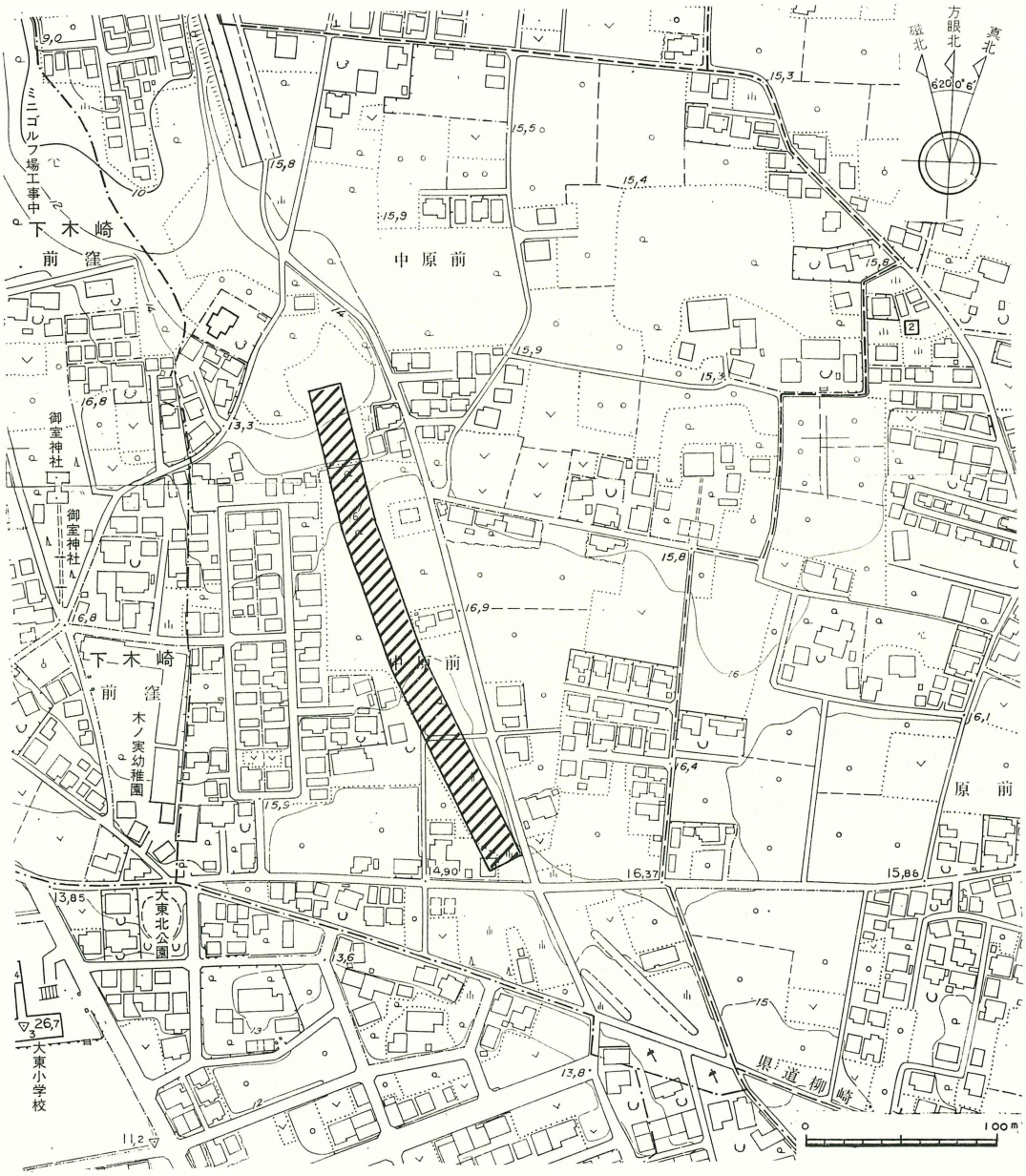
（鈴木秀雄）

参考文献

青木義脩	1974	「浦和市史第１巻考古資料編」浦和市総務部市史編さん室
青木義脩、岩井重雄	1973	「鶴巻遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告書第６集
青木義脩、高山清司	1976	「東北自動車道浦和市内遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会
青木義脩	1976	「大谷場貝塚」浦和歴史文化叢書２　浦和市郷土文化会
青木義脩、岩井重雄、高野博光	1976	「前窪西遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会
〃	1976	「白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第３集
〃	1977	「前窪遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第４集
青木義脩、岩井重雄	1978	「鶴巻遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第６集
青木義脩、岩井重雄、小倉均	1981	「大北遺跡、井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第15集
青木義脩、高山清司、小倉　均	1982	「馬場（小室山）遺跡」浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第１集
〃	1982	「井沼方、大北、和田北、西谷、吉場遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第20集
青木義脩、岩井重雄、小倉　均	1980	「大間木谷、和田西、吉場、井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第13集
青木義脩、高山清司	1981	「中原前、大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第17集
岩井重雄、小倉　均	1981	「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第19集
柳田敏司、青木義脩、宮内正勝	1971	「馬場遺跡第二次調査報告」浦和市教育委員会
柳田敏司、青木義脩、高野博光	1976	「大古里遺跡発掘調査報告書」浦和市大古里遺跡調査会
吉川国男	1969	「浦和市井沼方遺跡」埼玉考古第７号
青木義脩ほか	1968	「明花遺跡」浦和市文化財調査委員会
宮内正勝	1967	「浦和市三室山崎貝塚発掘概報」浦和第一女子高等学校郷土研究部
青木義脩	1964	「根岸遺跡」浦和考古学会

Ⅲ　中原前遺跡発掘調査

1　遺跡の概観



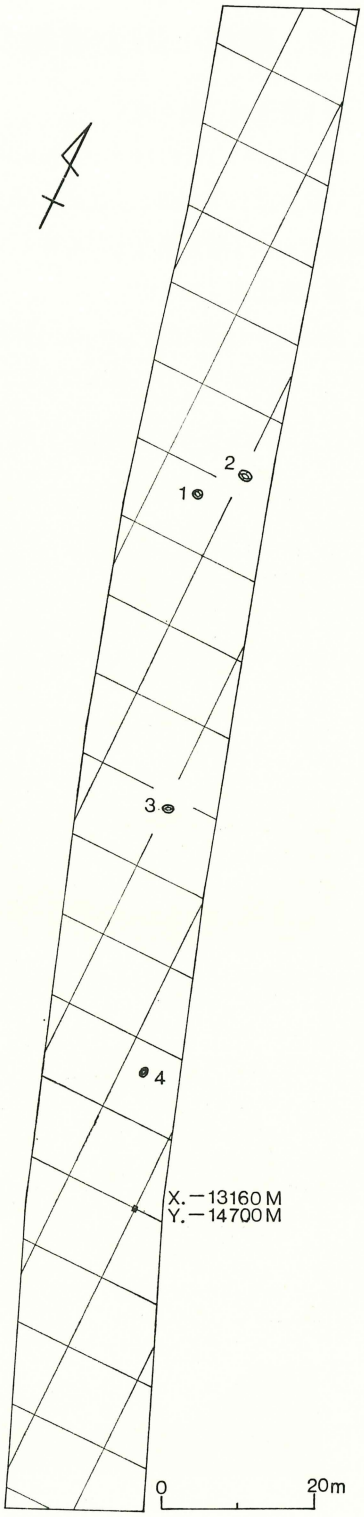
第２図　中原前遺跡地形図

中原前遺跡は、芝川が流れる低地から南へ約 500 m入り込んだ小支谷を北側に臨む台地上に位置する。小支谷から緩やかな傾斜をもって台地へと上がっており、台地の標高は15～16m、低地との比高差は５～６ｍである。周囲は宅地造成が急速に進行しているが、今回の調査区は山林として残っていた場所である。

調査は、道路のセンター杭を中心線として ５ｍ区画のグリッドを設定し、グリッド調査の結果遺物包含層が無い事を確認した後に、ブルドーザーによって表土を削平し遺構を確認した。遺跡の標準的な層位は、１層表土である黒色土20～30㎝、２層褐色土10～20㎝、３層ソフトローム層10～15㎝、４層ハードローム層である。２層の褐色土は北側斜面部では薄くなり、表土を削平すると直ちにローム層になった。また、山林であったために、１層表土、２層褐色土は木の根や根切り溝による攪乱が激しく、遺構や遺物の残存状況は良くなかった。

調査の結果検出した遺構は、縄文時代中期の土壙１基と時期不詳の土壙３基だけである。遺物も台地の平坦部から、縄文時代中期～晩期の土器と石器を少量出土しただけである。石器の中では、独鈷石が１点出土した事が注目される。本遺跡の西側に続く台地上には、縄文時代後期、晩期を主体とする前窪西遺跡が存在する。中原前遺跡における今回の調査区は、前窪西遺跡の外縁部に相当するものと考えられる。

（宮崎朝雄）



第３図　中原前遺跡全測図

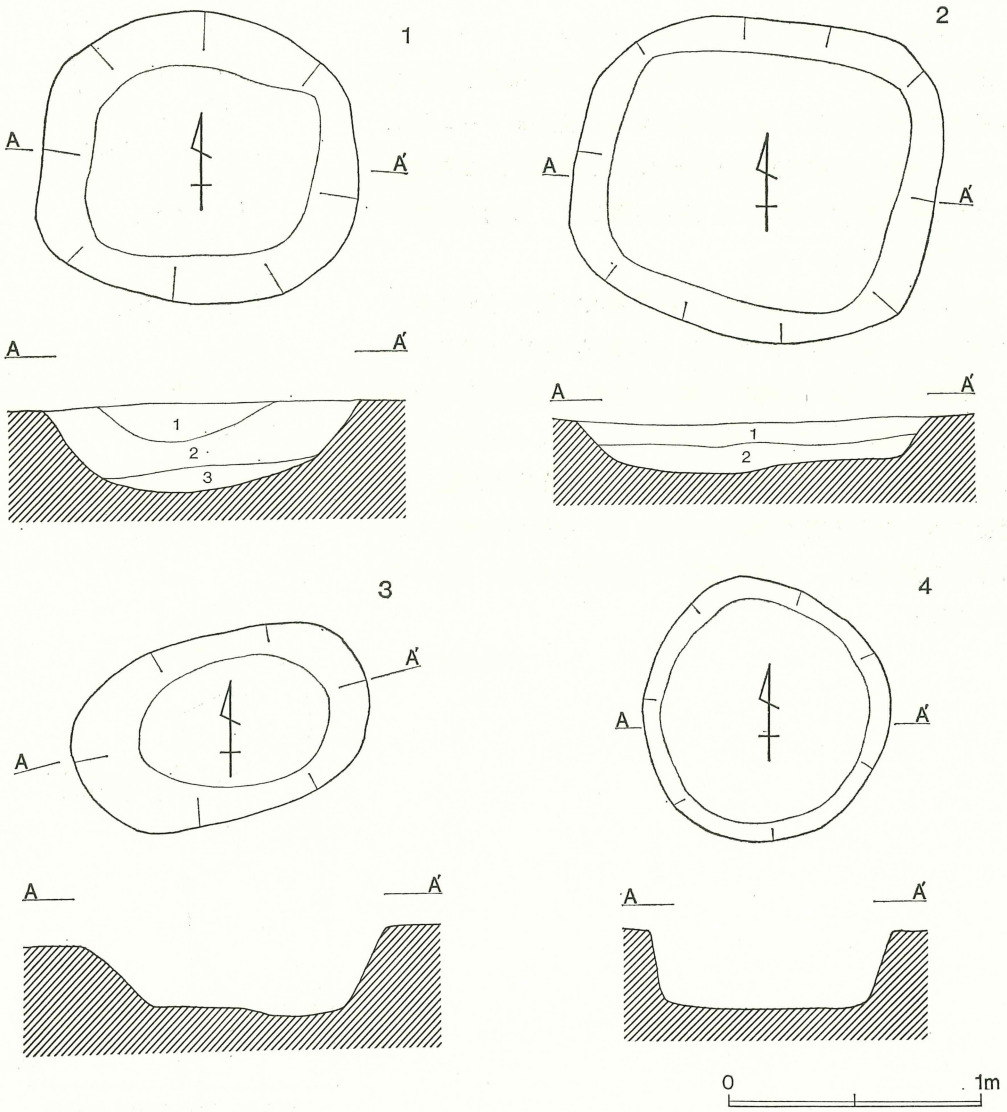
2　遺構と出土遺物

第１号土壙（第４図）

長径126㎝、短径114㎝の不整楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東西である。ローム面から底面までの深さは34㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。フク土は１層黒褐色土、２層暗褐色土、３層黄褐色土が堆積している。遺物は、縄文土器が数片出土しただけである。

第２号土壙（第４図）

長径143㎝、短径125㎝の楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東西である。底面までの深さは17㎝と浅い。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。フク土は、１層黒色土、２層炭化物を多量に含む黒



第４図　土壙１～４実測図

土層：１号土壙　1．暗褐色土　2．褐色土　3．黒褐色土　２号土壙　1．暗褐色土　2．炭化物を含む黒色土

色土が堆積していた。2層の炭化物は底面に付着しており、土壙の性格を表わすとも考えられる。遺物は全く検出できなかった。

第3号土壙（第4図）

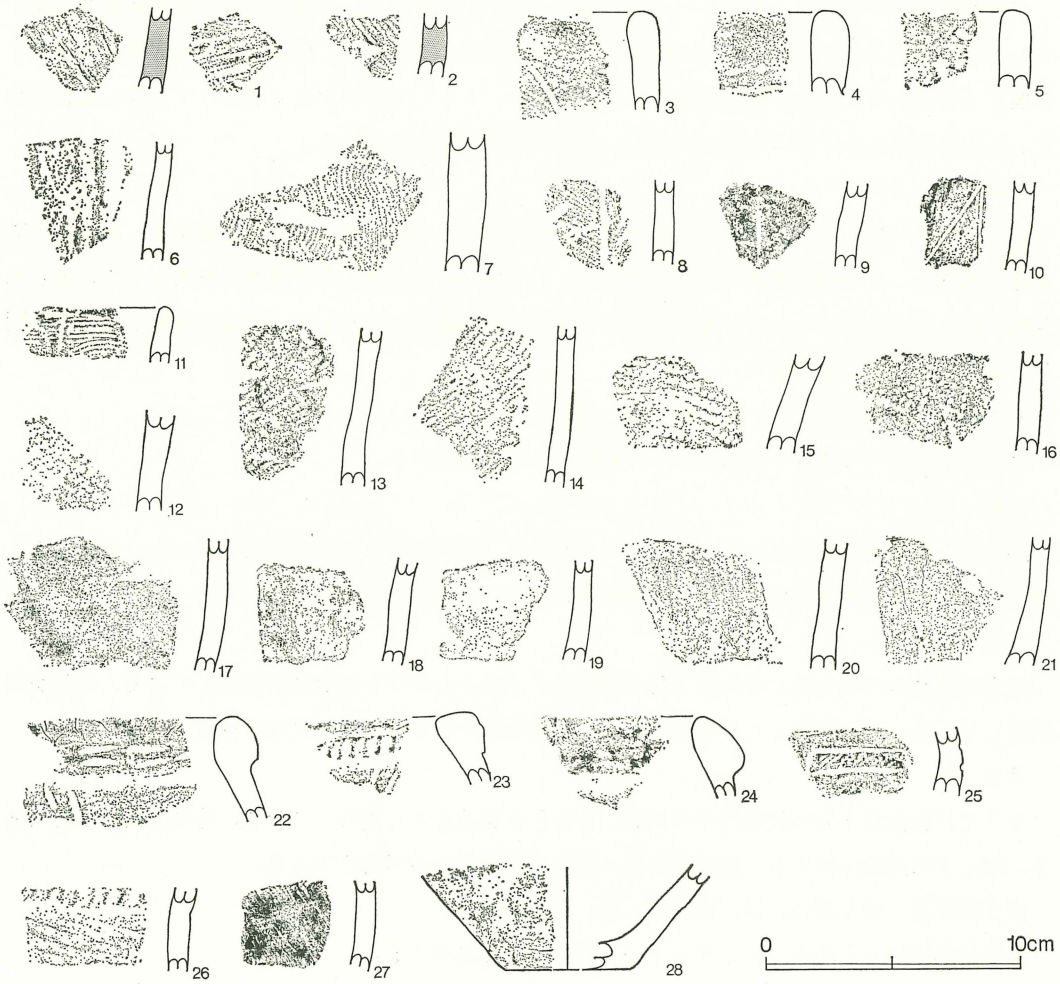
長径120㎝、短径72㎝の楕円形を呈する。ローム面より底面までの深さは32㎝である。底面は平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。長軸方向はN—73°—Eである。フク土は黄褐色土を含む黒色土が堆積していた。遺物は検出していない。

第4号土壙（第4図）

径100㎝の円形を呈する。ローム面より底面までの深さは32㎝を測る。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。いわゆるタライ状の土壙である。フク土は黄褐色土を含む黒色土が堆積していた。遺物は検出されなかった。（宮崎朝雄）

グリッド出土土器（第5図）

中原前遺跡では、縄文時代の遺構は1号土壙1基である。土器片は大部分が表土層から出土し、時期的には縄文時代後・晩期が中心である。第5図に図示したものがその全てではないが、他は小



第5図　中原前遺跡出土土器拓影図

細片であるため割愛した。第１群～５群に分類して説明する。

第１群土器（第５図１、２）

早期後半の条痕文土器である。１は器表裏両面に条痕が施され、２は表面だけに限られる。２片とも比較的薄手で、胎土に多量の繊維を混入する。１は焼成が良く、焼色はにぶい赤褐色である。２の焼色は褐色である。

第２群土器（第５図11）

前期後半の諸磯ｃ式に比定される土器である。口縁部破片で、器形は外反する。櫛歯状工具で描出した直曲線的な集合沈線文で器面を埋めている。胎土に砂粒を混入し、焼成は良好、焼色は明褐色である。

第３群土器（第５図３～９）

中期の加曽利Ｅ式後半段階に比定される土器である。便宜的に口縁部破片と胴部破片を分けて説明する。

Ⅰ類（３～５）

口縁部破片を一括した。キャリパー形土器から変化したもので、口縁部には、連続刺突文（４）や一条の沈線文（５）が巡る。３は口縁部からの懸垂文が連結して、胴部全体で曲線的なモチーフを描く土器である。地文の縄文原体は$L<\frac{R}{R}$である。３片とも器面を良く整形しており、焼成は良好、焼色は褐色からにぶい赤褐色である。加曽利ＥⅢ式に比定される。

Ⅱ類（６～９）

胴部破片を一括した。６は隆帯が懸垂する土器で、８、９は一条の沈線が懸垂する。８は地文に条線が施され、６の縄文原体は$L<\frac{R}{R}$である。７は地文に櫛歯状工具で流水文を表出している。加曽利Ｅ式は後半段階になって、隆帯や沈線の懸垂文や曲線文が連結して、胴部に多様な文様を展開し、また磨消し部が拡大する。

第４群土器（第５図、10、12、15、18、20、21）

後期前半段階の土器を一括した。Ⅰ～Ⅲ類に分けて説明する。

Ⅰ類（10）

深鉢形土器の胴部破片である。鋭く浅い単沈線で、幾何学的な文様を表出している。器面はよく整形されており、焼成は良好、焼色は明褐色である。堀之内Ⅰ式に比定される。

Ⅱ類（12、15）

縄文が施文された土器。深鉢形土器の胴部破片である。２片とも縄文原体は$L<\frac{R}{R}$で、それを縦回転している。器内面はよく整形されており、焼成はやや不良、焼色は暗赤褐色である。

Ⅲ類（18、20、21）

無文で、深鉢形土器の胴部破片である。３片とも器面をよく整形しており、特に内面は平滑である。胎土中に砂粒を混入し、焼成は良好、焼色は赤褐色から明褐色である。

第５群土器（第５図13、14、16、17、19、22～28）

晩期前半段階の土器を一括した。Ⅰ～Ⅴ類に分けて説明する。

Ⅰ類（25）

浅鉢形土器の胴部破片である。一段の縄文帯が配され、縄文原体は$L<^{R}_{R}$である。器面に横ナデの整形痕を残し、焼成は良好で堅緻、焼色は明赤褐色である。安行Ⅲａ式に比定される。

Ⅱ類（22～24、26）

口縁が内湾し平縁の深鉢形土器で、口縁部破片である。22は肥厚した口縁に２段の列点帯が配され、23は爪形文のある紐線がめぐっている。器面は横ナデの整形がされ、焼成は良好、焼色はにぶい赤褐色から明褐色である。24は磨耗が激しく、詳細は不明である。26は胴部上半の破片で、指頭圧痕のある紐線を配している。ヘラによる横ナデの整形が行れて、焼成は良好、焼色はにぶい灰褐色である。Ⅱ類はおよそ安行Ⅲａ式に比定される。

Ⅲ類（13、14、16）

深鉢形土器の胴部破片で、縄文を施している。縄文原体は、13が$L<^{R}_{R}$、14、16は$R<^{L}_{L}$である。器内面はヘラで横ナデの整形がされ、焼成は良好、焼色は明褐色から暗褐色である。

Ⅳ類（17、19、27）

無文土器の胴部破片である。器面の整形は、17が横ナデ、19、27は縦ナデである。焼成は良好、焼色はにぶい暗褐色である。

Ⅴ類（28）

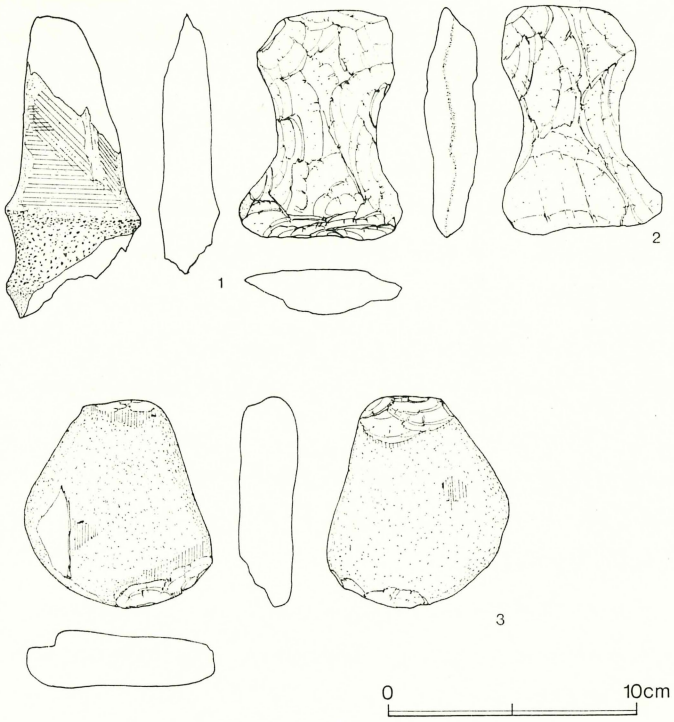
底部破片である。器形は、底部面積が小さく、大きく外反して立ち上がる。縦ナデのヘラ整形をしている。

（鈴木秀雄）

グリッド出土石器（第６図１～３）

１は独鈷石で欠損品、中央部に２本の稜をもち、稜内には敲打痕が残されている。その他は研磨が横位に加えられている。２は打製石斧。風化が著しい。３は扁平な礫に粗く剝離が加えられ、部分的に線条痕が観察される。

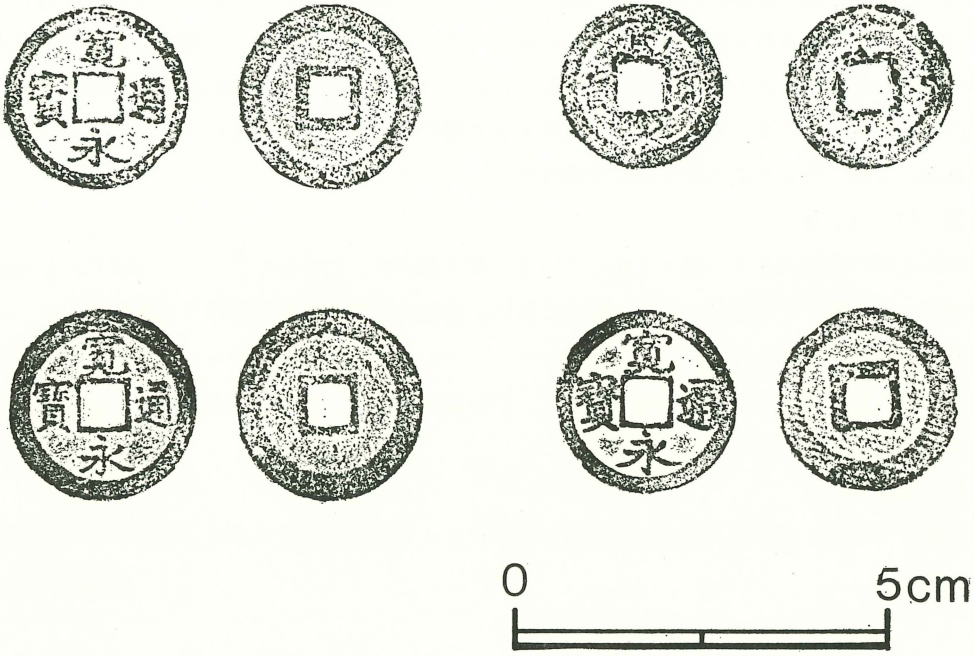
（細田　勝）



第６図　中原前遺跡出土石器実測図

古銭（第７図）

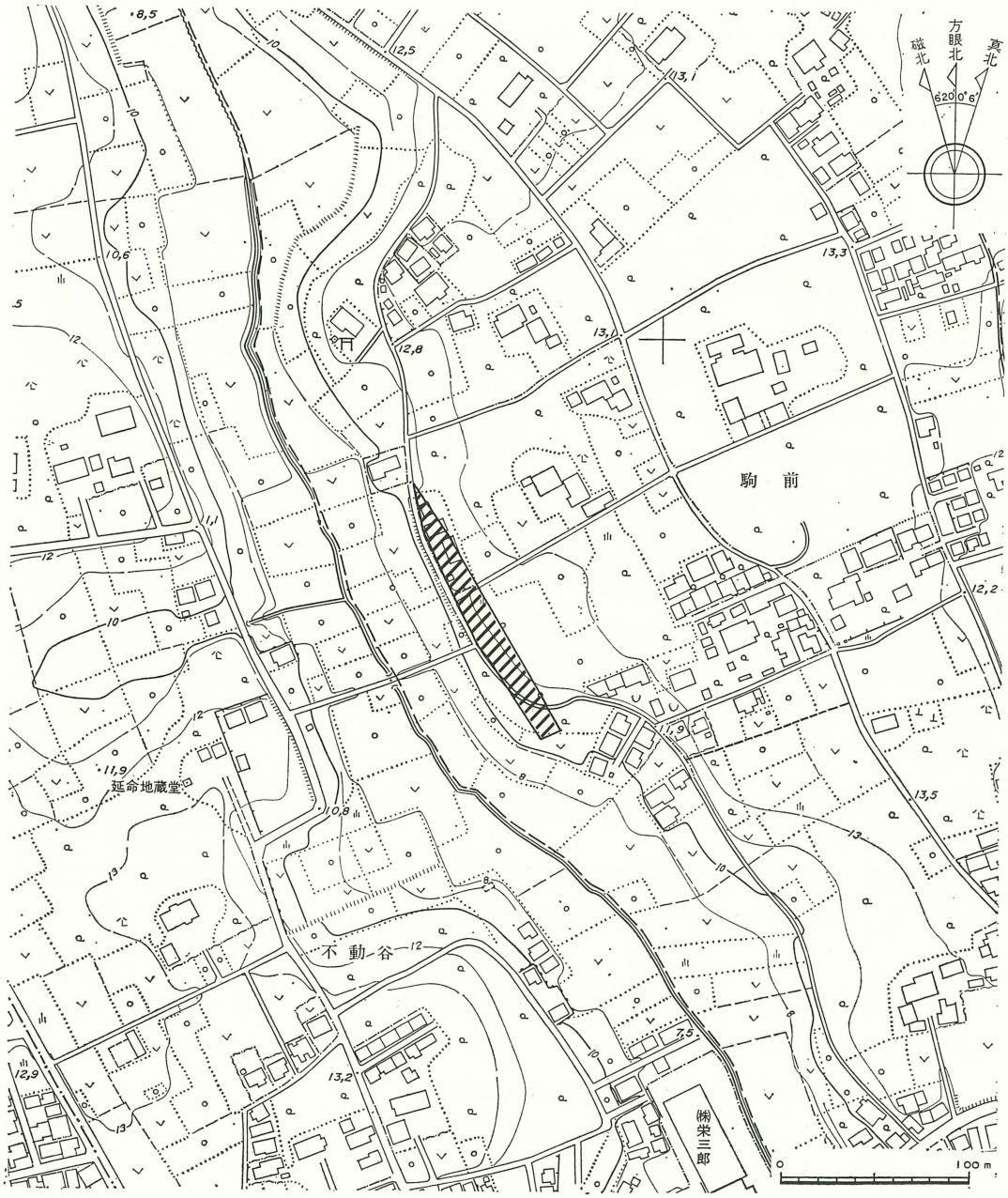
表土より「寛永通寶」が４枚出土した。



第７図　中原前遺跡出土古銭拓影図

Ⅳ　駒前遺跡発掘調査

1　遺跡の概観



第8図　駒前遺跡地形図

駒前遺跡は、芝川から分かれ南から北へ入り込む小支谷を西側に臨む台地上に位置している。ほぼ直線的な台地縁辺部であるが、支谷へいくぶん突出した舌状台地になっており、遺跡はこの突出した舌状台地上に占地している。標高は11m～12mである。台地は全体的には平坦であり、北、南西側へ緩やかに傾斜して低地へ下がっている。低地部は畑地が広がり、台地上も畑地や宅地が多いが、かなりの場所にまだ山林が残っている。駒前遺跡も大部分が山林であった。

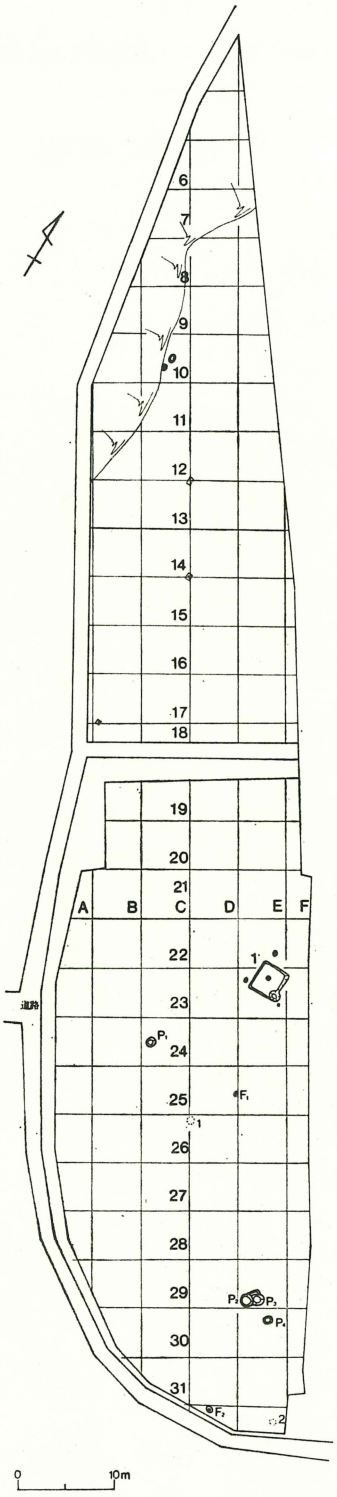
今回の調査区域は縁辺に沿って台地先端部を縦断した事になる。道路のセンターを中心線として５m区画のグリッドを設定し、南北方向を１～35東西方向をＡ～Ｆと付け、各グリッドを１Ａ、１Ｂ、２Ａ、２Ｂと呼称した。調査区中央に幅２mの道路があり、最初に南側調査区から調査を実施した。

南側調査区（19～34・Ａ～Ｆ）は、褐色土の表土約20～30cmでソフトローム層になり、さらに10cm程でハードローム層に達する。一般的に各遺跡でみられる黒色土、黒褐色土等の遺物包含層は認められず、ソフトローム層近くの表土である褐色土中を中心に遺物が出土した。また、山林であったために木の根の攪乱が著しく層位的な堆積は確認できなかった。遺構はソフトローム層の面において確認された。

北側調査区（４～18・Ａ～Ｆ）は、以前宅地であったために攪乱が激しく、さらには台地の縁辺部を走る道路により斜面部がかなり削平されていた。残存状況の良い場所は、南側調査区同様褐色土の表土20～30cmが堆積し、ソフトローム層10cm、ハードローム層となっている。遺物は褐色土中より少量検出されただけである。

調査の結果、縄文時代早期の炉穴３基、集石２か所、前期の土壙１基、平安時代の住居跡１軒、近世の墓壙４基を検出した。

縄文時代早期の炉穴は、南側調査区２基、北側調査区１基である。南側調査区の炉穴は撚糸文期に属し、２基とも５～７m離れた地点に集石が存在する。前期の土壙は北側調査区の北端で検出された。縄文時代の遺物は、早期撚糸文系土器を主体に、子母口式土器、下吉井式土器、前期黒浜式土器、十三菩提式土器、中期五領ヶ台式土器、阿玉台式土器、後期堀之内式土器等の縄文土器と少量の石器が出土した。撚糸文系

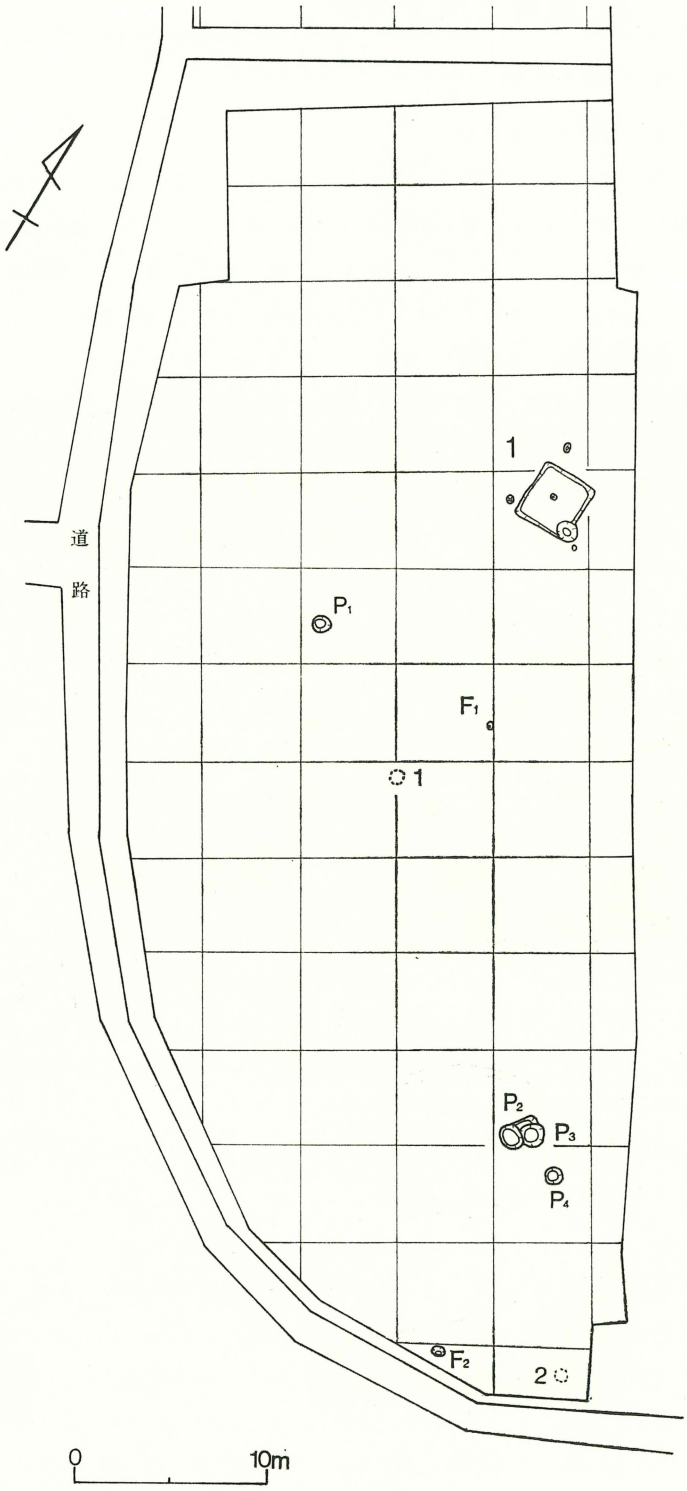


第９図　駒前遺跡全測図 (1)

土器は炉穴、集石周辺から比較的集中して出土し、下吉井式土器は南端の31Fグリッドからまとまって出土した。また十三菩提式土器、五領ヶ台式土器は北側調査区北端から少量ではあるがまとまって出土している。

平安時代の住居跡は、調査区のほぼ中央に位置し、1軒単独で存在した。遺跡は台地の奥である北東側へ広がっているが、住居跡が多数存在するとは考えられず極めて小規模な集落が予想され、特異な住居跡の在り方といえよう。遺物は住居跡から土師器坏、甕の国分式土器少量と完形の鉄製紡錘車1点が出土している。近世の墓壙は、南側調査区で4基検出されそのうち3基は隣接している。1号墓壙からかわらけと古銭、4号墓壙から古銭が出土している。

（宮崎朝雄）



第10図　駒前遺跡全測図（2）

2　遺構と出土遺物

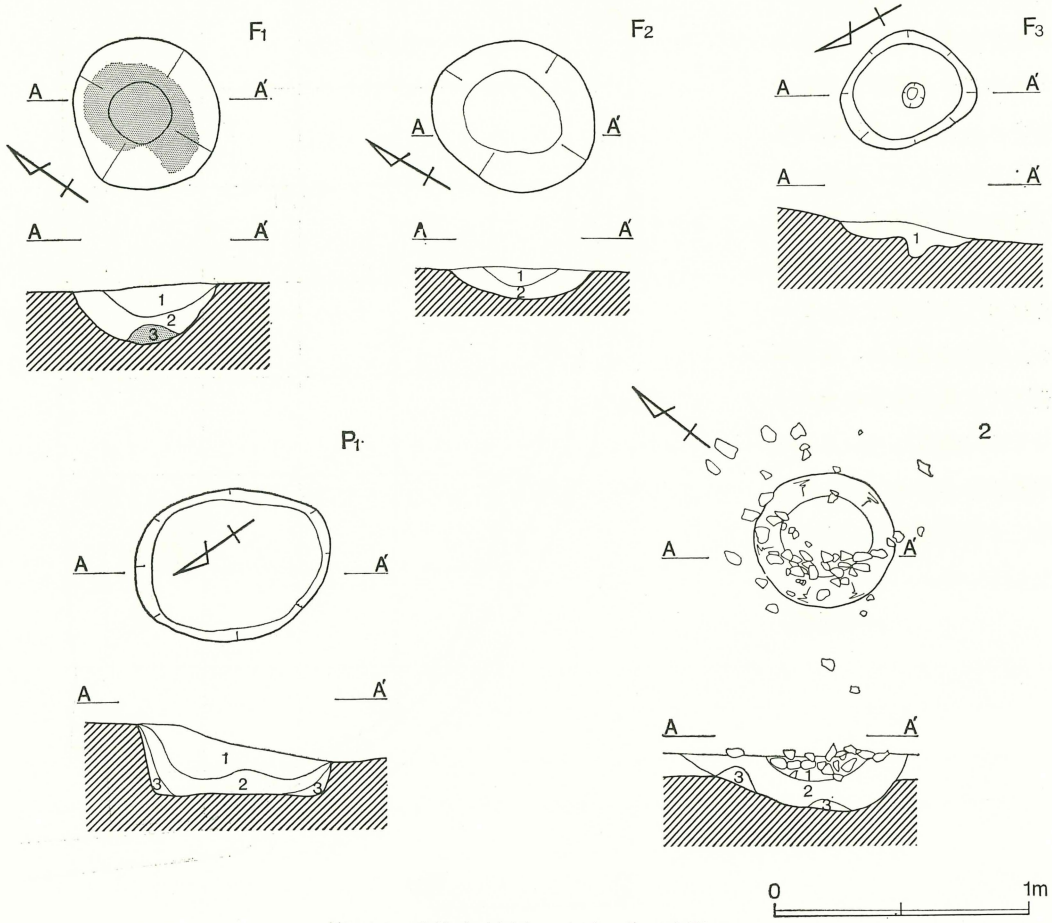
(1)　縄 文 時 代

第１号炉穴（第11図）

南側調査区のほぼ中央で検出された炉穴である。径約60㎝の円形を呈し、ローム層をスリ鉢状に掘りくぼめている。底面の深さは21㎝である。フク土には焼土が堆積しており、底面のローム面はよく焼けて赤化している。遺物としては、壁面に密着して稲荷台式土器の口縁部破片（第13図１）が１点出土しただけである。炉穴上の表土中からは相当量出土している。

第２号炉穴（第11図）

調査区の南端、台地の肩部に検出された炉穴である。長径66㎝、短径56㎝の楕円形を呈しローム層を深さ12㎝と浅くスリ鉢状に掘りくぼめている。長軸方向はほぼ南北である。フク土は暗褐色土が堆積しており、上部に少量の焼土が堆積していただけである。１号炉穴と比較すると極めて焼土が少なく、底面も焼けていない。掘り込みの形態が１号炉穴と類似することと、焼土が若干でも存



第11図　駒前遺跡炉穴、土壙、集石実測図

土層：１号炉穴　1．黄褐色土　2．焼土含む黄褐色土　3．焼土　　２号炉穴 1．2．焼土含む黄褐色土
３号炉穴　1．焼土　１号土壙　1．暗褐色土 2．3．黄褐色土　２号集石 1．2．褐色土 3．黄褐色土

在した事から炉穴と把握した。遺物は炉穴上の表土中からは撚糸文土器が相当量出土しているが、炉穴内からはフク土中から撚糸文土器小片を２点出土しただけである。

第３号炉穴（第11図）

調査区の北端より１号土壙と並んで検出された炉穴である。長径50㎝、短径40㎝の不整楕円形を呈し、底面中央に小ピットを持っている。ローム面の掘り込みは約７㎝と浅いが、炉穴内には焼土が堆積していた。遺物としては周辺から貝殻条痕文土器が若干出土しているが、炉穴内からは全く出土しなかった。

第１号土壙（第11図）

調査区北端に位置し、３号炉穴と並んで検出された。長径76㎝、短径60㎝の楕円形を呈し、底面までの深さは約28㎝を測る。長軸方位はＮ—30°—Ｅである。底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。フク土は１層黒褐色土、２層暗褐色土、３層黄褐色土が堆積している。遺物は、周辺の表土中からは貝殻条痕文土器、前期末の土器が若干出土しているが、土壙内からの出土はなかった。

第１号集石

１号炉穴から南へ約５ｍの地点26Ｃグリッドで確認された集石であるが、木の根の攪乱が著しく遺構としては図示しえなかった。集石は表土から約20～30㎝と浅い褐色土中からその下のソフトローム層上、約１ｍ四方に散在していた。割れた礫が多い。遺物は周辺の表土からは撚糸文土器が相当量出土しているが、集石と確実に伴出する土器は検出されなかった。

第２号集石（第11図）

２号炉穴から東へ約6.5ｍ離れた地点で検出された集石である。表土下約20㎝と浅い褐色土中からソフトローム層上に１ｍ四方の範囲にわたって存在した。石は割れた小礫が多い。集石の下には径55㎝の円形を呈し、深さ20㎝でスリ鉢状にローム層を掘りくぼめた土壙が存在した。フク土は暗褐色土である。遺物は、表土中より相当量の撚糸文土器が出土しているが、集石及び土壙中からは撚糸文土器の小片が数点出土しただけである。

以上の縄文時代の遺構のうち、１号炉穴、２号炉穴、１号集石、２号集石はフク土や表土の出土土器及び配置関係から撚糸文期と考えられる。３号炉穴、１号土壙は周辺からは貝殻条痕文土器、十三菩提式土器が若干出土しており、１号炉穴は貝殻条痕文土器、１号土壙は十三菩提期とも考えられる。

（宮崎朝雄）

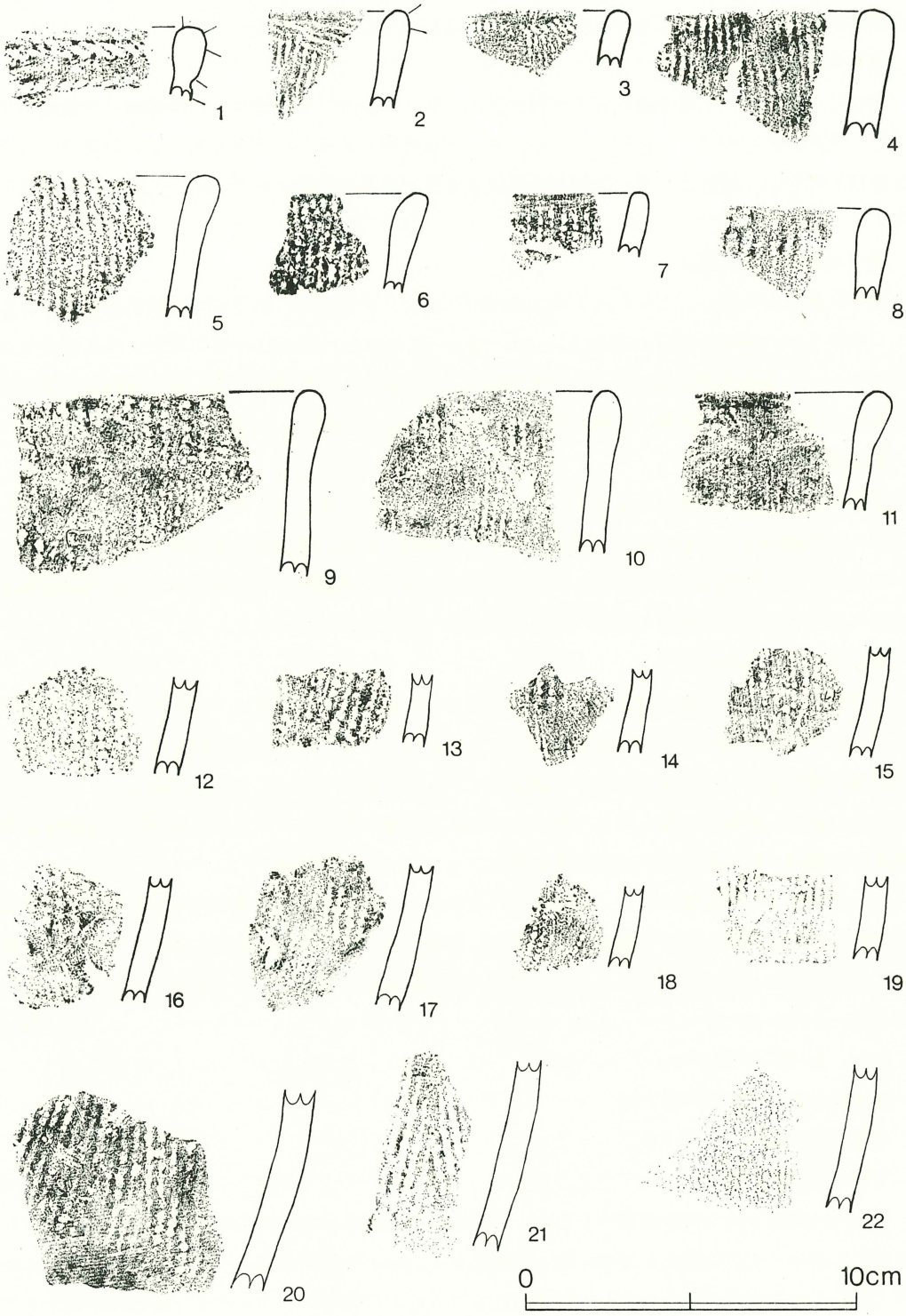
出 土 土 器

第１群土器（第12図～第17図）

撚糸文系土器群を一括する。

Ⅰ類（第12図１）

口唇部文様帯を持つ口縁部破片である。口唇部は若干肥厚して外反する。２列の縄文帯を持ち、いずれも原体Ｒ＜$\frac{L}{L}$の縄文を口唇に沿って施文している。口唇下は幅１㎝のナデられた無文部を持ち、その下の括れ部に１条の撚糸圧痕を巡らしている。口縁部以下は欠けているため不明であるが縄文が施文されると考えられる。口縁部の厚さは約３㎜と薄い。色調は赤褐色を呈し、黄褐色が主体をなす他類とは異なっている。胎土は砂質であるが、焼成は良好で堅緻である。井草Ⅰ式に比定



第12図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (1)

される。

Ⅱ類（第12図２、３）

口縁直下に横位の文様帯を１段持ち、以下縦位の文様を施文している土器である。

２は、口縁下に幅約１㎝の撚糸文を横位に巡らし、その後に撚糸文を縦位に施文している。撚糸文はＬである。口唇部は丸棒状を呈し、内側が若干直線的である。色調は明褐色を呈す。

３は口縁直下に縄文を横位に１段巡らし、以下縦位に施文した土器である。縄文の原体は$R<\frac{L}{L}$である。口唇部は角頭状である。胎土は砂質で、色調は黒褐色を呈する。

Ⅱ類は夏島式に比定される。

Ⅲ類（第12図４～６）

口縁直下から縄文を縦位に施文する土器である。縄文の間隔は密であり、原体は4～6ともR<$\frac{L}{L}$である。口唇部は丸棒状を呈しているが、４は若干平坦、５は肥厚し、６は内側がそがれている。胎土、焼成とも良好であり、色調は黒褐色を呈する。

Ⅲ類は夏島式に比定されよう。

Ⅳ類（第12図７～22）

やや条間隔が広く、粗い縄文を縦位に施文する土器である。器面は丁寧に磨かれている。縄文原体はR<$\frac{L}{L}$の土器が多い。口唇部は丸棒状を呈し、８～11は肥厚している。９、11は口縁部で若干れ、外反気味に立ち上がる。11は口縁部が幅２㎝ほど磨かれて無文になっている。

胎土、焼成とも良好で堅緻な土器が多い。色調は、９、11、22が赤味を帯びた黒褐色、10、20、21は黄褐色、他は褐色を呈する。

Ⅳ類はおおよそ稲荷台式に比定される。

Ⅴ類（第13図17～28、第14図１～27）

条間隔の広い撚糸文を縦位に施文する土器である。原体Ｒの撚糸文を口縁直下に若干の無文帯を残して口縁部以下に施文している。17は撚糸文の条が比較的深く密であるが、18～23は浅い施文であり、条の間隔も極めて広い。器面は丁寧に磨かれ光沢を持つ土器が多い。口唇部は21が角頭状を呈する以外は丸棒状を呈し、肥厚している。13図24～28と14図は胴部破片であるが、いずれも条間隔の広い撚糸文を縦位に施文している。撚糸文の条は細く、原体はＲが大部分であり、Ｌも若干存在する。胴部は口縁部に比較して薄く器厚は、約５㎜である。

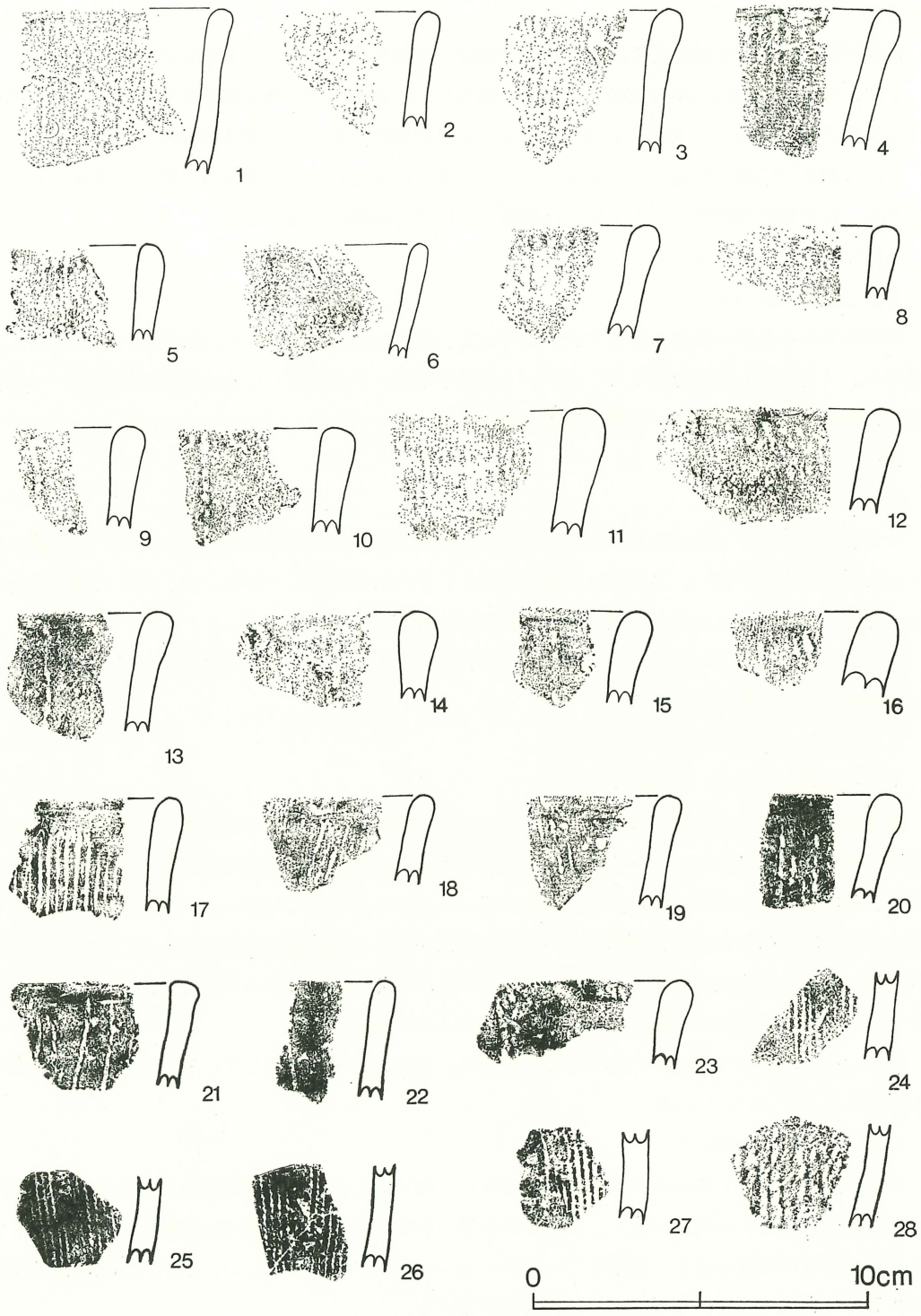
胎土、焼成は良好で堅緻な土器である。色調は、褐色、黒褐色を呈している。Ⅴ類は稲荷台式に比定される。

Ⅵ類（第13図１～16）

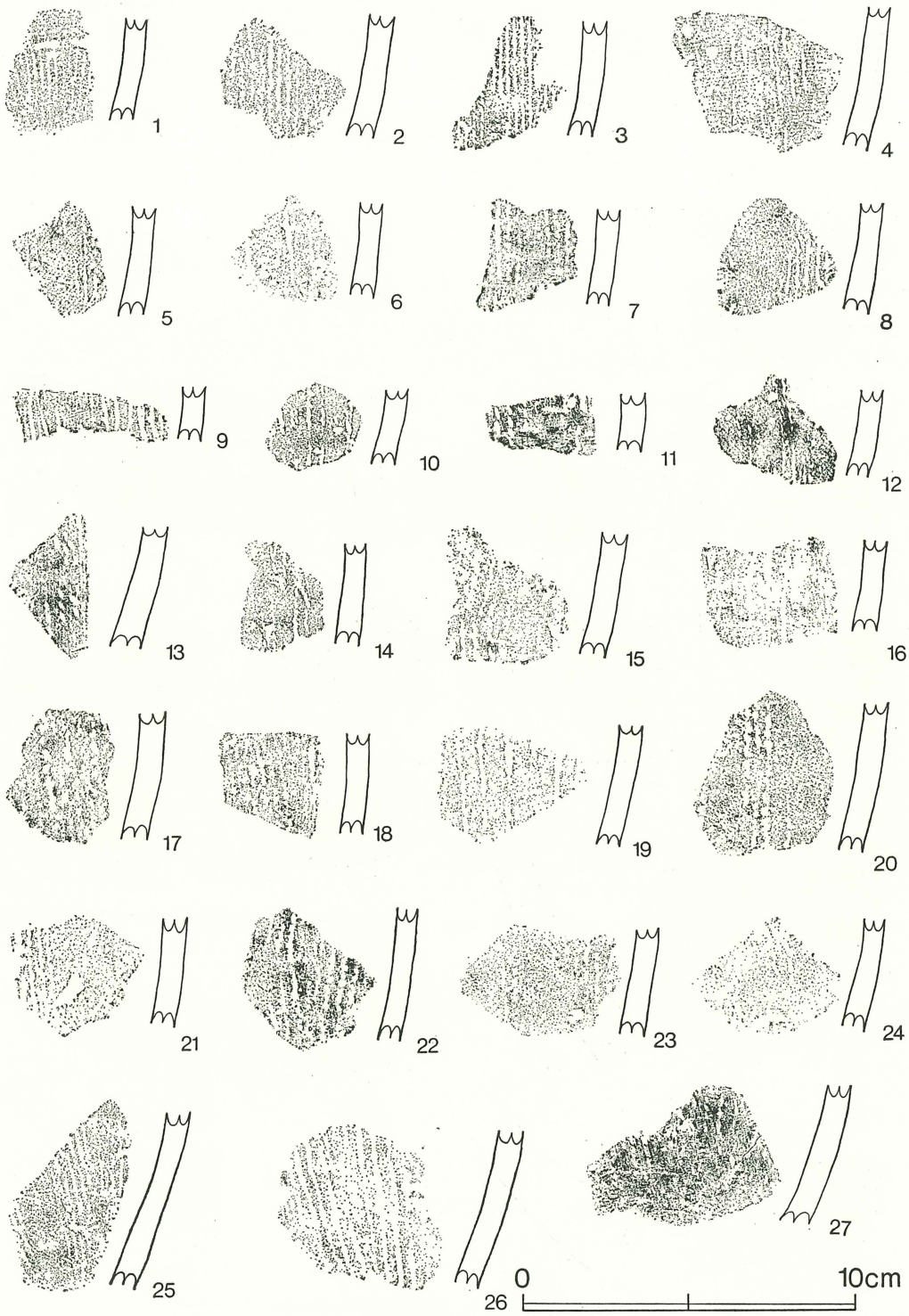
器面が荒れているために施文原体が明瞭でない土器であるが、大部分は撚糸文を施文するⅤ類に属すると思われる。条間隔が広く、口縁下に若干の無文部を残して口縁部以下縦位に施文している。口唇部は丸棒状を呈し、肥厚しているが、９～16は特に肥厚が著しい。胎土、焼成は良く堅緻である。色調は１、６が赤褐色、他は黒褐色を呈する。

Ⅵ類は稲荷台式に比定される。

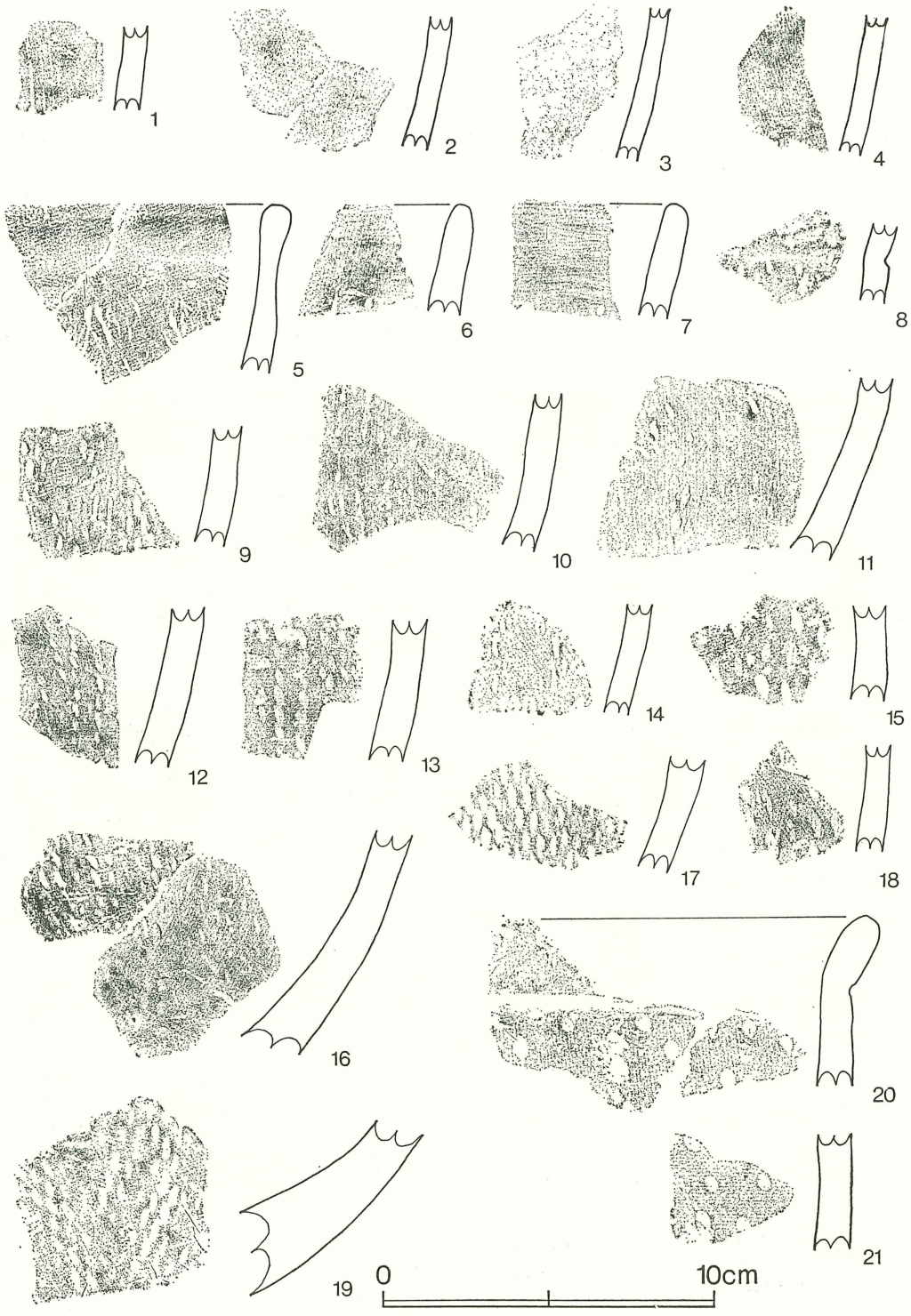
Ⅶ類（第15図１～４）



第13図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (2)



第14図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (3)



第15図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (4)

糸のような節が小さく細い条の撚糸文を縦位に施文する土器である。撚糸文はRである。胴部破片だけであり口縁部は出土していないが、Ⅴ類と類似する土器と考えられる。条の間隔は広く、器面は丁寧に磨かれている。器厚は約4㎜と薄い。胎土、焼成は極めて良好で堅緻である。色調は黒褐色を呈する。

Ⅷ類（第15図5～19）

Ⅶ類とは対称的に節が大きく条の太い撚糸文を縦位に施文する土器である。条間隔は広く粗い施文である。撚糸文の原体はRである。

5は、若干肥厚する丸棒状の口唇部を持つ。頸部が凹線状にくぼめられ幅広な口縁部無文帯を形成している。節が大きく条の太い撚糸文を粗く施文している。胎土は砂質であるが焼成が良く堅緻である。色調は赤みを帯びた褐色を呈する。器面は丁寧に磨かれている。

6、7は角頭状の口唇部を持ち、直線的に立ち上がる口縁部破片である。幅広の口縁部無文帯を持つ。頸部の括れや凹線は無く胴部以下に節が大きく条の太い撚糸文を施文している。器面は丁寧に磨かれている。器厚は8～10㎜と厚手の土器である。胎土、焼成とも良好で堅緻である。色調は黒みを帯びた褐色を呈する。8は、頸部に沈線状の段を持つ土器である。口縁部は幅広な無文帯と思われる。器面は丁寧に磨かれている。色調は黒みを帯びた褐色を呈する。

9～19は胴部及び底部付近の破片である。いずれも節が大きく条の太い撚糸文を粗く施文している。16、19のように底部まで撚糸文を施文している。器面は丁寧に磨かれつやを持つ土器が多い。器厚は8～10㎜と厚手である。特に底部では厚く20㎜にもなっている。胎土、焼成とも良好で色調は、褐色を呈する土器が多い。

Ⅸ類（第15図20、21）

胴部に刺突文を施文する土器である。20、21は同一個体である。口唇部は肥厚し丸棒状を呈する。沈線状の段を持つ頸部が括れ、外反する口縁部無文帯を形成している。口縁部無文帯は約2㎝と幅が広い。刺突文は、径5㎜前後でいくぶん楕円形を呈し、器面には浅く施文されている。刺突面が丸みを持つ棒状工具により軽く刺突したものと考えられる。文様は鋸歯状の山形文を数段重ねたと考えられる。器面は極めて丁寧に磨かれ光沢を持っている。器厚は10㎜と厚い。胎土、焼成とも良好で色調は黒褐色を呈する。

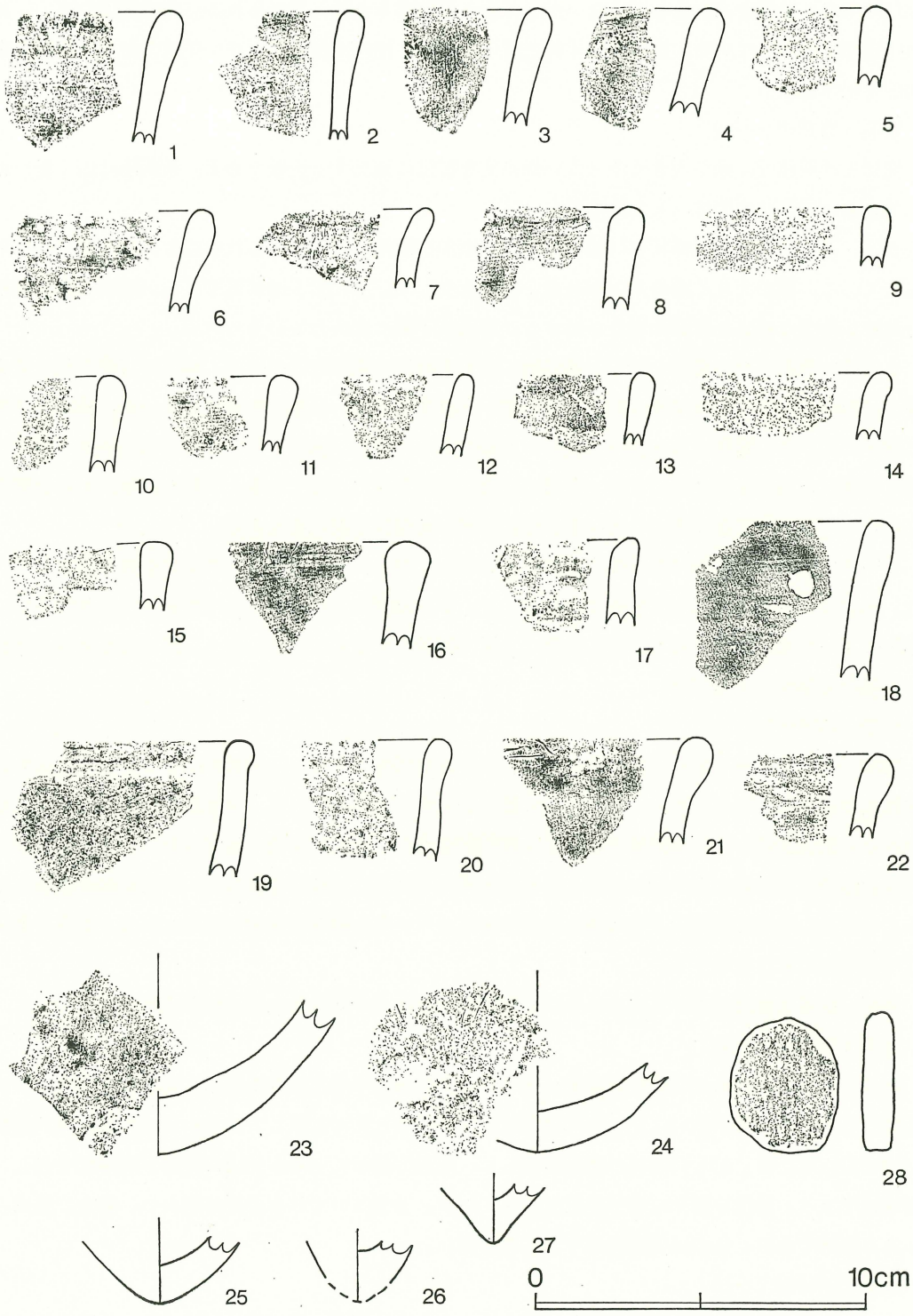
Ⅷ類、Ⅸ類は稲荷原式に比定されるが、Ⅸ類は花輪台式の刺突文土器に類似する。

Ⅹ類（第16図1～22）

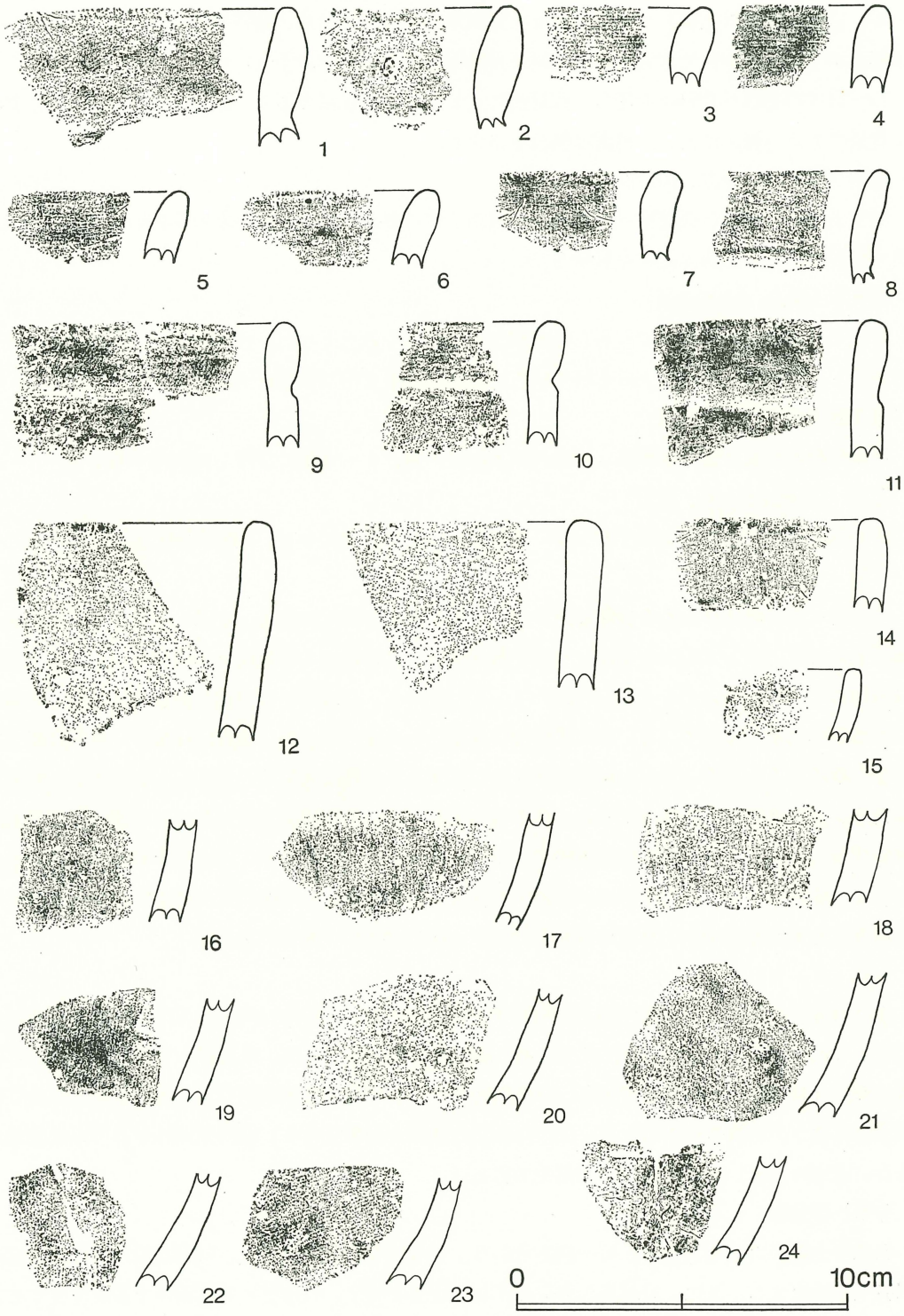
おおよそ稲荷台式に伴う無文土器を一括する。1～14は口唇部が若干肥厚し丸棒状を呈する。直線的に外反する土器が多い。15、16は口唇部が10～12㎜と特に肥厚している。15の口唇部は角頭状を呈している。21、22も口唇部の肥厚が著しく、頸部で括れている。18は口唇部が角頭状を呈し、直線的である。19は口縁下に若干の段を持っている。Ⅹ類はいずれも器面が磨かれ、胎土、焼成とも良く堅緻である。色調は褐色を呈するものが多い。

Ⅺ類（第17図1～15）

おおよそ稲荷原式に伴う無文土器を一括する。1～11は頸部に沈線状の凹線あるいは段をめぐらし、幅広な口縁部無文帯を作っている。1～6、9は口唇部が肥厚し丸棒状を呈している。口縁部



第16図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (5)



第17図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (6)

無文帯は3㎝前後と幅が広く、頸部には凹線が巡っている。10は頸部の凹線が鋭く沈線状になっている。口唇部は9に比較して肥厚が少なく角頭状を呈する。11は、頸部に段を持っている。1～11は器面が丁寧に磨かれ光沢を持つ。色調は黒味を帯びた褐色を呈する。

12～14は口唇部が角頭状を呈し、直線的に立ち上がる口縁部である。器面は擦痕状である。胎土は砂質であるが焼成は良い。色調は褐色を呈する。

Ⅻ類（第16図23～27、第17図16～24）

無文土器の胴部及び底部を一括する。器面は丁寧に磨かれ光沢を持つものが多い。胎土、焼成が良く堅緻である。色調は褐色を呈する。

円板状土製品（第16図28）

Ⅵ類の胴部破片を利用して作られた円板状土製品が1点出土した。長径4.0㎝、短径3.2㎝の楕円形を呈し、周囲は丁寧に仕上げられている。色調は黒味を帯びた褐色である。（宮崎朝雄）

第2群土器（第18～20図）

早期貝殻条痕文土器の前段階に位置付けられる一群。Ⅰ～Ⅶ類に分類して説明する。

Ⅰ類（第18図1～6、23）

絡条体の側面圧痕文を施文する土器。その施文手法の相違からa、b種に分ける。

a種（1～3、23）

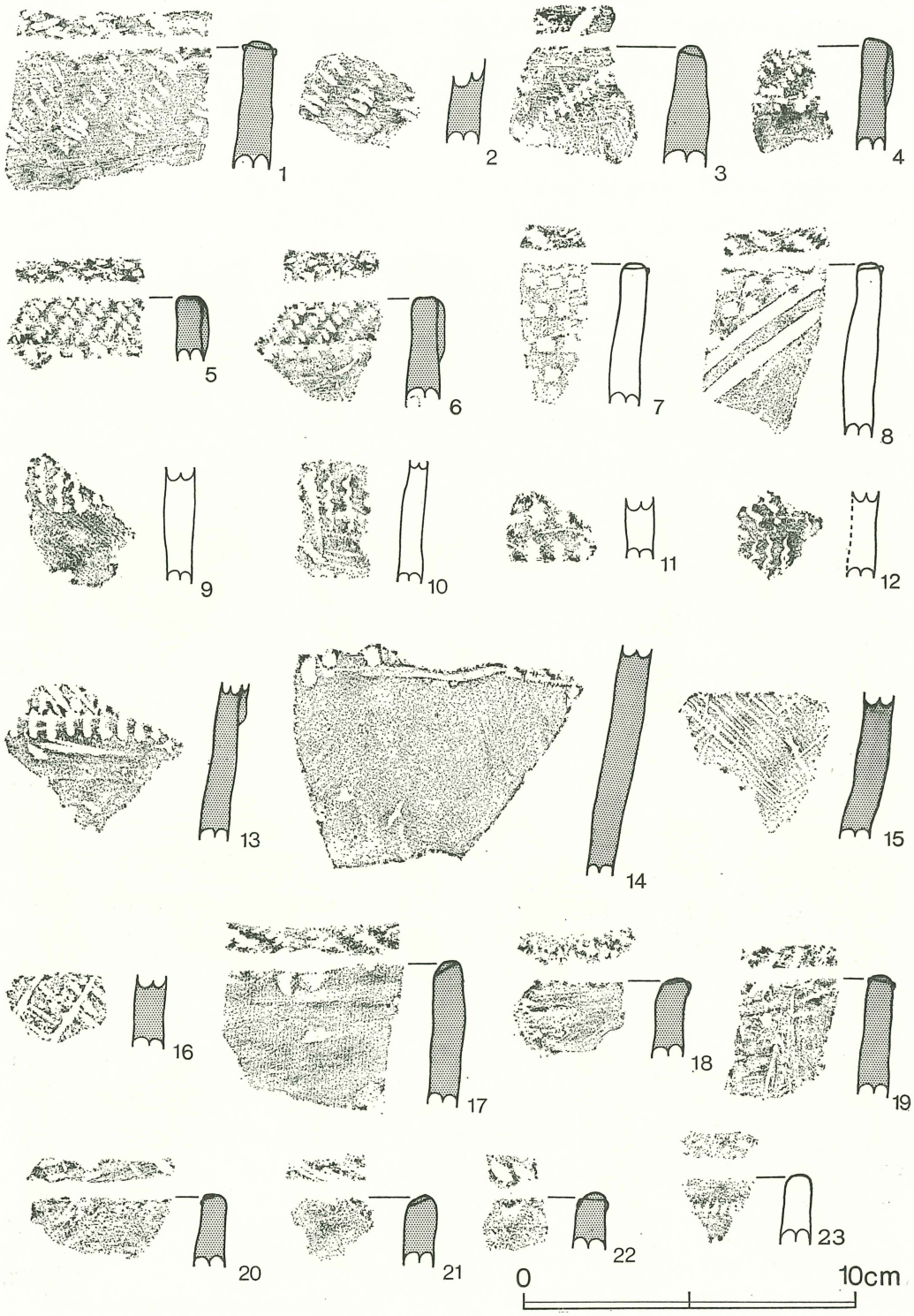
1、3、23は深鉢形土器の口縁部破片で、1と2は同一個体である。1は、L$<^{r}_{r}$の単軸絡条体側面を、口縁に沿って斜位に連続して押圧施文する。口唇部にも同原体を押圧するが、その施文は口縁部の圧痕文と対応するように行われる。したがって、口縁部と口唇部の圧痕文は連結して羽状の文様表出効果を上げている。施文順位は口唇部から口縁部である。器表面は横位、内面は斜位に明瞭な擦痕がみられる。胎土に繊維と砂粒を混入するが、焼成は良く、手にしっとりとした感触を与える。焼色はにぶい赤褐色である。3の原体はR$<^{1}_{1}$の単軸絡条体である。口唇部に棒状工具を押圧する。器表面に横ナデの擦痕を残す。胎土に繊維と砂粒を混入し、手にした感触にはざらつきがある。焼成は良く、焼色はにぶい黄褐色である。23は絡条体を口縁に沿って横位に押圧施文する。口唇部にも密に押圧する。胎土に繊維を含まず、焼色はにぶい褐色である。

b種（4～6）

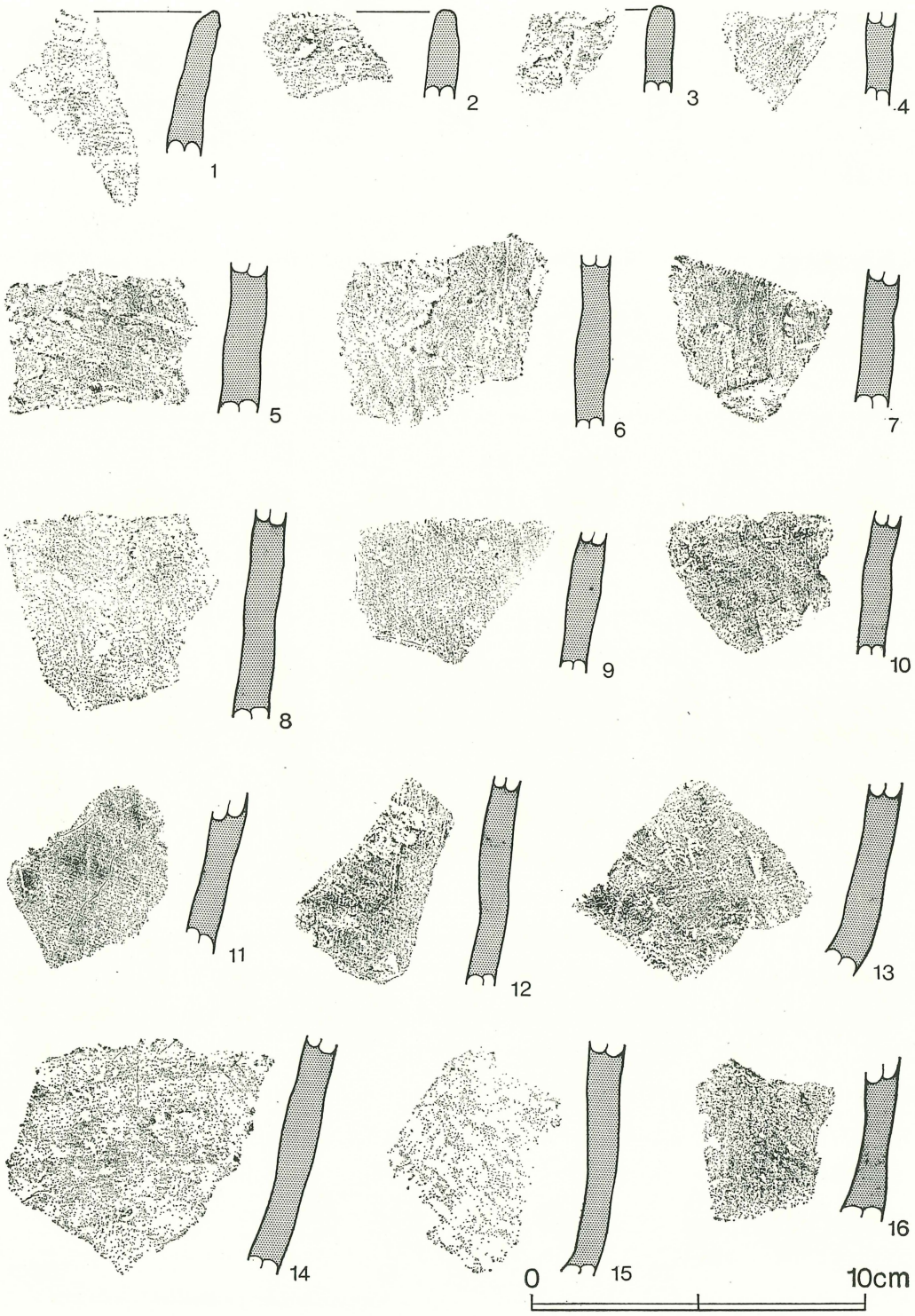
複合口縁の隆帯部に絡条体圧痕文を施文する土器である。4～6は同一個体で、口縁の成形は削いだように扁平である。絡条体圧痕文は密に連続して押圧施文され、口唇部にも同原体を押圧する。施文順位は口唇部から口縁部である。隆帯部直下には、2対の連続刺突文を同時施文している。器表面には横ナデの擦痕がみられる。胎土に微量の繊維と砂粒を含み、器内面にはざらついた感触がある。焼成は良好、焼色はにぶい黄褐色である。

Ⅱ類（第18図7、8）

深鉢形土器の口縁部破片で、同一個体である。半截竹管工具を使用し、口縁に沿って数段の連続刺突文を施文する。8は、口縁から斜位に平行沈線文を施す。口唇部には絡条体を押圧施文する。器表面は整形の擦痕をわずかに残し、平滑である。内面はざらついた感触がある。胎土に繊維をほとんど混入せず焼成は良好、焼色は暗褐色である。



第18図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (7)



第19図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (8)

Ⅲ類（第18図９～13）

貝殻腹縁文を施文する土器である。９～12は同一個体で、深鉢形土器の口縁に近い部位の破片と思われる。貝殻腹縁を、縦位や斜位（12）に連続して、器面に強く押圧している。器表面の整形は平滑で良好、擦痕はみられない。内面はざらついた感触がある。胎土に繊維を含まず、焼成は良好、焼色はにぶい橙色である。13は口縁に近い部位の破片で、破片上端に複合口縁の隆帯部を一部残す。隆帯上には、一度貝殻腹縁文が施文され、それを掻き消すようにヘラ状工具で斜位の沈線文が刻まれている。隆帯直下には爪形状の連続刺突文が施文される。器表面には擦痕がみられ、胎土には微量の繊維を混入する。焼成は良好で、焼色はにぶい橙色である。

Ⅳ類（第18図14～16）

沈線文を施文する土器である。14は深鉢形土器の胴部下半部の大形破片である。胴部上半を区画する横位の沈線と、懸垂する沈線の下端がみられる。器表面には擦痕がわずかに残る。胎土には繊維と砂粒を混入し、内面には繊維の脱去痕がみられる。焼成は良好、焼色はにぶい褐色である。15は、櫛歯状工具を使用して、斜位の集合沈線文を表出する。胎土に微量の繊維と砂粒を混入する。焼成は良好、焼色は褐色である。16は、細い竹管状工具を用いて、格子目状沈線文を表出する。胎土に微量の繊維と砂粒を混入する。焼成は良好、焼色はにぶい赤褐色である。

Ⅴ類（第18図17～22、19図１～３）

便宜上、無文土器の口縁部破片を一括した。さらに、口唇部に押圧文や刻目文等を施文したものをａ種、施文しないものをｂ種とする。

ａ種（17～22）

概して口縁は丸棒状に成形され、外反せずにほぼ直立した器形を呈する。17、18、20は絡条体圧痕文を施文する。原体の押圧は口縁に対して斜位に行われ、18は密に、20は不規則で疎らに施文している。口縁の成形を歪めるように強く押圧するのが特徴的である。19は貝殻腹縁の押圧文、21は刻目文、22は丸棒状工具を用いて太い沈線を押圧施文している。17～22は、器表面に擦痕を残し、胎土には繊維を混入する。焼成は良好で、焼色は全般的ににぶい褐色である。

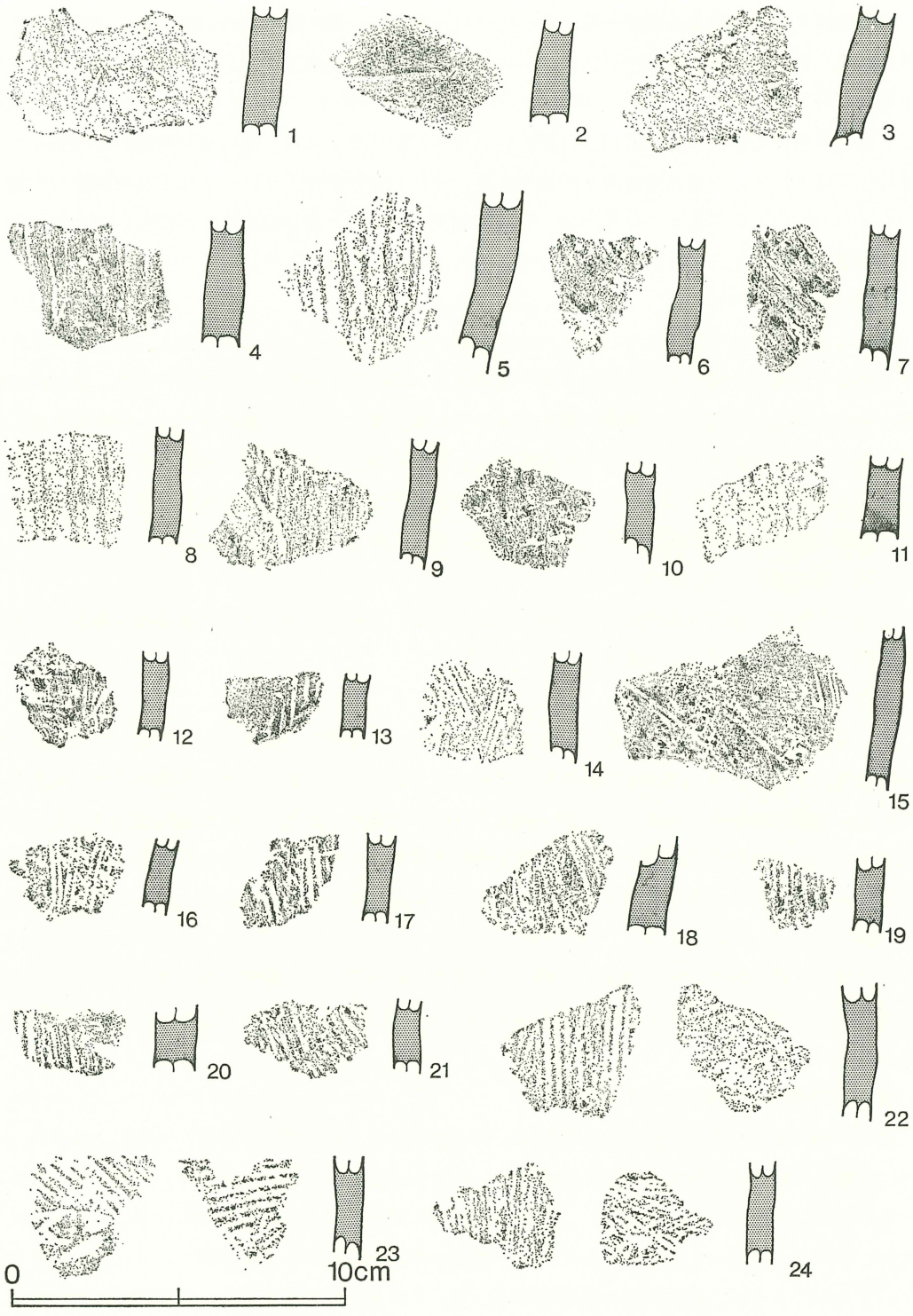
ｂ種（１～３）

１は緩かな波状縁で、やや外反した器形を呈する。口縁の成形は鋭角で突出する。２、３は丸棒状である。いずれも器表面に擦痕がみられ、内面にはざらついた感触がある。胎土に繊維を混入し、焼成は良好である。

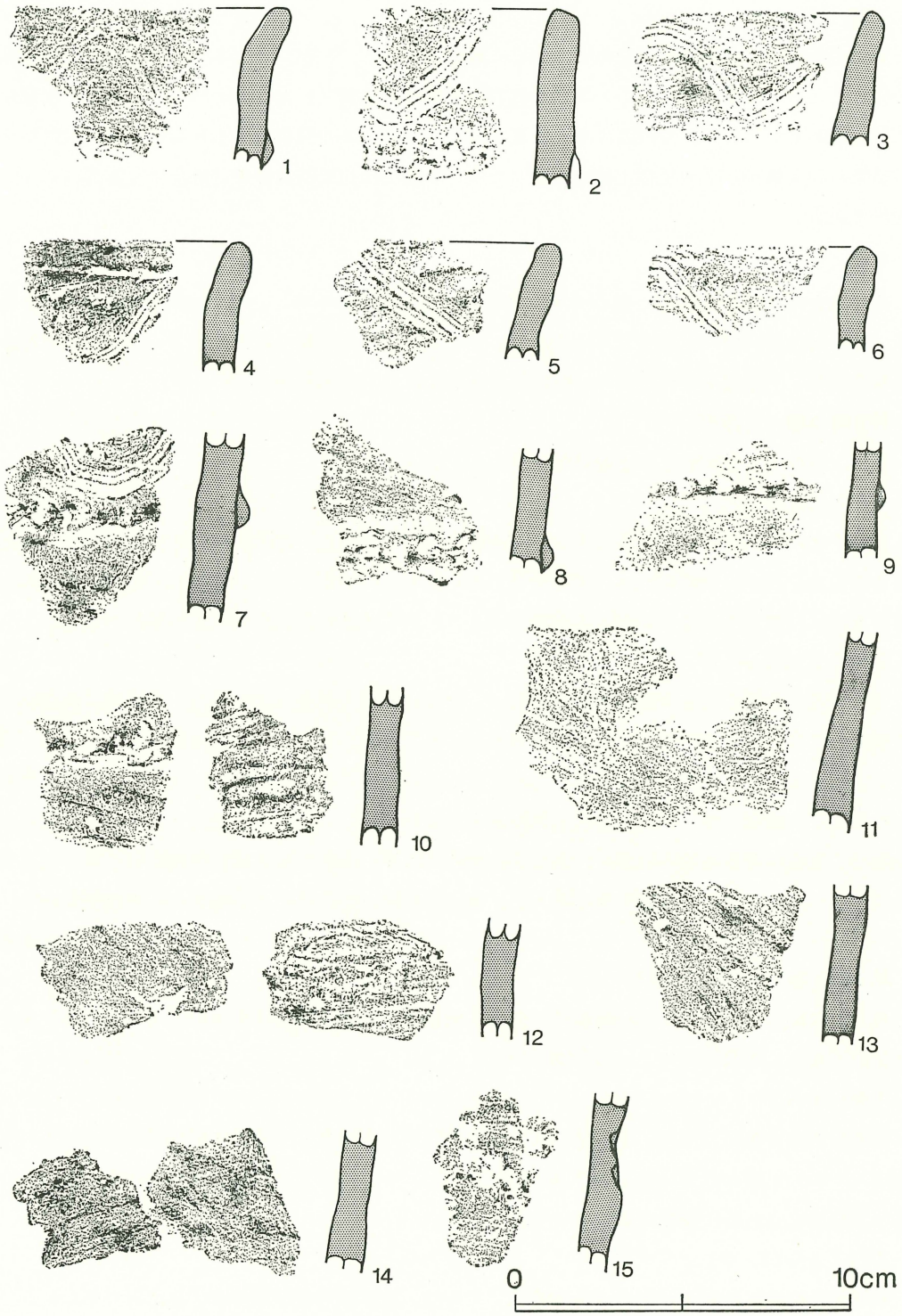
Ⅵ類（第19図４～16、20図１～３）

無文土器の胴部破片を一括した。器形は、胴部上半でやや外反するか直立して立ち上がり、下半では外反して緩かな屈曲から底部に至るものと考える。器表面はよく整形され、擦痕がみられる。それは斜位（19図５、15、20図３）、横位（19図14、20図２）や縦位（19図７、８、11など）にみられ、手にした感触はしっとりとしている。内面に擦痕がみられるのは19図６、８、14、15や20図１、２などであるが、概ね内面の整形は不充分で、手にざらつき感がある。各々胎土に繊維を混入し、焼成は良好である。

Ⅶ類（第20図４～24）



第20図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (9)



第21図　駒前遺跡縄文土器拓影図 ⑽

条痕文を施文する土器で、a、b種に分類する。

a種（4～15）

条痕文を施文した後、それをぬぐうように磨消している。一部（4、8）に擦痕状のものを残していることから、工具には、Ⅰ～Ⅵ類土器の器面整形に使用されたものと同様で、柔らかな繊維束状の工具が考えられる。器内面に条痕を施すものはなく、また擦痕もみられない。7、12は胎土中の繊維の混入量が、Ⅰ～Ⅵ類土器に比較して多い。焼成は比較的良好で、焼色は全体的ににぶい赤褐色である。

b種（16～24）

条痕文を施文した土器で、縦位や斜位で粗雑に施したものが多い。22、23は条痕を明瞭に施して、22～24は器内面にも施文している。18、20、21は胎土に繊維の混入量が多く、20、21はほかの土器に比較して焼成も不良である。焼色は全体的ににぶい赤褐色である。

第3群土器（第21図）

茅山下層以降、早期終末の土器群を一括した。

Ⅰ類（第21図15）

茅山下層式に比定される土器である。深鉢形土器の口縁に近い部位の破片で、口縁部と胴部を区画する屈曲を持つ。口縁部には、半截竹管工具を使用した連続刺突文が平行して懸垂する。器表面には擦痕状の整形痕が残る。胎土に繊維を混入し、焼成は良好、焼色はにぶい褐色である。

Ⅱ類（第21図1～14）

下吉井式に比定される土器である。器形は、口縁の成形が不充分であるが、平縁で、口縁部はやや屈曲して外反する。胴部は単純な円筒形を呈すると考えられる。1～14は同一個体である。口縁部を区画する隆帯は形状が不安定で、だらしなく貼り付けされる。隆帯上には刺突状の刻目文が加えられる。口縁部には、半截竹管状工具を2本対にして用い、波状文が描出される。その波形は不規則で、沈線の表出も器面に深く行わない。胴部には浅い条痕が施され、内面にも一部（10、12）条痕がみられる。胎土に繊維を多く混入し、焼成は良好、焼色はにぶい褐色から赤褐色である。

（鈴木秀雄）

第4群土器（第22図1～13）

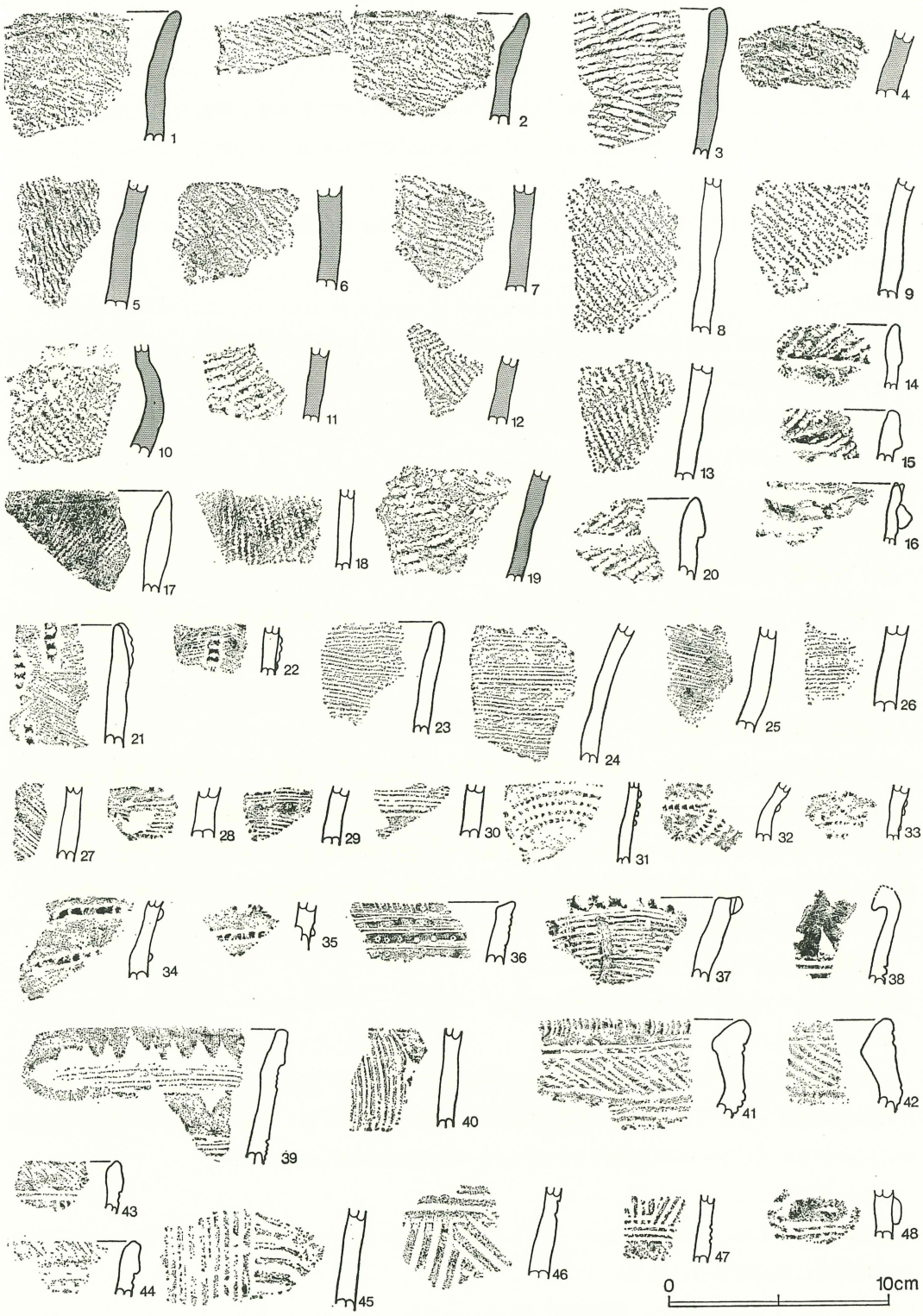
黒浜式に比定されるものを一括した。全体に無繊維か、微量に繊維を含むもので、いずれも焼成は堅緻である。施文原体によって分類した。

Ⅰ類（1～7）

無節の縄文を施したもの。1～2は同一個体で口唇は円味をもつ。3は口唇が角形でいずれも内面はていねいに磨かれている。施文原体は1～2、4、7はR $\left\{\begin{matrix}1\\1\end{matrix}\right.$ 3、5～6はL $\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$ であり、斜位回転施文される。繊維は微量に含まれる。

Ⅱ類（8～13、19）

単節縄文を施したもの。原体は全てR $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$ である。19は節の粗い原体を、他は撚りのしっかりした原体を用いている。8～9は横回転、12は羽状縄文をもつ。19は繊維を少量含むが、他は無繊維で赤褐色を呈し、小礫を含む。時期的には下降するものとも思われる。



第22図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (11)

第5群土器（第22図17～18、21～30、37）

諸磯ｂ～ｃ式に比定される土器群

Ⅰ類（23～30）

口縁に併行して櫛状工具による条線文がめぐるもの。条線文は6本を一単位とし、条線間には無文部がある。全体の形状は不明であるが、同一個体の可能性がある。灰白色を呈する。

Ⅱ類（21～22）

地文に平行、鋸歯状の櫛歯文をもち、口唇から刻目の施された隆帯が垂下するもの。隆帯状の刻みは円い棒状のものであると思われる。

Ⅲ類（37）

口唇外面に突出するように隆帯が貼付され、その後、地文に半截竹管内面によって集合沈線が施される。口唇隆帯にはヘラ状工具によって鋭い刻みが加えられる。口唇下に縦に垂下する隆帯が貼付され、一部剝落している。内面は研磨されている。

第6群土器（36）

口唇形態は第5群Ⅲ類と共通し、口唇に刻目をもち、口唇下は半截竹管内面により沈線施文後、円形刺突列が加えられている。

第7群土器（第22図31～35）

結節浮線文をもつ土器群。十三菩提式に比定される。31～33は地文に縄文をもち、曲線的な文様モチーフをもつと思われる。34～35は地文をもたず、直線的モチーフをもつと思われる。前者に比して結節の間隔が広く隆帯も扁平である。

第8群土器（第22図38～40）

三角印刻文をもつ土器群、前群との関係が問題となる土器群である。38は口縁が内屈し、口唇上につまみ上げたような貼付をもつ。口縁には交互に三角印刻文をもち、印刻下に竹管内面の沈線が引かれる。39～40は同一個体と思われ、印刻ある折り返し口縁をもち、X字形の区画をもつものと思われる。口縁、及び口縁下に竹管外面による集合沈線をもち、無文部には三角印刻文が加えられている。40は39の胴部破片と思われる。

第9群土器（第22図41～48、第23図1）

五領ヶ台式に比定されるものを本群とした。

Ⅰ類（41～48）

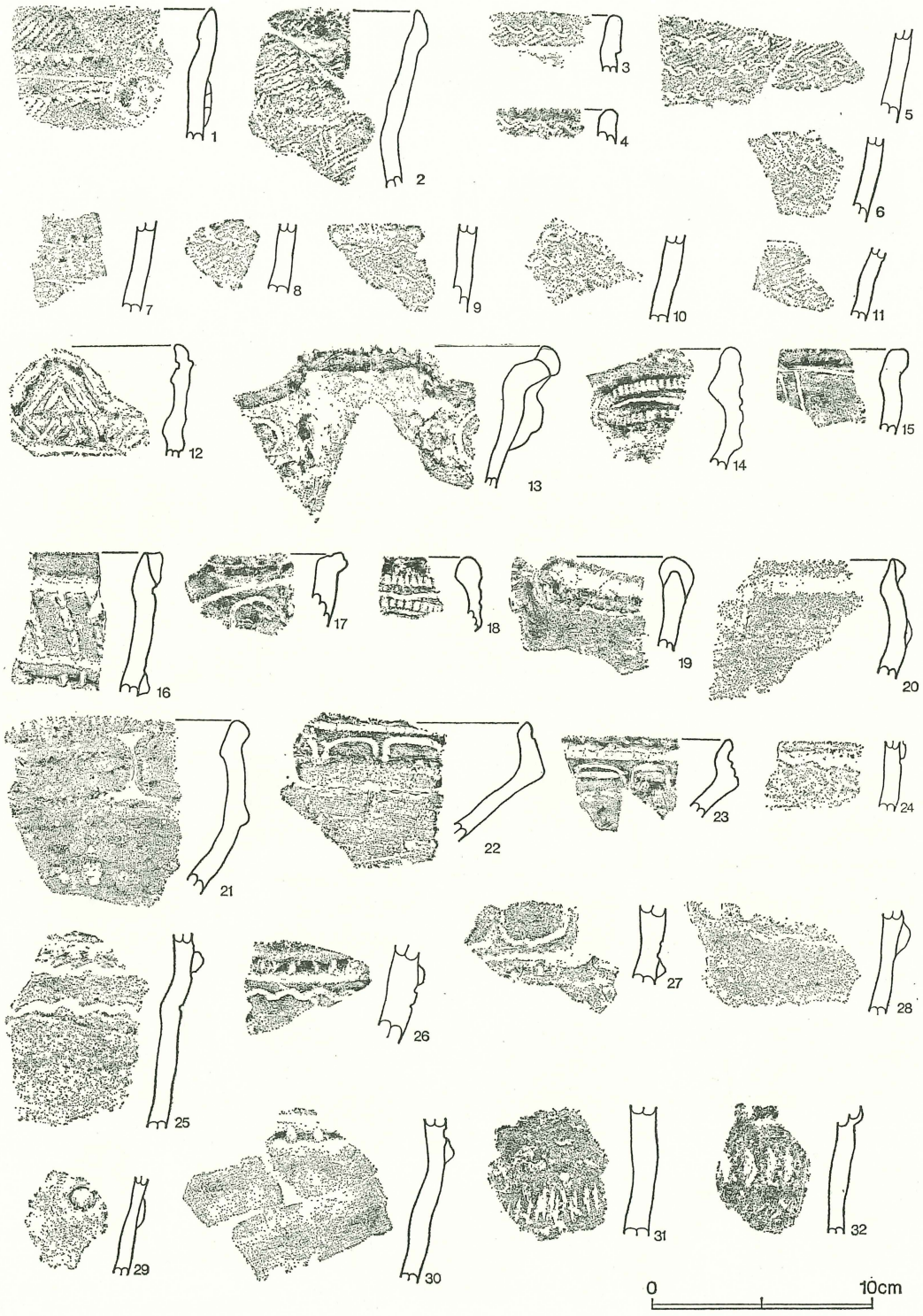
集合沈線文系土器群である。41～42は同一個体である。半截竹管による半隆起線をもつ、41～42は口縁部は格子目状となる。口縁内面に稜をもつ。43、44は折り返し口縁をもち、口縁部には斜めに沈線が施される。45～47は胴部破片。41～42、46は雲母の混入が著るしい。

Ⅱ類（第23図1）

地文に縄文をもち、口縁下の沈線と平行して刺突文が加えられる。口縁部には「の」字状の貼付文。器内面に沈線をもつ。

第10群土器（第22図14～16、第23図2～11）

前期末～中期初頭に位置づけられる縄文、無文の土器群



第23図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (12)

第24図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (13)

Ⅰ類（14～16）

折り返し口縁をもち、口唇は鋭り気味で、薄手である。地文にはＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の原体が横位施文される。口唇上に縄文はみられない。暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

Ⅱ類（16）

口縁に併行して隆帯の廻るもの。隆帯は円味をもち、押圧が加えられる。

Ⅲ類（第23図２）

折り返し口縁をもち、口縁～胴部に節の細かな縄文Ｌ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$が横位回転される。口縁は折り返し部分が厚味をもち、下端はなでられて明瞭でない。

Ⅳ類（第23図３～11）

折り返し口縁をもつが、口唇は頂部が円味をもち、折り返し部分はさほど肥厚しない。器面全面に結節もつ縄文Ｌ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$で綾絡文が施される。

第11群土器（第23図12～32、第24図１～８）

阿玉台式土器、及び近似の土器群を一括し、施される竹管文から分類した。

Ⅰ類

隆帯に沿って角押文、有節線文をもつもの。12は山形波状縁で二列の幅狭い角押文で鋸歯文を描く、器内面には刺突があり、口唇部には刻みがみられる。13は15と同一個体。扇状把手をもつが、把手部分は口唇上からあまり突出せず、円味をもたない。口唇上には刻みが加えられる。隆帯側面には浅い有節線文が枠状に施される。14は波状口縁と角押文をもつ。16は口縁部隆帯に併行して角押文と、更に傾斜する角押文が加えられる。口唇上、器面に斜角押文が施される。22～23は浅鉢形を呈する。屈曲する口縁部に平行角押文と「∩」字形の角押文をもつ、口唇上には円みをもった押圧が斜めに加えられる。口縁部破片は全て内面に稜をもつ。24～32は胴部破片。27は口縁下～胴部破片。

Ⅱ類（19～21）

無文の口縁部破片を一括した。19は口唇に粘土紐を貼付し、頂部をなぞりによって「凹」状に整形する。双頭状をなす。20、21は同一個体の可能性がある。粘土紐を貼付し、なぞりを加えて「Ｘ」形の区画を作り出す。隆帯は断面三角形を呈する。

Ⅲ類（第24図１～８）

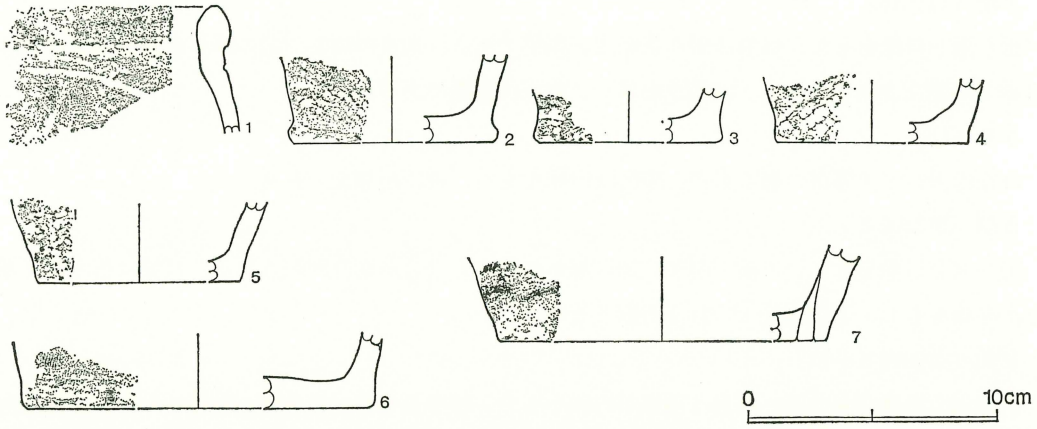
扁平で幅広の角押文、剣先状角押文をもつものを含めた。１～５は同一個体と思われる。楕円区画文内には隆帯に沿って角押文が廻り、区画内には横位に鋸歯状に角押文が施される。６は細い隆帯に沿った角押文と区画内を縦に充塡する角押文をもつ。７は３本併行する幅の狭い角押文列をもつ。８は剣先状の角押文をもつ。Ⅰ～Ⅱ類は胎土に雲母を含み、赤褐色を呈するものが多いが、本類には雲母が含まれず灰白色、乃至は褐色を呈する。

第12群土器（第24図11～22）

加曽利Ｅ式に比定されるもの。

Ⅰ類（第24図11～18）

胴部に沈線で区画された磨消縄文をもつもの。11、14～16、18は、口縁部文様帯に接して直線的に垂下する磨消縄文をもつもの。11、15は磨消文の幅が狭い。施文原体は11がＲ$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\L\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$、12がＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$、



第25図　駒前遺跡縄文土器拓影図 (14)

他はR $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$である。

Ⅱ類（第24図19）

微隆起線で曲線的モチーフを描くもの。微隆起線に沿って指頭でのナゾリが加えられる。

Ⅲ類（第24図21～22）

地文に撚糸文をもつもの。21は口縁が内湾し、二条の沈線が廻る。22は曲線的モチーフをもつ。原体はともに単軸絡条体R $\left\{\begin{matrix}1\\1\end{matrix}\right.$である。

第13群土器（第24図23～39）

称名寺～堀之内式に含まれるものを一括した。

Ⅰ類（23～25）

沈線と列点からなる文様をもつもの。沈線は断面円形で浅く、沈線間に列点が一列に加えられる。

Ⅱ類（26～33）

地文に縄文をもつもの。26は口縁下に一条と、それに接して３条の懸垂文をもつ。28～29は口縁下に沈線が廻り、口縁無文帯を作出する。30は内面に一条の沈線をもつ。31は地文上に浅く竹管内側での平行線文をもつ。地文は26、28～29がL $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$、27、29～30、33がR $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$、31はR $\left\{\begin{matrix}1\\1\end{matrix}\right.$である。

Ⅲ類（第24図34～39）

地文に縄文をもたないもの。35は肥厚する口縁部に沈線が廻り、沈線間には刺突が加えられている。36は内面に沈線が一周する。34、37～38は平行沈線文が施文されている。39は隆帯に沿って沈線が施され、隆帯上には円形刺突文、斜めの刻みが加えられている。

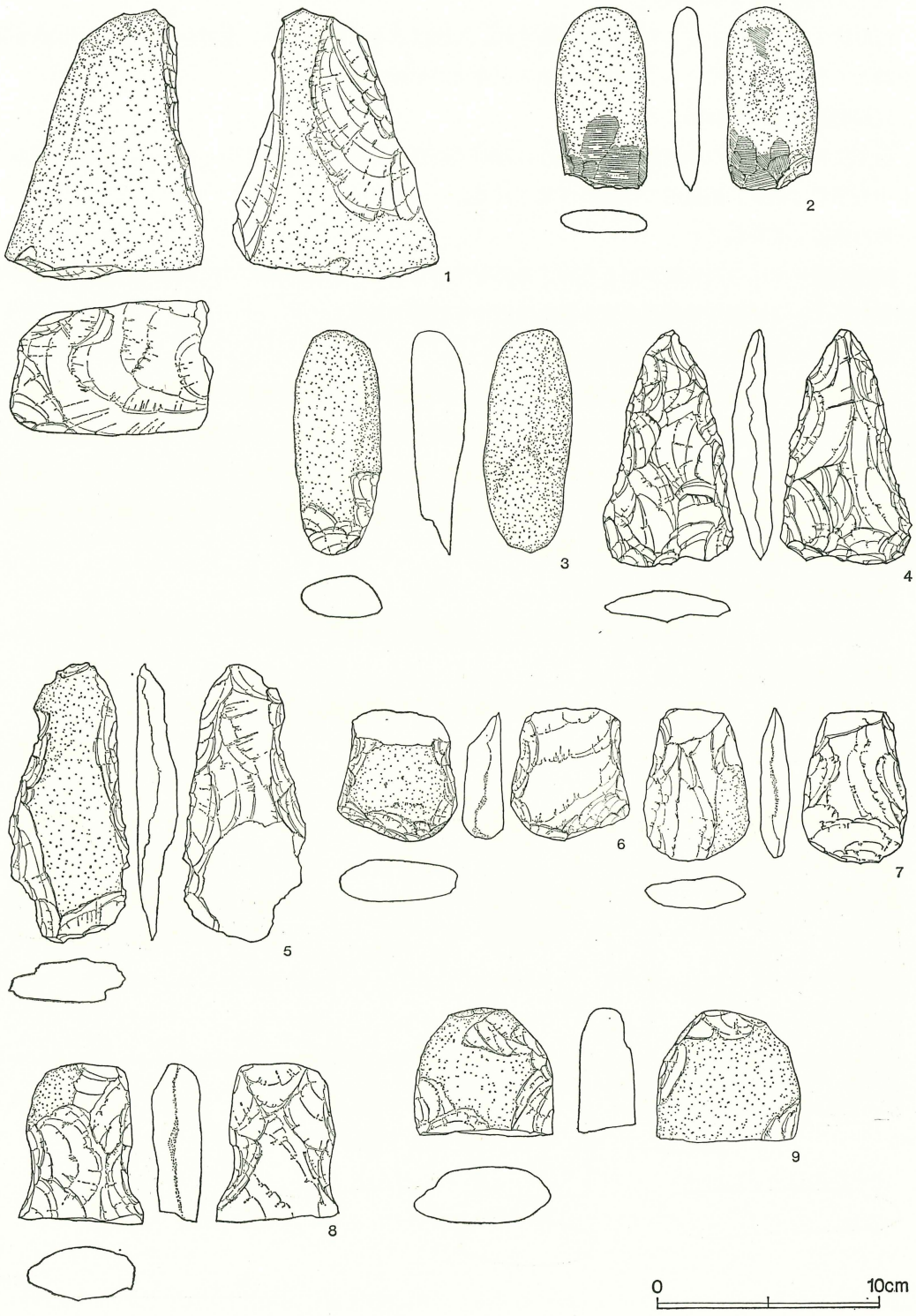
第14群土器（第25図１）

安行式土器に比定されるもの、口縁端は鋭り気味で若干肥厚し、下端に沈線が廻る。

土器底部（第26図２～７）

２は、第４群に、３～５は第５～７群に、６～７は第13群土器に対比される。

（細田　勝）



第26図　駒前遺跡出土石器実測図 (1)

出土石器（第26図・27図）

スタンプ形石器（第26図１）

台形状で底面は大きく二方向から剝離され、背面は大きく剝離され、左方からの細かい二次剝離を加えて形状を整えている。両面に自然面を残すが片面は未剝離。

局部磨製石斧（第26図２）

扁平な礫の片面にのみ剝離が加えられ、両面は研磨を加えて刃部を作出している。研磨は両面とも中央部では横位、側縁部では斜位に施される。

片刃礫器（第26図３）

棒状の礫片面にのみ剝離が加えられ、刃部を作出したもの。縁辺部の二次剝離は粗雑で、磨耗痕等なし。１～３は縄文早期撚糸文土器に伴出する石器である。

打製石斧（第26図４～９、第27図１）

４は両面とも左右から大きな剝離が加えられ、更に縁辺部に二次剝離が密に加えられ、全体に丁寧なつくりとなっている。５は片面に大きく自然面を残し、刃部は一部欠損。６～９、第27図１は欠損品、６～７は風化が著しい。８は中央部に浅い抉りをもち、敲打痕が集中している。９は円味をもった礫両面に剝離を加え、大きく自然面を残す。第27図１は板状の緑泥片岩の縁辺部を剝離し形状を整えたもの。縁辺部は磨耗が著るしい。

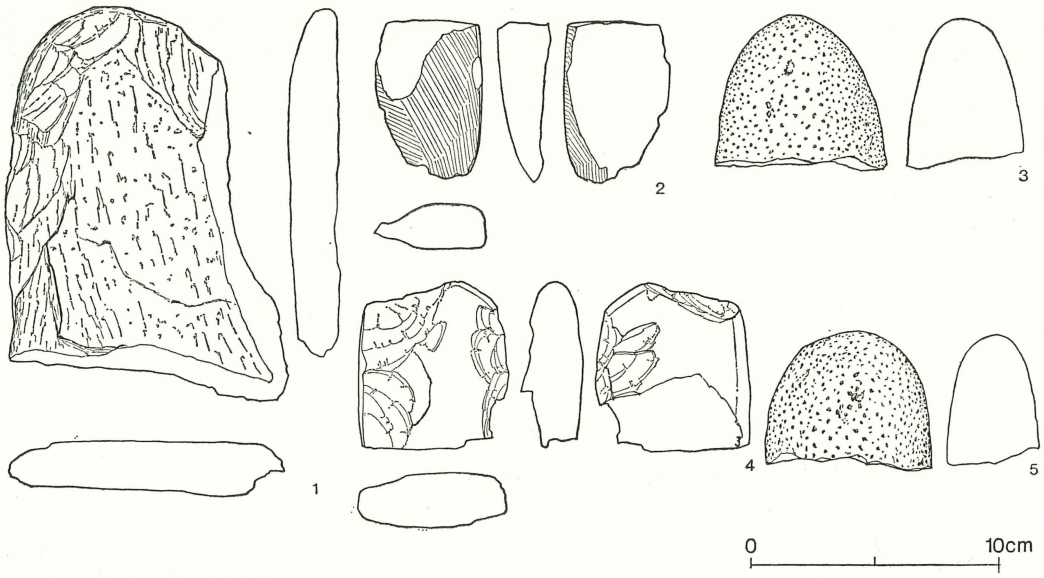
磨製石斧（第27図２、４）

ともに欠損品、２の刃部は蛤刃形を呈する。欠損部分に研磨が加えられ、再利用品と思われる。

磨石（第27図３、５）

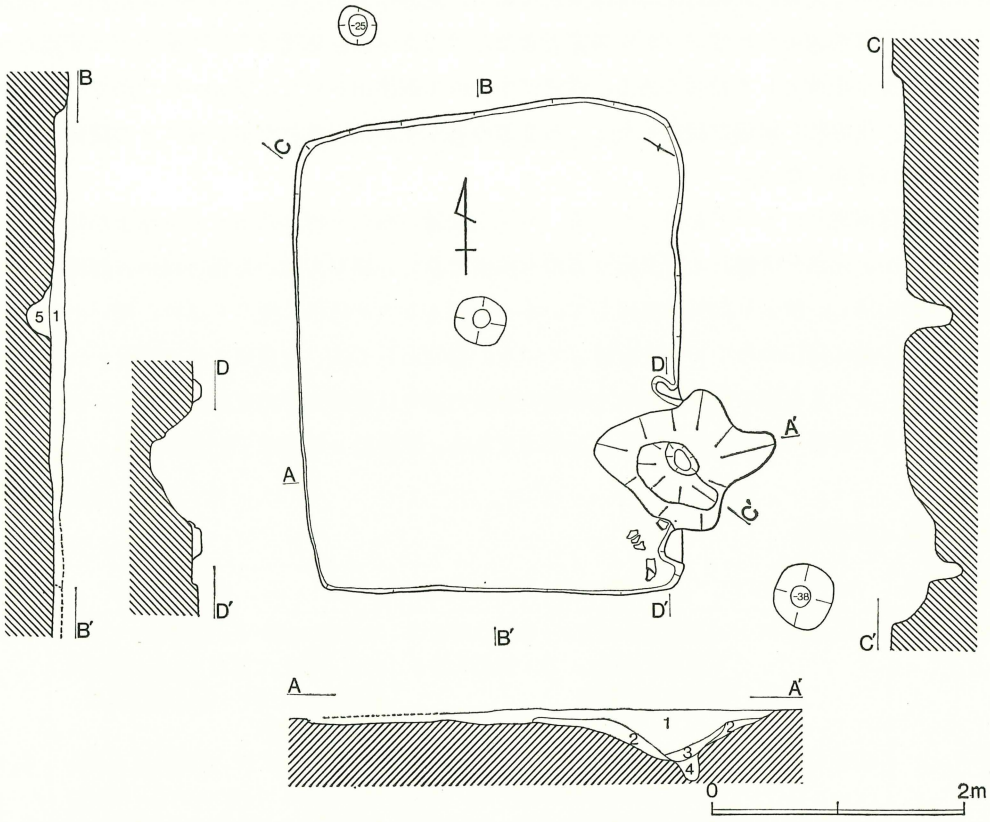
ともに欠損品、３は断面台形、４は扁平で両者ともに縁辺部は使用痕は明瞭でない。

（細田　勝）



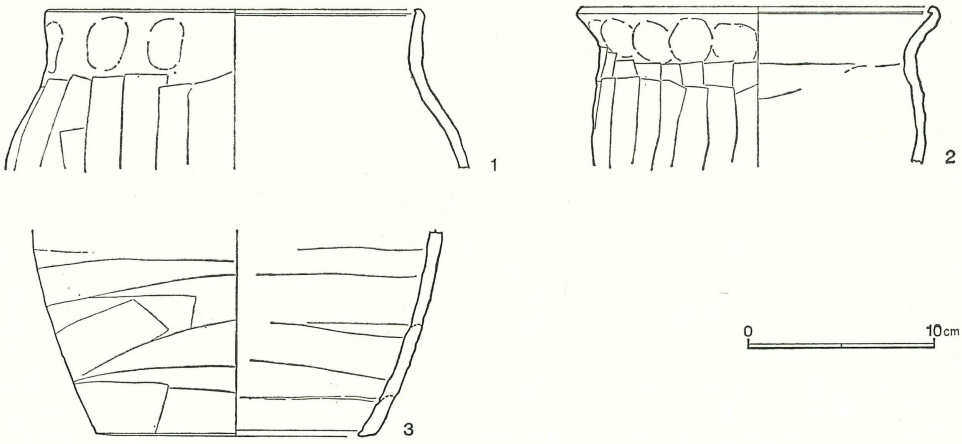
第27図　駒前遺跡出土石器実測図 (2)

(2) 平安時代



第28図　駒前遺跡第１号住居跡実測図

土層：1．炭化物含む黒色土　2．黒色土　3．黄褐色土　4．焼土を含む黒褐色土　5．黒褐色土



第29図　駒前遺跡第１号住居跡出土遺物実測図

第１号住居跡（第28図）

南側調査区の中央若干北寄りで検出された唯一の住居跡である。長方形プランを呈し、長辺3.85m、短辺3.05mを測る。長軸方位はほぼ南北である。壁高は全体として10cm～15cmと浅く、南西部ではほとんど壁が認められずプランを確認できただけであった。床面は平坦で若干踏み固められた面が存在したが全体として軟弱である。柱穴は中央に１個検出された。径40cmの円形を呈し、深さ20cmである。住居跡の周辺を精査したところ２個のピットが検出されたが、柱穴との関係は不明である。周溝は存在しない。

住居跡東壁南寄りにカマドを持っている。カマドは袖の残存と思われるローム粘土が幅約10cm残存していたが、大部分は壊れており掘り方のみ検出できた。掘り方は、長径 1.4m、短径 1.0mの不整楕円形を呈し、壁より約80cm突出している。床面よりスリ鉢状に掘りくぼめ、深いところで33cmを測る。中央に径15cmの小ピットを持っている。遺物としては、北東隅より床面直上より鉄製紡錘車が１点、カマド右側の南東隅より土師器の甕形土器の口縁部破片が少量出土している。他にはフク土中より土師器の破片が若干出土しただけである。住居跡の時期は平安時代である。

（宮崎朝雄）

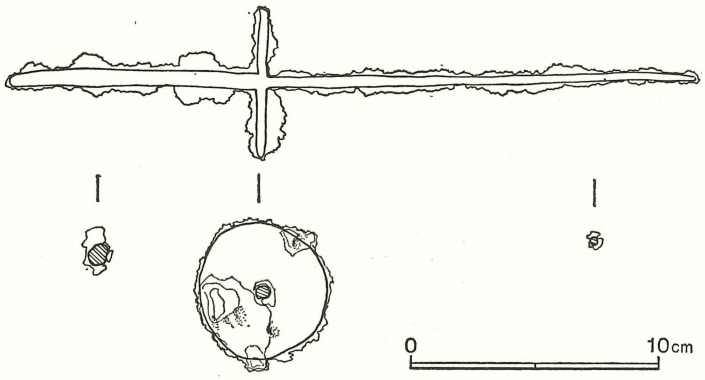
出土土器（第29図）

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径（20.4）	口縁部はほぼ直立、胴部は略球形口唇部は内傾し、弱い内稜を作る器壁はやや肥厚	口縁部は横ナデ、指頭による押え痕が連続して認められる。胴部は縦位のヘラ削り、胎土焼成良好、色調暗黄褐色	⅔欠
甕	2	口径（19.6）	口縁部は緩やかに外反、胴部の脹らみは弱く、やや長胴ぎみとなる輪積み痕は顕著である。口唇部は内傾、沈線化する強い内稜を有する	口縁部は横ナデ、指頭による押え痕が連続して認められる。胴部は縦位のヘラ削りを短い単位で施す胎土焼成良好、色調明褐色	⅔欠
甑	3	底径（15.1）	余りつづまらず、直線的な胴部下半、輪積み痕は顕著。器壁は厚い	内外面供、横位のヘラ削りおよび横ナデ整形、単孔、胎土、焼成良好、色調暗黄褐色	9/10欠

鉄製紡錘車（第30図）

腐食が著しいがほぼ原形をとどめている。規模は全長28cm、円板の径6.2cm、軸部は径6mm、断面は円形を呈する。

（村田健二）



第30図　駒前遺跡第１号住居跡出土鉄製紡錘車実測図

グリッド出土土器（第33図）

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径（21.2）	口縁部は緩やかに外反、口唇部は内面に突出し、強い稜線を作出	口縁部内外面とも横ナデ胎土焼成良好、色調褐色。	¼残
甕	2	口径（21.0）	口縁部は強く外反、口唇部は内側に突出、器壁は口縁部肥厚胴部は直線的である。	口縁部は内外面供横ナデ、胴部は縦位のヘラ削りおよびナデ、胎土焼成良好、色調橙褐色。	9/10欠

(3) 近　世

第1号墓壙（第31図）

南側調査区のほぼ中央に位置する。径100cmの円形を呈し、底面までの深さは162cmと深い。底面は平坦であり、壁は若干斜めだが直線的に立ち上がる。フク土は、ロームブロック、黄褐色土を含む黒色土である。遺物は底面より古銭6枚とかわらけ3点が出土している。

第2号墓壙（第31図）

南側調査区の南端に2号、3号、4号墓壙が隣接して検出された。長径 122cm、短径95cmの楕円形を呈する。長軸方位はN—43°—Wである。ローム面より深さ110cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。3号墓壙が東側に隣接しており、その間が深さ40cmの掘り込みでつながっている。フク土は、ロームブロック、黄褐色土を混入した黒色土である。

第3号墓壙（第31図）

2号墓壙の東側に検出された墓壙である。長径127cm、短径110cmの不整楕円形を呈する。長軸方位はN—78°—Eである。ローム面から底面までの深さは118cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。2号墓壙とは深さ40cmの掘り込みによって連続している。フク土は、ロームブロック、黄褐色土を含む黒色土である。遺物の出土は無い。

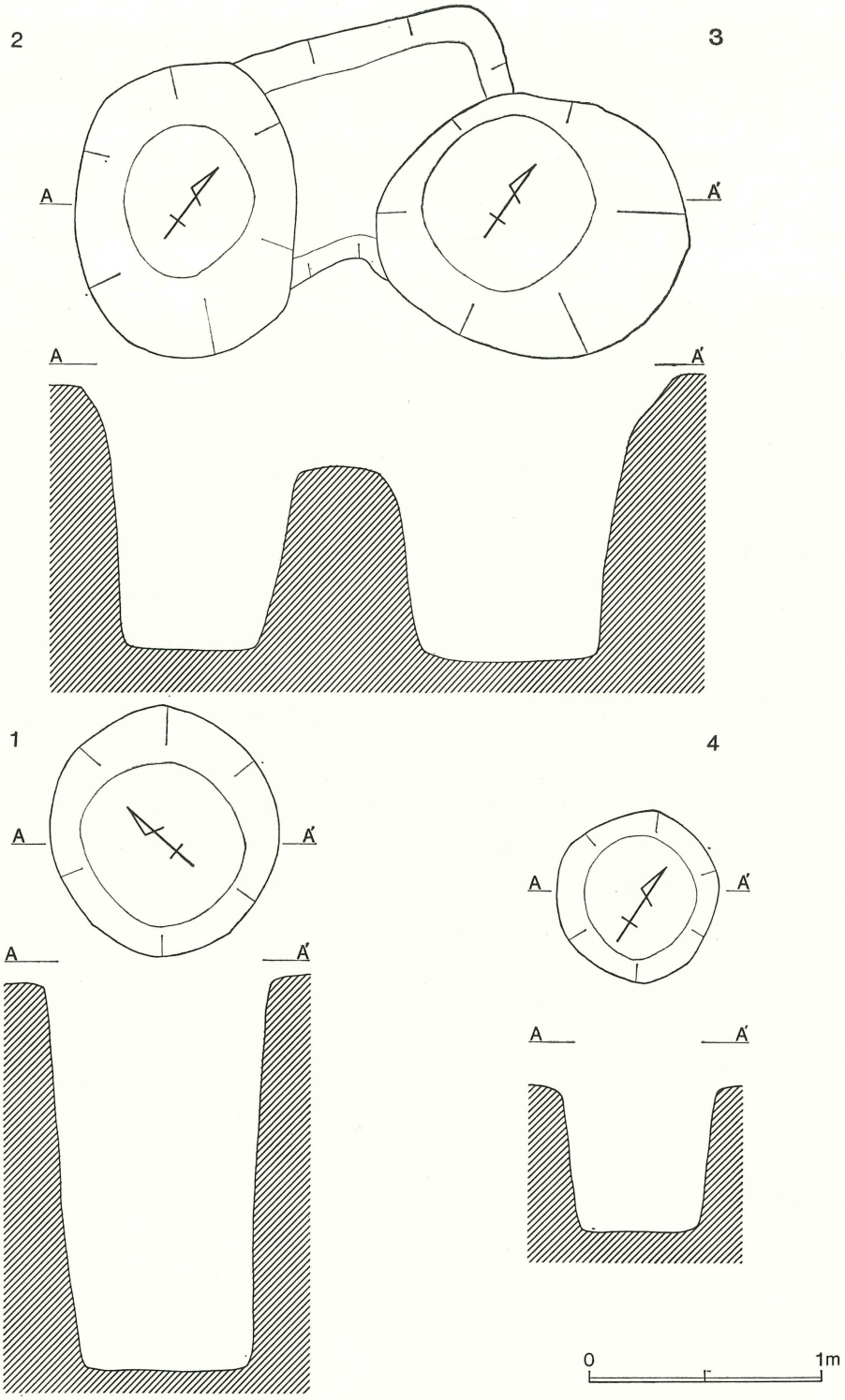
第4号墓壙（第31図）

3号墓壙の南側2mほど離れた地点に位置する。径70cmの円形を呈する。ローム面から底面までの深さは62cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。他の墓壙と比較すると小形で浅い。フク土はロームブロック、黄褐色土を含む黒色土である。遺物は古銭が6枚出土した。

（宮崎朝雄）

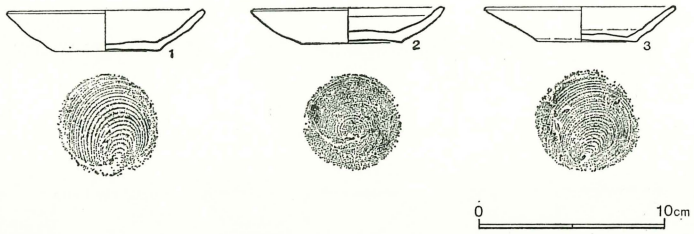
1号墓壙出土土器（第32図）

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
かわらけ皿	1	口径（ 8.4） 底径（ 5.4） 器高（ 2.5）	体部中位に稜をもって立ち上がる口縁径は底径に比してやや大きく浅い作り、器壁は薄い。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転系切り、再調整無し、焼成、胎土良好、色調明褐色	ほぼ完形
かわらけ皿	2	口径（10.2） 底径（ 5.2） 器高（1.8）	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。底部はやや上げ底風、器壁は比較的厚手	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好、色調明褐色。	ほぼ完形



第31図　駒前遺跡墓壙実測図

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
かわらけ皿	3	口径（10.0） 底径（ 5.4） 器高（ 1.8）	体部は緩やかに外反して立ち上がる。底部は平底、器壁は体部がやや厚手	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し・焼成・胎土良好、色調褐色。	ほぼ完形

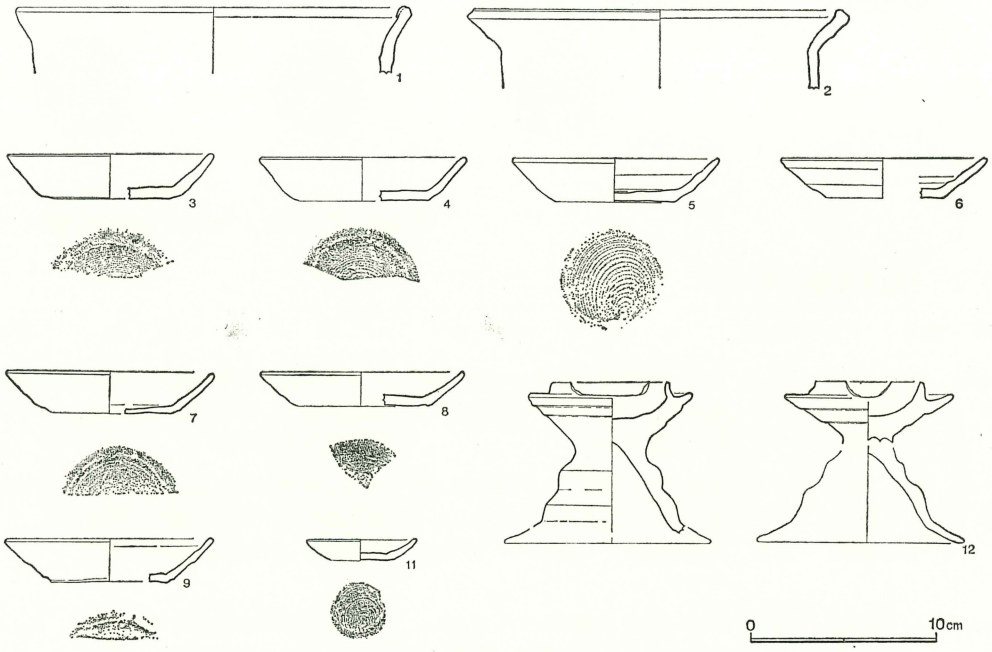


第32図　駒前遺跡１号墓壙出土遺物実測図

グリッド出土土器（第33図）

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
かわらけ皿	3	口径 11.0 底径 7.0 器高 2.2	体部は直線的に立ち上がる。器壁は厚手、口径に対する底径比は大きく差は小さい。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好色調褐色。	½欠
かわらけ皿	4	口径 11.0 底径 7.0 器高 2.3	体部は、口縁部近くに稜をもって外反する他は直線的な立ち上がり器壁は厚手、口径に対する底径比は大きい。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好、色調淡橙褐色。	½欠
かわらけ皿	5	口径 11.0 底径 6.0 器高 2.4	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内面は水挽き痕が顕著、器壁はやや厚手。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好色調暗灰褐色。	¼欠
かわらけ皿	6	口径（11.0） 底径（ 6.0） 器高（ 2.0）	体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面共水挽き痕顕著器壁はやや厚手。	ロクロ使用の水挽き成形、焼成、胎土良好色調暗灰褐色	⅗欠
かわらけ皿	7	口径 11.0 底径 6.0 器高 2.0	体部は内湾しながら緩やかに立ち上がる、器壁は全体的に薄く、堅い感じ。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り・再調整無し・焼成・胎土良好、色調褐色	⅔欠
かわらけ皿	8	口径 11.0 底径 7.0 器高 2.0	体部は直線的に立ち上がる。器壁は、体部がやや薄く、底径は厚目底径比は大きい。	ロクロ使用の水挽き成形・底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好、色調褐色	⅔欠
かわらけ皿	9	口径（11.0） 底径（ 6.0） 器高（2.2）	体部は直線的に立ち上がる。口径に対する底径比は比較的小さい。器壁は薄い。	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好、色調褐色。	
かわらけ皿	10	口径（ 6.0） 底径（ 3.0） 器高（ 1.2）	体部は緩やかに内湾して立ち上がる器壁は薄手、整った作り	ロクロ使用の水挽き成形、底部は回転糸切り、再調整無し、焼成、胎土良好色調明褐色。	完形
かわらけ台付燈明皿	11	口径 9.0 底径（11.0） 器高（ 9.0）	全体的に厚手な作りである整美である。	ロクロ使用、全体的に丁寧な作り焼成胎土良好、色調明褐色	⅛欠

器種	番号	大きさ（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
かわらけ台付燈明皿	12	口径　9.0	全体的に厚手な作り、作りは丁寧なものであるが、特に皿部は丁寧である。	ロクロ使用の水挽き成形、水挽き痕は良く残す。	5/8欠

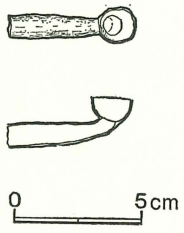


第33図　駒前遺跡グリッド出土土器実測図

煙管（第34図）

雁首の部分のみで、吸い口部は出土していない。形状は、管の部分がやや細めで、火皿部は、開口部が小さく、深い作りである。材質は真鍮製でやや雑な作りである。規模は、現存の全長５cm、火皿部径1.5cm、管部径0.9mmを計る。俗に番煙管と呼唱され、ごく一般的なものである。形状の特徴から江戸時代後半代のものであろう。

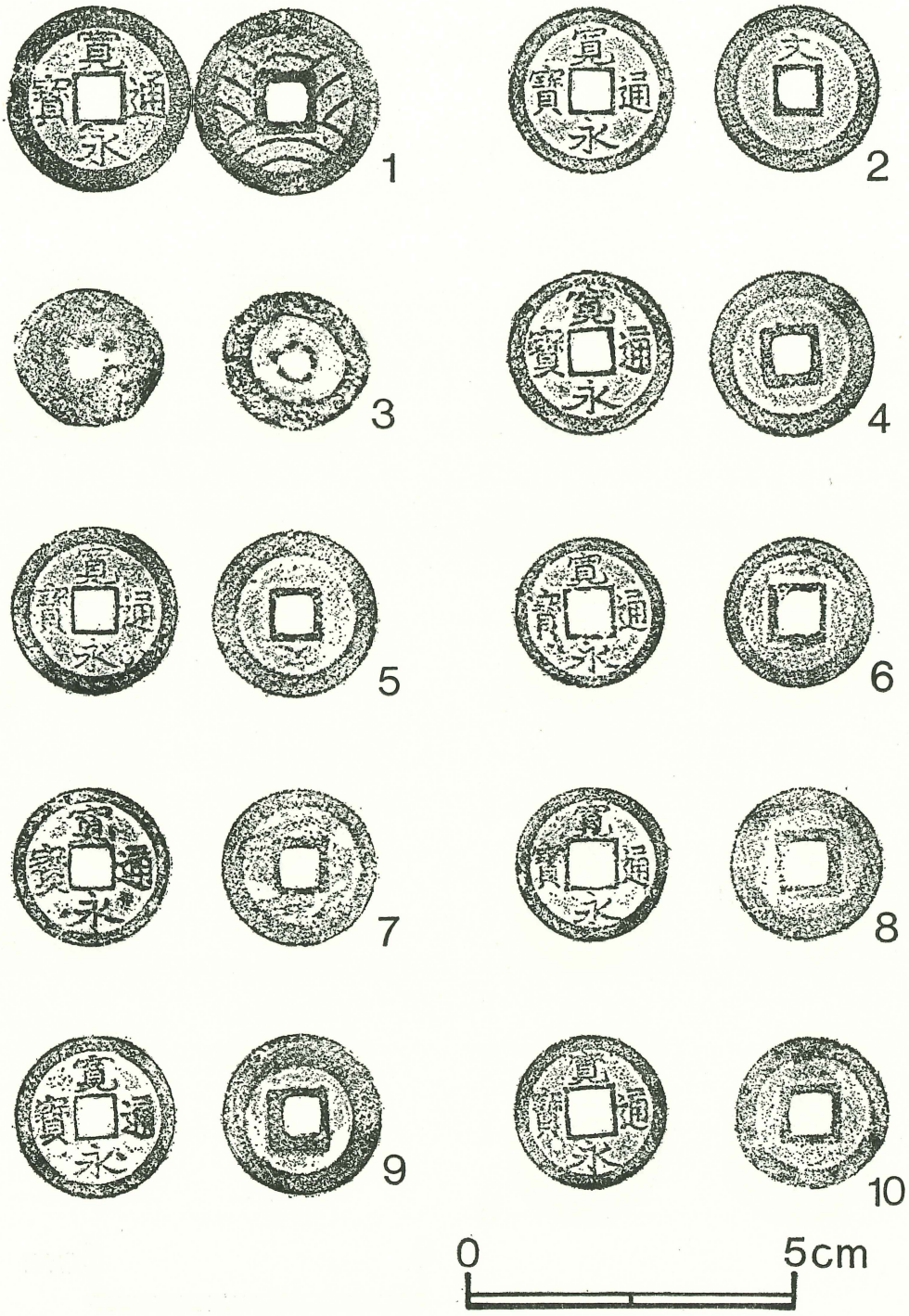
（村田健二）



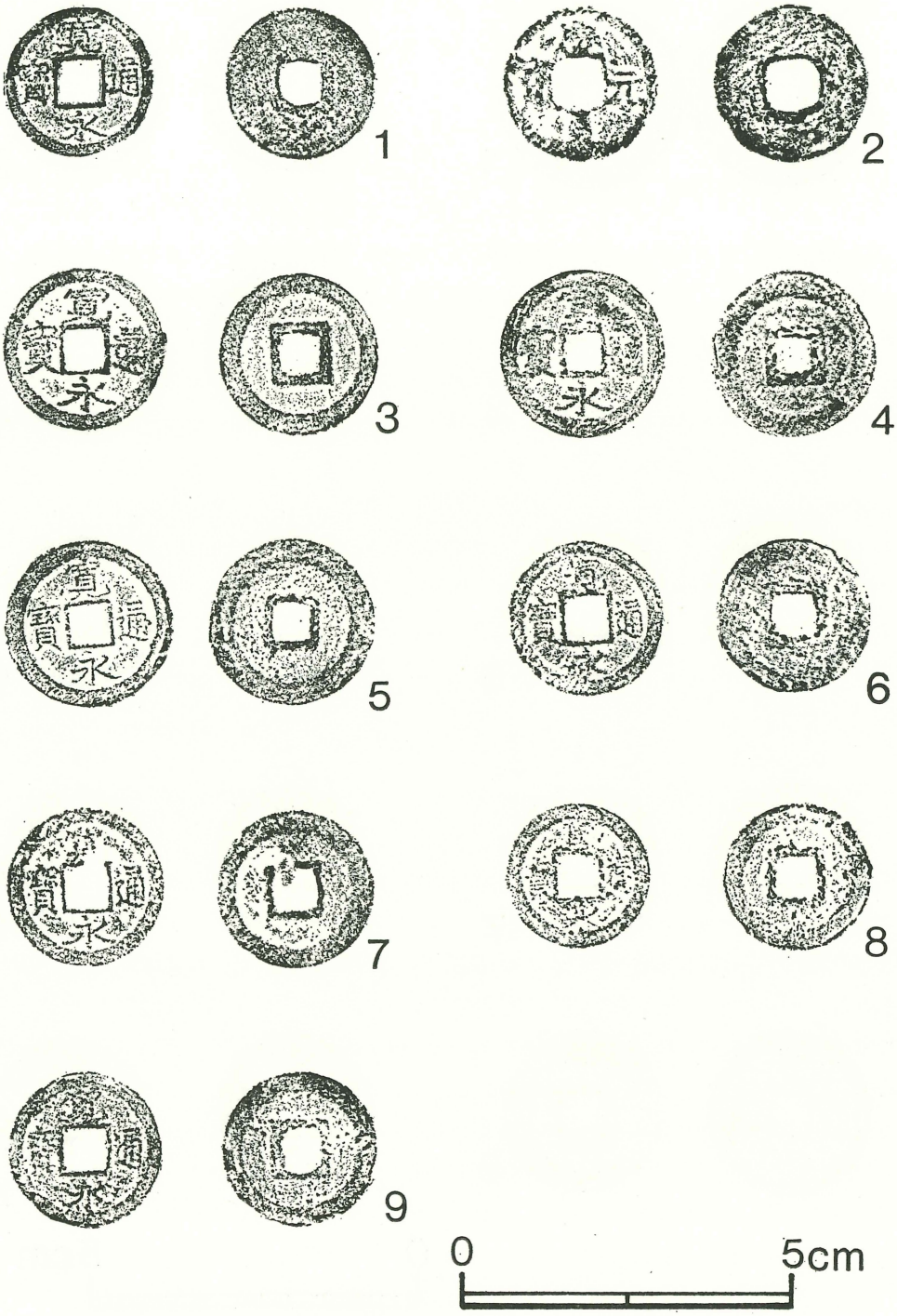
第34図
駒前遺跡出土
キセル実測図

古銭（第35、36図）

１号、４号墓壙より各６枚出土した他に、表土より７枚、計19枚が出土した。



第35図　駒前遺跡出土古銭拓影図 (1)



第36図　駒前遺跡出土古銭拓影図 (2)

V 結　　語

1 縄文時代

(1) 撚糸文期の遺構

駒前遺跡では、炉穴３基、土壙１基、集石２か所の縄文時代の遺構が検出された。このうち、南側調査区に存在する１号、２号炉穴と１号、２号集石は早期前半撚糸文期に属する。１号炉穴では壁面に密着して稲荷台式の口縁部破片が１点、２号炉穴では撚糸文系土器の小破片が２点フク土中より出土した。２か所の集石からは確実な撚糸文系土器の伴出はないが、集石上層の表土及び周辺から撚糸文系土器が主体的に出土している。このような状況から炉穴と集石は、撚糸文系土器の主体をなす稲荷台式に属するものと考えている。

本遺跡で検出された２基の炉穴は、径60～70㎝の円径を呈し、ローム面を10～20㎝皿状に掘りくぼめただけの極めて小形な炉穴である。しかし１号炉穴では、焼土が堆積し壁面は良く焼けており充分に使用されていた事が窺われる。

集石は、約１ｍ四方の範囲に焼けた小割礫が50個余り存在していたが、表土から浅いために攪乱が著しく散在していた。２号集石では、集石の下から径55㎝の円形を呈し、深さ20㎝の掘り込みが確認されている。

これら各２基の炉穴と集石の配置をみると、１号炉穴と１号集石は約５ｍ、２号炉穴と２号集石は約 6.5ｍの地点に存在し、炉穴と集石が対を為しており、その間約30ｍ離れて位置している。炉穴と集石の関連を窺わせる資料といえよう。

さて、撚糸文期の遺構としては住居跡、炉穴、集石、土壙等が確認されている。埼玉県内において発掘調査等により確認される該期の遺跡は30以上にのぼるが、遺構が検出された遺跡は少ない。浦和市白幡中学校校庭内遺跡(1)、大宮市篠山遺跡(2)、宮代町前原遺跡(3)、富士見市栗谷ツ遺跡(4) が上げられるにすぎない。

白幡中学校遺跡では、稲荷台期の住居跡１軒と土壙２基が検出されている。 住居跡は長径4.25ｍ、短径3.10ｍの不整楕円形を呈し、壁高は約15㎝である。径50㎝円形の地床炉、４個の柱穴が確認されている。篠山遺跡では撚糸文期の炉穴が検出され、茅山期の炉穴と比較して小形の炉穴である事が確認されている。井草Ⅱ式、夏島式土器が出土している。

前原遺跡では、稲荷台期の住居跡７軒、炉穴２基、集石１か所から構成される集落のほぼ全容が検出された。住居跡は１辺 2.5～４ｍの隅丸方形を呈する小形なものである。 柱穴は壁に沿って巡る。１号住、６号住は地床炉を持ち、２～５号住、９号住は炉を持っていない。２基の炉穴は浅く小形であり、集石は焼礫が散在する。

白幡中学校校庭内遺跡、篠山遺跡、前原遺跡は駒前遺跡と同じ大宮台地上に位置しており、前原遺跡が東部寄りであるが他の２遺跡は極めて近い位置である。これらの遺跡で検出された遺構に駒

を加え大宮台地の状況を検討すると、住居跡は、隅丸方形または不整楕円形を呈するが、いずれも1辺2.5〜4.5mの小形の規模である。前原遺跡では住居内に炉址を持つものと持たないものが存在する。炉址の機能や炉穴との関連を考える上で興味深い。

炉穴は、駒前遺跡、前原遺跡、篠山遺跡で検出されており、いずれも駒前遺跡同様小さな炉穴である事が確認されている。集石は駒前遺跡、前原遺跡で検出されている。焼けた割礫から構成される。土壙は白幡中学校校庭内遺跡、前原遺跡に存在する。

以上、大宮台地における撚糸文期の遺構を少ない資料の中で検討したが、駒前遺跡の炉穴、集石を含めて個々の遺構は類似するといえよう。しかし、これらの遺構から構成される遺跡の様相は、部分的調査が多いがおおよそ次の4種のパターンが認められる。

① 前原遺跡のように、住居跡を中心に炉穴、集石、土壙という構成要素を全て持つ集落遺跡

② 駒前遺跡のように炉穴と集石だけから成り住居跡を欠いた遺跡

③ 大部分の遺跡のように、土器、石器等遺物だけが検出される遺跡

④ 石器製作址等の特殊な遺跡

このような遺跡の種々の様相は、縄文時代を通じて一般的にみられるものであり、大宮台地では遺跡数が増大する稲荷台期に既に成立していると言えよう。

一方、武蔵野台地上に位置する富士見市栗谷ツ遺跡では3軒の住居跡が検出され、そのうち1軒は、隅丸方形を呈し、長径7.2m、短径5.1mの極めて大形な住居である。住居内には地床炉を持つ。他の2軒も⅓ほどの検出であるが1辺4.5m前後の隅丸方形である。大宮台地の住居跡と比較すると相対的にりっぱである。大形住居は東京都成瀬西遺跡[5]等撚糸文期終末の武蔵野台地及び丘陵地帯で検出されており、この地域における特徴といえる。今後、地域における遺跡の様相の違いを検討していく必要があろう。

(2) 縄 文 土 器

第1群土器

撚糸文系土器群である。駒前遺跡出土の縄文土器の主体を占める。文様からⅠ〜Ⅻ類に分類し説明した。Ⅰ類は井草Ⅰ式、Ⅱ・Ⅲ類は夏島式、Ⅳ〜Ⅶ、Ⅹ類は稲荷台式、Ⅷ、Ⅸ、Ⅺ類は稲荷原式に比定される。ここでは、大宮台地における他遺跡出土土器と駒前遺跡の土器を比較しながら、さらに時期を追って大宮台地における状況を若干検討してみたい。

井草Ⅰ式とⅡ式は、主に口縁部文様帯の有無により分離され、口唇部の屈曲等によっても違いが認められるが、大宮台地では極めて連続的である。井草Ⅰ式、Ⅱ式を出土した遺跡としては、浦和市和田北遺跡[6]、大宮市高井遺跡[7]、南中丸遺跡[8]、篠山遺跡、久喜市足利遺跡[9]、宮代町金原遺跡[10]、杉戸町杉戸農業高校実習用地内遺跡[11]等が上げられる。各遺跡とも井草式の特徴である肥厚し外反する口唇部に縄文施文による文様帯を持つ。縄文原体は$R<\frac{L}{L}$が大部分である。口縁部文様帯、胴部文様帯とも原体$R<\frac{L}{L}$の縄文施文が多い。

駒前遺跡の12図1は、縄文の口唇部文様帯と頸部に1条の撚糸圧痕文を持っている。撚糸圧痕文を持つ土器は高井遺跡に存在し、高井第二類土器に類似する。井草Ⅰ式にみられる文様である。一

方、南中丸遺跡、和田北遺跡、金原遺跡の口唇部下には爪状、指頭状の押圧が巡っているが、これは井草Ⅱ式に多い手法であろう。

大宮台地では現在のところ井草Ⅰ式、Ⅱ式を多量に出土する遺跡は見当たらない。次の夏島式になるとまとまった資料を出土する遺跡が現われ、遺跡数も増加する。この傾向は稲荷台式においても同様である。

夏島式と稲荷台式については、岡本孝之氏により分離の疑問が提示されて以来[12]、縄文と撚糸文の出土比率を中心にその関係について検討されてきている。白石浩之氏は夏島式と稲荷台式の重複を一部認めながらも、遺跡の様相の違いから各々を2細分して夏島古期→夏島新期・稲荷台古期→稲荷台新期という段階的変遷として把握した[13]。これに稲荷原式との関係を追加するならば、稲荷台新期・稲荷原古期→稲荷原新期という連続した変遷が考えられよう。

大宮台地における夏島式、稲荷台式、稲荷原式に相当する遺跡の様相は、おおよそ次の3グループに把える事ができる。

① 縄文施文が優位で7割以上を占める。縄文は器面に比較的深く施文され、条、節が明瞭である。口縁部上部に横位の文様帯を残す土器を含む。

② 撚糸文が優位で7割以上を占める。撚糸文及び縄文の施文は浅く、条間隔が広く磨消し部が多くなる。口縁部上部に無文部を持つ土器を含む。

③ 撚糸文が優位で大部分を占める。撚糸文は、節が大きく条は太い。器面に粗く施文され磨消し部が多い。口縁部に無文帯を確立する。

このような有文土器の特徴とともに、②③では無文土器の増加、③では口縁部無文帯を作る特徴的無文土器の出現という撚糸文系土器群終末期の無文化方向を加える事ができる。

①の遺跡としては、浦和市和田北遺跡、松ノ木遺跡[14]、大古里遺跡[15]、大宮市東北原遺跡[16]、鷲山遺跡[17]、②の遺跡としては、川口市ト伝遺跡[18]、浦和市東中尾遺跡[19]、③の遺跡としては大宮市稲荷原遺跡[20]が主な遺跡として上げられる。駒前遺跡は②と③が連続的にまとまって出土した資料といえよう。また、②、③を多量に出土した遺跡として宮代町前原遺跡がある。

大宮台地における遺跡の様相を①、②、③のグループとして考えたが、①は夏島古期→夏島新期・稲荷台古期、②は稲荷台新期・稲荷原古期、③は稲荷原新期に対比される。そして、結果的には①、②、③を夏島、稲荷台、稲荷原段階と整理しておきたい。

以上のような変遷の中で駒前遺跡の土器を検討すると、12図2、3は口縁部上部に横位の文様帯を持つ土器である。これは井草Ⅱ式の口唇部文様帯の残存と考えられる。2は撚糸文、3は縄文である。大宮台地では井草期の縄文優位を反映して東北原遺跡のように縄文の土器が多い。撚糸文の土器は、夏島貝塚[21]、多摩ニュータウン№52遺跡[22]等でみられる。12図4～6を含め駒前遺跡では夏島期の資料は少ない。

12図9～22、13図、14図、15図1～4は稲荷台期の資料であり、駒前遺跡の主体を為す。縄文、撚糸文とも施文は粗く、胴部にはかなり磨消し部がある。口唇部は丸棒状を呈するものが大部分であり、ナゾリが加えられ若干の無文部を作っている。15図1～4は、糸状の撚糸文であるが、稲荷台期における撚糸文の変化の一端を示す文様である。

15図５～21、17図１～15は稲荷原期の資料である。15図５～８は口縁部無文帯が確立し、条の太い撚糸文が胴部に施文される。15図20、21の刺突文土器は、器内が特に厚く器面が丁寧に磨かれつやを持っている。頸部の括れ部は沈線状で口縁部無文帯が確立している。関東地方東部に分布を持つ花輪台式に極めて類似する土器であり[23]、稲荷原式と花輪台式の関係を知る事ができる。17図の無文土器は頸部に段または１条の沈線を持ち口縁部無文帯が作られている。口唇部は肥厚し、若干尖り気味で丸棒状の１～６、９と角頭状の10、11がある。稲荷原遺跡の無文土器は前者が多い。後者は、頸部の沈線が明瞭になり口縁部無文帯が確立した土器であり、次に来る東山遺跡[24]等の無文土器群に近似している。駒前遺跡は、稲荷原遺跡と極めて類似した様相を持っているが、無文土器のバラエティーを加えた資料といえよう。

以上、駒前遺跡の撚糸文系土器群について大宮台地における様相の中で位置付けを検討した。

（宮崎　朝雄）

(1) 青木義脩・高野博光　「白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告書」　1977年
(2) 安岡路洋　「大宮市篠山遺跡」　第５回埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨　1972年
(3) 青木秀雄　「宮代町前原遺跡」　第14回埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨　1980年
(4) 荒井幹夫　「栗谷ツ遺跡」　富士見市文化財調査報告Ⅺ　1976年
(5) 町田市教育委員会　「町田市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ」　1981年
(6) 青木義脩、小倉均「井沼方、大北、和田北、西谷、吉場遺跡発掘調査報告書」　1982年
(7) 大宮市史編さん室　「大宮市史第一巻」　1968年
(8) (7)に同じ
(9) 鈴木敏昭　「足利遺跡」　久喜市埋蔵文化財調査報告書　1980年
(10) 青木秀雄「大宮台地東部に於ける撚糸文系土器の紹介」　史峰６　1975年
(11) 注10に同じ
(12) 岡本孝之　「稲荷台文化の展開一・二」　古代文化第24巻１号２号　1972年
(13) 白石浩之　「南横浜バイパス№.１～№.８遺跡」　神奈川県埋蔵文化財調査報告５　1973年
(14) 青木義脩　「浦和市史第１巻考古資料編」　1974年
(15) 高野博光ほか　「大古里遺跡発掘調査報告書」　1976年
(16) 安岡路洋、立木新一郎ほか　「東北原遺跡一第５次調査」　1981年
(17) 立木新一郎、森下昌市郎ほか　「鷲山遺跡」　大宮市遺跡調査会報告第６集　1983年
(18) 鈴木秀雄　「卜伝」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集　1980年
(19) 三友国五郎、安岡路洋　「東中尾」　1964年
(20) 三友国五郎、安岡路洋　「稲荷原」　1966年
(21) 杉原荘介、芹沢長介　「神奈県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告　1957年
(22) 小林達雄　「№.52遺跡」　多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ　1967年
(23) 茨城県史編さん室　「茨城県史料考古資料編先土器、縄文時代」　1979年
(24) 宮崎朝雄ほか　「甘粕山」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　1980年

第2群土器

第2群土器は子母口式に比定される土器である。有文土器は第18図に図示したものが全てで、擦痕、条痕文土器を含めた総出土量の1％にも充たない。口縁部破片は14点、底部破片はない。胎土中の繊維含有量は少ない傾向にあり、中には肉眼で識別できないものもある。

有文土器について、施文される文様要素には以下のものがある。

1　絡条体圧痕文

2　刺突文

3　沈線文

4　貝殻腹縁文

5　その他刻目文等である。

多くは、各文様要素を単独で用いるが、第18図8は刺突文＋沈線文、13は貝殻腹縁文＋刻目文＋刺突文である。

絡条体圧痕文の土器については、その施文手法の違いから2種を設けた。Ⅰ類b種は、古くは子母口、大口坂貝塚（山内　1941）を始めとして近年では、小山田遺跡群（安孫子　1982）、いわき市竹之内遺跡（馬目　1982）など良好な資料が報告されている。Ⅰ類a種はあまり類例をみない。第18図1や3は、おそらく口縁に沿って絡条体を等間隔で押圧施文する単純な文様の土器である。常世遺跡（芳賀　1977）や柳崎貝塚（佐藤　1969）出土例の、口縁部に縦位で密に絡条体を施文する、いわゆる常世2式（芳賀　1977）系統のものとは、施文手法から明らかに区別される。高輪寺遺跡（青木　1979）出土例には、口縁に沿って絡条体を単純に施文したものがあるが、Ⅰ類a種に比較して絡条体の施文が貧弱である。また高輪寺遺跡では、単純な絡条体の施文だけでなく、横位や縦位の細隆起線文を併用して文様構成した土器が特徴的である。この一群は、常陸伏見遺跡（小野ほか　1980）や木の根№6遺跡（宮1981）等類例の増加から、徐々にその様相が明らかとなり、「木の根A式（仮称）」（安孫子　1982）等の段階設定が試みられている。これは子母式から野島式への橋渡しに介在した土器群とする編年観のなかで把えられたものである。野田市勢至久保遺跡（飯塚　1982）出土例では、絡条体の施文下に細隆起線による区画が構成され、区画内を充填手法で細隆起線文が施されている。これをみる限り、このタイプの土器群は、ある程度の時間的幅を有するものと考えられ、今後の類例の増加によって、その変遷をたどることも可能であり、従来の型式編年への帰属も確定するだろう。

Ⅱ類については、子母口貝塚、大口坂貝塚あるいは小山田遺跡群出土例と同様の連続刺突文が施されている。第18図8は、2本の平行沈線が斜位に垂下して、口縁部の刺突文帯を区画している。このような文様をもつ土器は、子母口式のなかに類例をみない。城ノ台貝塚（吉田　1955）や三里塚№19遺跡（中山ほか　1971）出土の田戸上層式には、単純なモチーフで平行沈線間に連続刺突文を施したものや、大きなモチーフで斜位や縦位に刺突文を施文したものがある。また竹之内遺跡の大寺、常世式の土器は、沈線文と刺突文を併用して多様な文様を構成する。刺突文については、貝殻刺突を多用するため、子母口式のそれとは微妙に相違するが、田戸上層式併行期の刺突文手法を多用する土器群として特異な位置を占めている。報文のなかで馬目氏は、貝殻刺突文から絡条体圧

痕文への文様表出技法の変換を予察しているが、安孫子氏（安孫子　1982）なども同様の考えを述べている。Ⅱ類と田戸上層式の刺突文の土器とは、よく類似するが、決定的な相違点はⅡ類が口唇部に絡条体圧痕文を施文することである。田戸上層式も口唇部や口縁内面に刻目文、刺突文等を施文することが特徴的であるが、絡条体圧痕文の存在は皆無である。やはり子母口式の出自については、絡条体圧痕文が大きく係わって来るようである。

Ⅲ類ａ種は、おそらく器面上半の口縁部周辺と考えるが、貝殻腹縁文で器面を埋めている。ａ種はⅡ類よりも、より田戸上層式の要素を強く残した土器と考える。ｂ種についても、多種の文様要素をもって文様構成され、田戸上層式に似た様相をみせている。

Ⅳ類の沈線文土器は、15、16について、その格子目状の沈線文は条痕文的である。14はⅡ類に類似した沈線文で区画を意図したようでもあり、浅い刺突状のものもみられるが、明確に判断できない。

Ⅴ、Ⅵ類は第２群土器としたものの、出土量の大半を占める。Ⅶ類でも条痕文を拭うように磨り消したものが目立ち、器表裏面に条痕文を施したものは図示した４片のみである。

第２群土器は、先史土器図譜（山内　1941）に提示された子母口式におよそ比定されるものである。それは実に僅かな資料であるが、Ⅱ類とⅢ類のあり方から、田戸上層式の次段階に来る土器群と考える。第２群の遺跡における出土状況は、全て表土層から出土したが、第３群が茅山下層式と下吉井式の一括個体であり、完全に分離できることから、単純なまとまりとして把えられる。

先史土器図譜に示された子母口式には、細隆起線文の土器が、その構成員として大きな位置を占める。第２群では細隆起線文は１片もみられない。筆者は、細隆起線文が子母口式のなかでも新しい文様要素ではないかと考えている。もっともこの思いは、野島式では細隆起線文が主体的に行われるわけであるから、考え方としては極く当り前な考えである。しかし、先史土器図譜の細隆起線文土器は、「木の根Ａ式」の細隆起線文とは、図版でみる限り、相違するものも含まれる。竹之内遺跡には類似した細隆起線文があって、うち１個体の隆起線上には絡条体圧痕文が施文されている。

絡条体圧痕文土器については、茅山上層式以降の型式編年が確立する過程で新たに認識され、近年では安孫子氏が再編制（1982）して、今後への問題点が明らかとなった。子母口式に関しては、「木の根Ａ式」を絡めた。細隆起線文の位置付けが今後の課題となるであろう。

（鈴木秀雄）

参　考　文　献

青木　秀雄　1979　「高輪寺遺跡」　久喜市教育委員会

赤星　直忠　1948　「神奈川県野島貝塚」　『考古学集刊』１

安孫子昭二　1982　「子母口式土器の再検討―清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として―」『東京考古』１

池田　次郎　1949　「城台貝塚出土早期縄文土器の細別」『広島医科大学論文集』２

小倉　　均　1981　「大北遺跡」　浦和市遺跡調査会報告15

小野　真一ほか1980　「堂陸伏見」　伏見遺跡調査会

金子　直行　1982　「野島式土器について」―金平遺跡出土土器を中心として―『土曜考古』６

興野　義一　1970　「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』22―11

笹沢　　浩　1975　「男女倉遺跡Ｃ地点」『男女倉』

瀬川裕市郎　1983　「野島式土器に関する２～３の覚え書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』７
谷井　彪　1980　「舟山遺跡」　埼玉県埋蔵文化財調査報告書９
中山吉秀ほか　1971　「三里塚」　千葉県都市公社
芳賀　英一　1977　「常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる２・３の問題点」
塙　静夫　1976　「雲入遺跡」　『栃木県史』資料編考古１
馬目　順一　1982　「竹之内遺跡」　いわき市埋蔵文化財調査報告８
宮　重行　1981　「木之根№６遺跡」　千葉県文化財センター
山内　清男　1941　『日本先史土器図譜Ⅶ』先史考古学会
吉田　格　1955　「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』３
下津谷達夫ほか1982　「半貝・倉之橋・勢至久保」野田市遺跡調査会報告１

第５～10群土器

縄文前期末～中期初頭に位置づけられる土器群である。概期の資料は、大宮台地周辺では、鶴巻(1)、針ケ谷北通(2)、野伝場、東野遺跡(3)などに、やや纏った資料がある。

第５群Ｂ～Ｃ類は諸磯ｃ式：第７～８群はいわゆる十三菩提式に比定される。

第５群Ｂ類は、地文に櫛状の沈線文をもち、口唇下から刻みをもつ浮線文が垂下する。

浮線文は棒状工具で押圧を加えたような手法をもち、竹管の内面による結節浮線文的な手法をもつものはない。地文として施される沈線文は口縁部に横位、胴部には縦位の展開がなされ、半截竹管をたばねた櫛状のもので施される。

諸磯ｃ式については、今村啓弥氏が２細分を行なっている(4)。主として施文工程の変遷から導き出されたものであるが、ｂ式とｃ式の施文工程の変化が如何なる理由に拠るものか、問題となろう。

ｃ式での沈線文には、いくつかの在り方が観取される。駒前第５群ｂ類の如く、幅の狭い口縁と胴部にそれぞれ、横位、縦位と施文されるもの、口縁部の幅を広くとるもの―沈線文の在り方には前者と同じか、沈線文を浮線文と同様の効果をもたせて施したもの等があり、前者はｃ式古段階、後者をｃ式新段階に分離している。

今村氏の論拠に従うならば、本遺跡第５群ｂ類細田遺跡(5)遺構外、多摩ニュータウン№146遺跡(6)、野伝場遺跡の一部、新しい段階には野田場遺跡の大部分の土器が相当しよう。東野遺跡は野伝場遺跡の対岸にあたり、古手の段階は少なく、口唇にそって数条の結節浮線文を廻らし、口縁部に曲線的なモチーフＣ新式が纏っている。このことは今村氏の細分を楕当性あるものとしてとらえられよう。更に、長野県武居林等(7)の事例からｃ式を２分することはほぼ肯首されよう。しかしながら、ｃ式内での土器群の器形、文様帯の変化など細かな問題は今後に残された課題である。

第22図23～30は半截竹管をたばねて施文した沈線のみの土器群である。細片のため、詳細は不明だが、地文沈線のみの土器群であろう。同様の手法をもつ土器は、東光寺裏５号住等(8)ｂ式の新段階にもあるが、沈線は半截竹管をたばねて櫛状に施文され、沈線の間隔が密であることなどｃ式的な特徴をもつ。胴部以下は不明であるが、地文としての沈線がモチーフ状に展開する可能性もあるとりあえずｃ式古段階に位置づけておきたい。

第７群土器は十三菩提式に比定される。十三菩提式は、その内容について再検討を迫られているのが現状だが(9)。地文縄文の有無、浮線文の在り方などは、十三菩提遺跡を始めとして、鶴巻遺跡

などと共通し、いわゆる狭義の十三菩提式に相当しよう。

第８群土器の印刻をもつ土器と第７群との関係が注目される。第22図39は口縁と胴部に鋸歯状の印刻文帯をもつ。40は胴部破片と思われる。印刻をもつ手法は中期初頭にもあり、一概に時期決定はできない。偏平な折り返し口縁と印刻文、口縁下の印刻文帯の在り方は、多摩ニュータウン No. 482遺跡例に近く。口縁の開く円筒深鉢形と推定される[10]。

第９群Ａ類は王領ヶ台Ⅰ式、Ｂ類はⅡ式に比定される。

第10群土器は、地文縄文の折り返し口縁の土器群である。Ａ類は室ノ木遺跡[11]例などから諸磯ｃ～十三菩提式に、Ｂ類は前期最末様～中期初頭に伴なうものであろう。

当概期は、先にも述べた如く、遺跡数も少なく遺構、遺物とも貧弱である。遺物の在り方とともに、今後の検討を要しよう。

第11群土器

阿玉台系統の土器群を一括した。分類は従来からの、施文される角押文の有無、種類に依ったが、この分類が土器の型式学的分離に即移行して考えられる訳ではない。

ａ類

器形は波状線、平縁、扇状把手をもつ深鉢、及び第23図22～23の浅鉢形土器である。隆帯に沿って一列の角押文が廻り、口縁内側に稜をもつことが特徴である。角押文は竹管の背面を斜め、又はほぼ器面と平行にあて、連続して刻んでいる。使用される竹管には、同一時期でも施文技法に変化のあることが指摘されている[12]。

第23図13は扇状把手をもつ口縁部破片である。扇状部は口縁端よりさほど突出しない。

扇状部は隆帯上に刻みを有し、突出部分はほぼ直線的な形態を保っている。胴部以下は判全としない。他の土器群の角押文をみても、Ⅱ式に多用される２本併列の角押文は含まれていない。第23図31～32は胴部破片、貝殻腹縁文が粘土の輪積み痕上に施されている。

同種土器に内容が近いものに、子和清水貝塚１、252号住[13]、千ヶ瀬等[14]の遺跡が掲げられ、各々阿玉台Ⅰｂ式に位置づけられる。

ｂ類の無文で、x字形の楕円区画文も、ほぼ同じ段階としてよさそうである。

Ｃ類

隆帯の楕円区画文に沿って、幅広の爪形文、竹管の鋸歯状文、ペン先状竹管文をもつものを一括した。第５群ａ～ｂ類との関連が問題となろう。

施文具、施文の在り方から、ほぼ新道式に相当しよう。同種の土器群を出土するものに、神谷原ＳＢ10[15]西上Ｂ地点下層[16]例等があり、この段階は遺跡数も多く、近年、長野県で纏った資料が得られている。伴出した阿玉台式土器をみると、２本伴列の角押文が特徴的なⅡ式を伴っている。一方、金掘沢遺跡２号住との内容の差から考えて、第５群ａ～ｂ類とｃ類に若干の時間差をもたせて考えておくべきものと思われる。

（細田　勝）

(1) 青木　義脩　「鶴巻遺跡発掘調査報告書」　浦和市遺跡調査会報告書第６集　1978
(2) 土肥　孝他　「針ケ谷北通遺跡発掘調査報告書」　埼玉県遺跡調査会報告第26集　1975
(3) 斎藤悟朗他　「野伝場、東野遺跡」　川口市遺跡調査会報告第３集　1982
(4) 今村　啓彌　「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」　考古学研究第27巻第４号　1981
(5) 白石　浩之　「細田遺跡」　神奈川県埋蔵文化財調査報告23　1981
(6) 田中純男他　「多摩ニュータウン遺跡」　昭和56年度　第１冊分　東京都埋蔵文化財センター調査報告第２集　1982
(7) 中部高地・諸磯Ｃ式比定土器　その㈠　武居林、一の釜遺跡　下諏訪町教育委員会　1978
(8) 中島　宏他　「伊勢塚、東光寺裏」　埼玉県遺跡発掘調査報告書26　1980
(9) 鈴木　秀雄　「五領ケ台式土器」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要１　1982
(10) 東京都埋蔵文化財センター　「多摩ニュータウン遺跡昭和55年度第２分冊」　1981
(11) 赤星直忠他　「横浜市室ノ木遺跡」　横須賀考古学会研究調査報告２　1973
(12) 戸田哲也・篠原　正　「新橋遺跡」　富里村教育委員会　1978
(13) 関根　孝夫　「子和清水貝塚」遺構図版編　松戸市教育委員会　1980
(14) 「千ケ瀬遺跡」　青梅市郷土博物館　多摩の縄文　1981
(15) 中西　充他　「神谷原Ⅱ」　八王子市椚田遺跡調査会　1982
(16) 和田　哲　「西上遺跡」　昭島市教育委員会　1975

(3) 石　器

駒前遺跡からは、14点の石器が出土した。撚糸文期に伴なうものは、スタンプ形石器のほか、局部磨製石斧、片刃礫器の３点である。土器量に比べて石器の出土量が少ないのは大宮台地を含めた東関東の一般的な特徴となっている。ここでは、主にスタンプ形石器について取り上げてみたい[1]。

駒前遺跡のスタンプ形石器は１点と少ないものの、他遺跡から得られた報告をもとにして、若干の肉付けを行っていきたい[2]。

スタンプ形石器の特徴的な形態は正面形が二等辺三角形をなし、底面に最大幅をもつ。底面形態は方形、乃至は長方形をなす。

礫の縁辺部に粗く剝離を加えて形状を作出したものと、礫を底面にあたる部分のみ剝離し、縁辺部を未加工のまま使用したものとがある。

縁辺部を剝離したものは、敲打が加えられ、鋭いエッジは除かれている。

一般的な特徴として先に述べた幾通りかの共通性がある。更に、縁辺部の加工の有無からも、原石が使用するための条件に相当していれば、新めて加工する必要のないことが推定され、このことは一定の目的に使用される意図の強い性格をもつものと思われる。

底面は、原石からの剝離が、平坦目を作出するために加えられ、細かな調整剝離の加えられるものは少ないようである。

底面は何らかの使用によって磨耗を受けていることが指摘されている。更に、底面の側縁部に細かな剝離が観察される場合もある。

既出の資料から長さと幅の関係を割り出してゆくと、長さと幅との関係が密接に関連したものだと言えよう[3]。もとより多面体としての分析は加えておらず、分析対象も少ないので、明確に言えるわけではないが、頂部近くですぼまる形態は、手にもって使用する性格の強いものであろうこと

が推定される[4]。

早期の石器群は、先に掲げた以外に、磨石、石皿、敲石、剝片石器等多様だが、駒前遺跡で早期に伴うと言える資料はほとんど出土していない。

概期の石器組成を論じたものに、宮崎朝雄氏の論考がある[4]。石器群をA～D類に分類し、推定される機能からみた、分布の在り方から、早期前半～中葉にかけては、スタンプ形石器を含めた。敲く、磨る機能の石器群と、削る、切る機能の石器群に、地域的な相違がみられるとされた。個々の石器を扱ったものではないが、それらの組成内容の差異が、撚糸文という限られた土器文化内での、地域的、或いは社会的な文化内容の差異を示すのか、今後、検討していかねばならないだろう。

（細田　勝）

(1) スタンプ形石器については、西之台遺跡での分析があり、製作技術面から3分類されている。小田静夫「西之台遺跡B地点」

(2) 正確な数値で割り出したものではない。ここで言う幅とは底面の最大長の部分をさす。

(3) 用途に関しては、(1)同様、藤の台遺跡報文でも同様の見解を示している。原田昌幸他「藤の台遺跡Ⅱ」藤の台遺跡調査会　1980、また水村孝行氏は、ストーン、リタッチャーとして用途を推定されている。水村孝行他「甘粕山」　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　1979

(4) 宮崎朝雄　「撚糸文期の石器について」　奈和第18号　1980

2 平 安 時 代

(1) 住　居　跡

検出された遺構は、僅かに1軒である。限られた範囲とはいえ台地に順行して設けられた調査区内に、付帯的な遺構ばかりか該期の所産遺物さえも採集されないという特異な立地であった。しかも、地形的な面から類推した場合、調査区の周囲から多くの住居跡が占地することは、まず期待できない状況である。この様な特異な在り方（単独あるいは数棟が、他の集落と隔絶して存在する事例）は、従来から所謂「離れ国分」として認識されてきた。「離れ国分」については、命名者である中山吉秀氏により、多くの遺跡が追跡調査され、それを基に集成作業が行なわれそれなりの成果を上げているが、現況では当然のことながら厖大な資料の増加により、再度検討を要する段階にきていると思われる。しかし、ここでは、時間的な制約から現状を把握することは困難であることから、氏の論旨に沿って検討せざるを得ない。

中山氏は、「離れ国分」の性格として次の4項目を提示している。

1　班田農民の季節的な作業小屋。

2　特殊工人の作業小屋。

3　墓守の住む住居。

4　山間社会の生活を余儀なくされた人の住居。

特に（4）の段階では、佐々木達夫氏の「古代村落変遷過程」から谷戸山間部の開発の主体が、大家族から小家族による新田開発が行なわれたとして賛同の意を表している。

さて、本跡の住居跡に立ち戻って考えてみると、中山分類の1ないし4が相当しそうである。2、3については本来具体的な遺物の出土ないしは周辺部での付帯的な遺構の検出を必要とするため、現実には極めて傍証例の少ない事例といえる。本跡の様に、出土遺物中鉄製紡錘車のみ傑出し他に見るべきものが無い場合などは、逆にどの様な推測も成り立つ。

いずれにしても、本例を含めて律令社会を背景にした複雑な多くの要因から「離れ国分」が生じたことだけは明らかである。

引用・参考文献
中山吉秀「離れ国分」古代第61号　1976
佐々木達夫「古代村落の変遷過程」「原始古代社会研究Ⅰ」校倉書房　1974

(2) 出土遺物（第29　30　33図）

この頃では、第1号住居跡の出土遺物を中心にまとめておく。

得られた資料は土師器甕形土器2点、須恵器甑形土器1点、鉄製紡錘車1点の計4点である。土器に関しては、全容を窺えるものが皆無であるため時間的な位置付けには極めて困難な状況といえる。一様、器形の特徴を集約し、遺構の形態、遺構の在り方等を加味して大略な位置付け操作を行

なってみる。まず、2点の甕形土器については、形態的に全く異った器形（1は直口縁で球形胴部、2は「く」の字に開く口縁部から脹らみの弱い直線的な胴部に続く）を呈するが、一方では器形の差異を越えた共通項も多々認められる。つまり、口唇部の突出部分、口縁部全面の指頭による押さえ痕、胴部縦位の篦撫で、比較的明瞭に残す輪積みの痕跡等を掲げることができる。また、グリッド出土土器の中にも同様の範疇で捕えられる資料（第33図1、2）が存在する。

以上の資料は、大略平安時代後期の所産であるが、大宮台地における該期の報告例は極めて少ない。特に集落として把握できるものは、北足立郡伊奈町の大山遺跡、浦和市和田北遺跡が知られる程度であり、他は全て1～2軒規模の報告例で、しかも散見するほどである。

さて、本跡の土器を問題とする場合、通常編年作業の基軸を成す、須恵器、施釉陶器、土師器坏形土器の全て欠落しているため、唯一出土の器種甕形土器の特徴を手がかりに、他遺跡での共伴事例を模索する方法に依る以外に方法はない。

まず、本例の様な甕形土器の特徴を具備する資料として、伊奈町大山遺跡A区39、42、46、53号住、B区1、2号住およびD区製鉄遺構出土のものが酷似している。浦和市内では、和田北遺跡第7、10、15号住居跡出土のものが該当しそうである。他に庄和町馬場遺跡、杉戸町宮前遺跡が知られ、主に県東部に分布の中心がある様に思われる。大山遺跡を調査された中島利治氏によれば、この様な類例は埼玉県内には少なく、栃木・茨城・千葉方面にその中心を求めている。同様な指摘は、千葉県山田水呑遺跡を報告した松村恵司氏により「下野型」の設定が成され、分布の中心を常陸・下野地方に求められた。鈴木正博氏は千葉県東部から福島県東部の太平洋を望む地域を当てている。また、佐藤政則、村田健二は、出自と終焉、器種組成を重視した結果、茨城県県央にその中心をもつことから「常陸型」の名称を与えている。一方、栃木県内でも、近年良好な遺跡に恵まれ該期の編年作業も充実し、橋本澄朗氏等による細分案も提示されたが、分布域の問題については前掲の松村案を踏襲したものといえる。

以上の結果からも明らかな様に、本形態の甕形土器は茨城県を軸に北は福島県南東部、西は栃木県南東部、南は千葉県北半部を限界とする分布域が設定でき、その枠外では客体的な様相であることが看取されるのである。

時間的位置付けについては、良好な資料の提示が成された大山、和田北遺跡例を参考に考えてみる。中島利治氏は、須恵器坏形土器をベースに4期分類をおこない、問題の土器は第Ⅳ期に出現している。須恵器の特徴は、口径＞底径×2で底部切り離しは回転糸切りで再調整のないものをあて、実年代は9世紀末～10世紀前半と考えている。また、小倉均氏は、服部敬史氏の編年観を尊重し、D群に相当させて考えている。このD群は施釉陶器の共伴を軸に前半と後半代に区分し、実年代を11世紀中葉から12世紀初頭としている。

本跡の場合、前述の通り編年観に立ち入ることのできる資料が皆無であるため、現状では服部敬史氏の編年案に従い11世紀後半代の年代を与えておきたい。　（村田健二）

引用・参考文献

中島利治ほか「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集　1979
小倉均ほか「和田北遺跡」浦和市遺跡調査会　1982
横川好富ほか「馬場遺跡」庄和町馬場遺跡調査会　1974
小川良祐ほか「杉戸町目沼遺跡」埼玉県杉戸町文化財調査報告第１集　1964
山口康行ほか「東北原遺跡」大宮市調査会報告第２集　1981
服部敬史「南武蔵における古代末期の様相」東京考古１　1982
松村恵司ほか「山田水呑遺跡」山田遺跡調査会　1977
鈴木正博「水戸市南台遺跡出土の土師器と須恵器」常総台第７　1976
問題の土器の初現については、千葉県荒久遺跡に求め、真間期には型式として既に安定していたものと考え、鬼高後半をあてている。
橋本澄朗・梁木誠「薬師寺南遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第23集　1979
村田健二ほか「千天」大洗地区遺跡調査会　1980
佐藤政則「茨城県北部の国分期土器について」日立市郷土博物館紀要第１号　1981

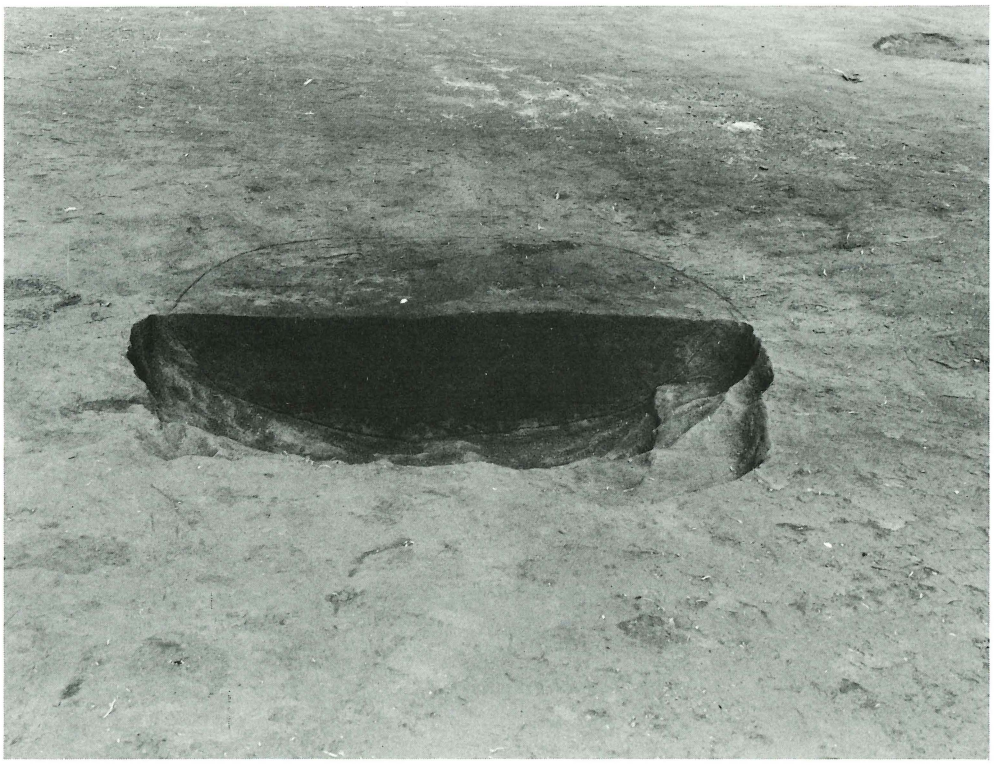
図　　版

遺跡遠景

遺跡全景

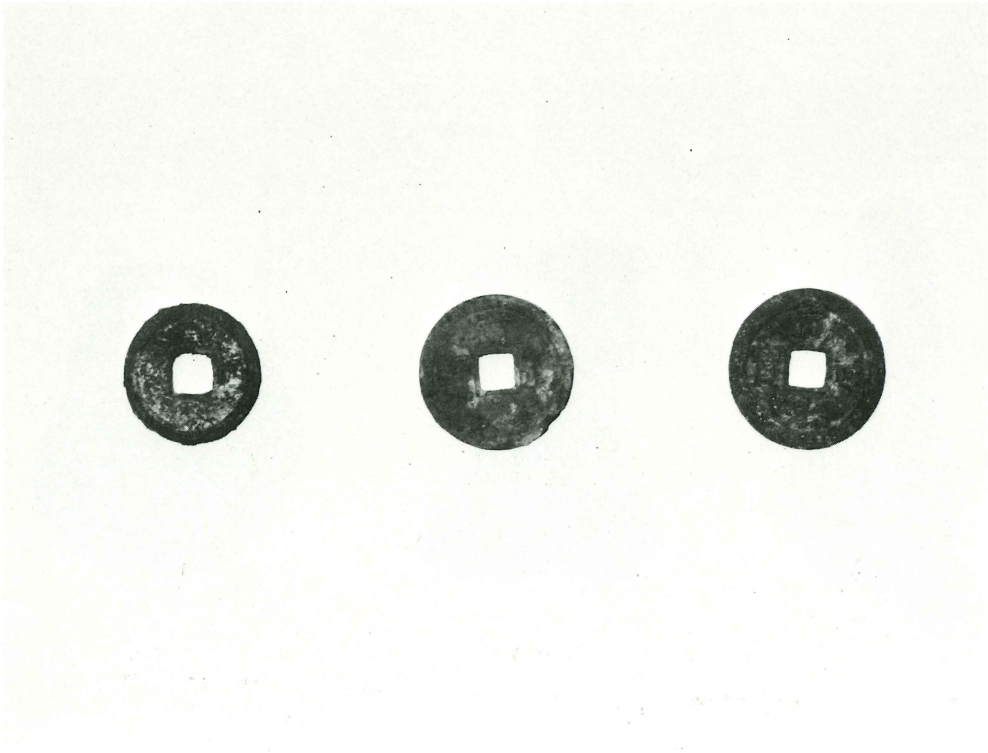
図版 2

1 号土壙



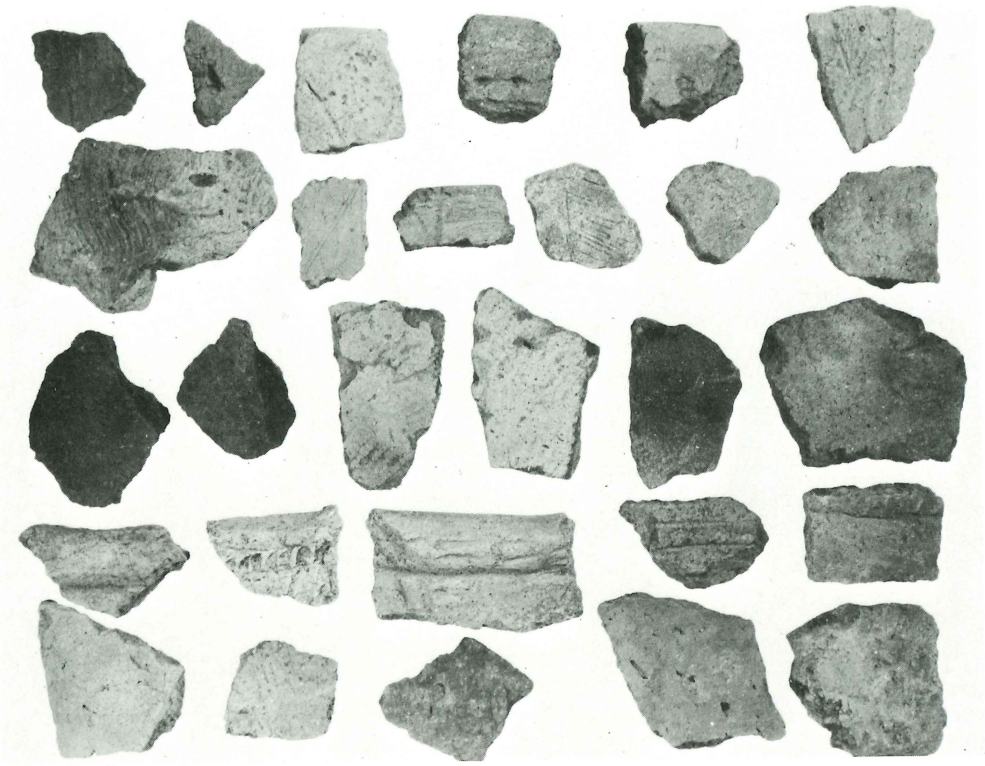
1 号土壙土層

2 号土壙

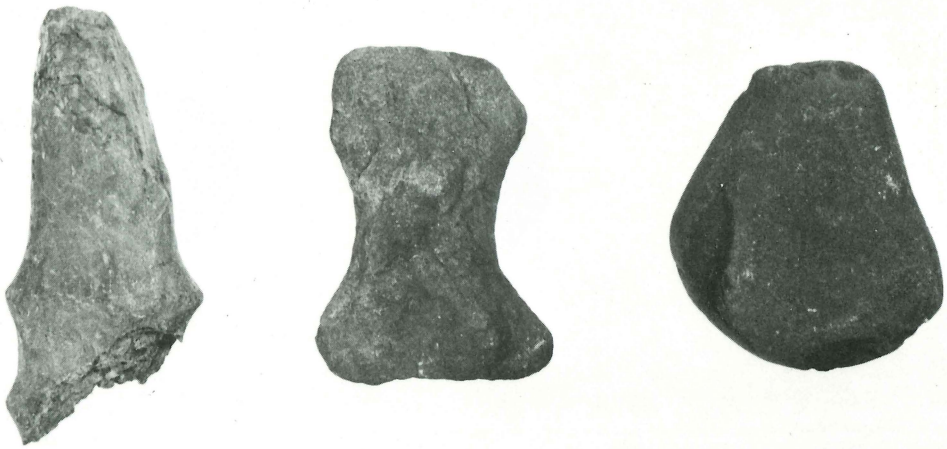


古　　銭

図版 4



縄文土器



石　　器

遺跡遠景

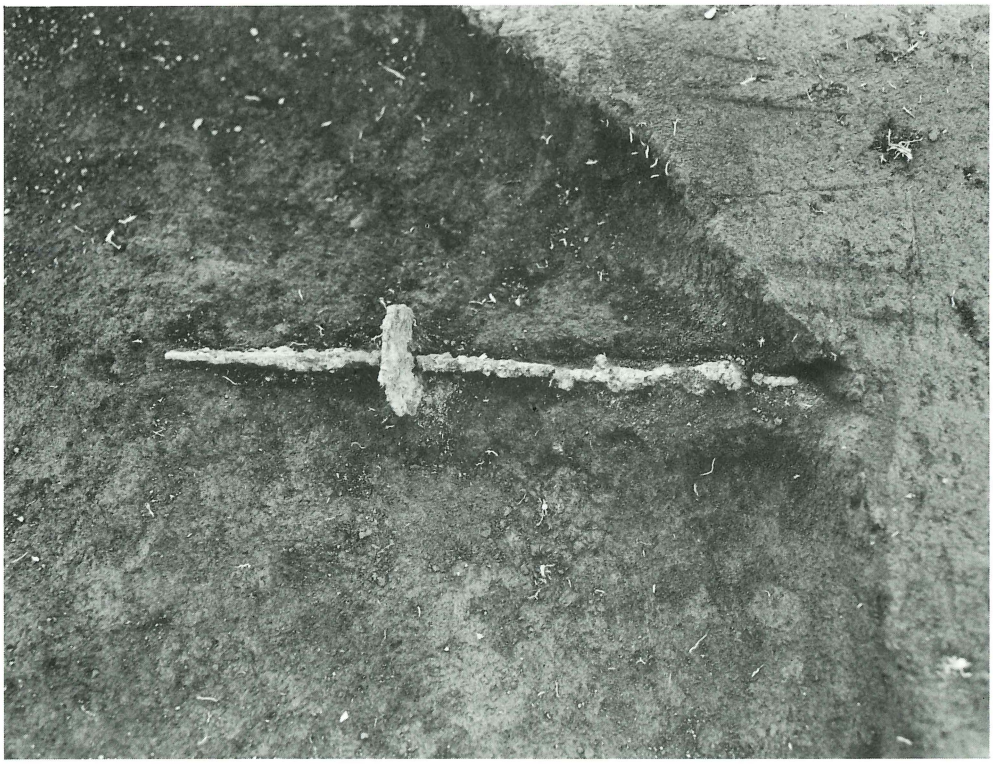
南側調査区全景

図版 6

1 号炉穴

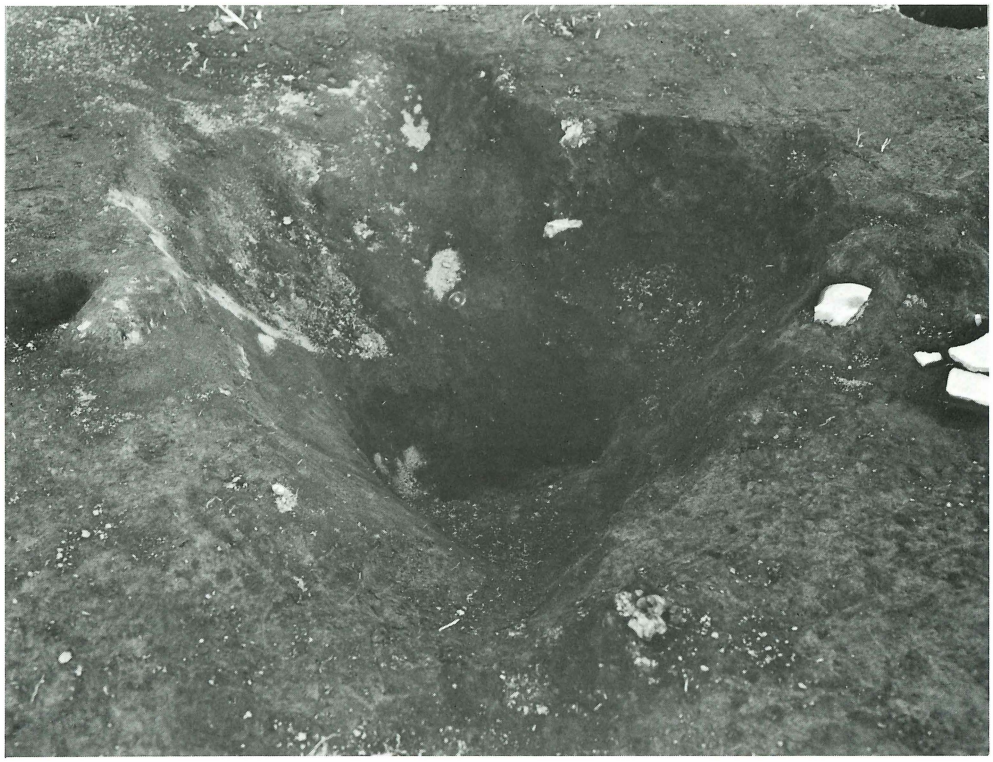
2 号集石

1 号住居跡



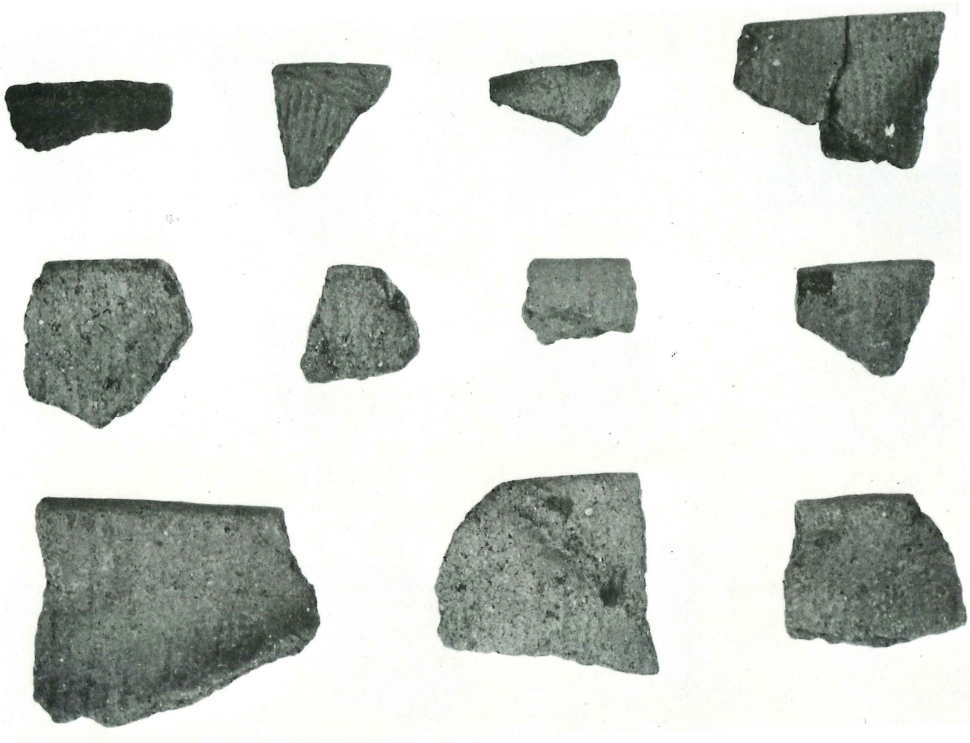
1 号住居跡出土紡錘車

図版 8

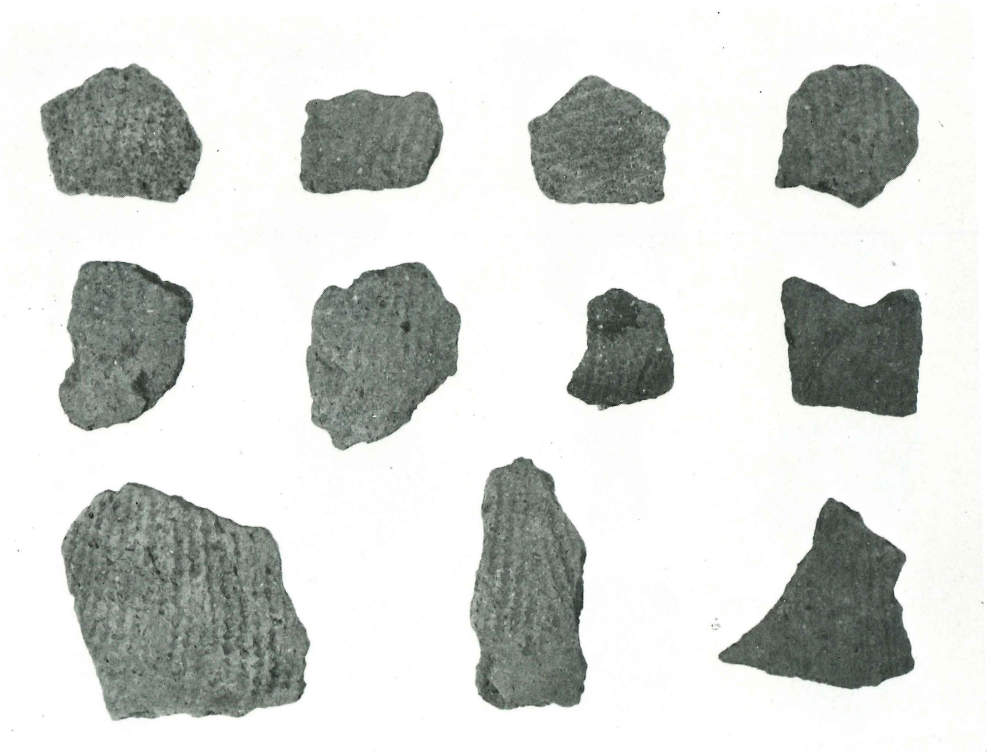


1 号住居跡カマド

1 号住居跡出土土器

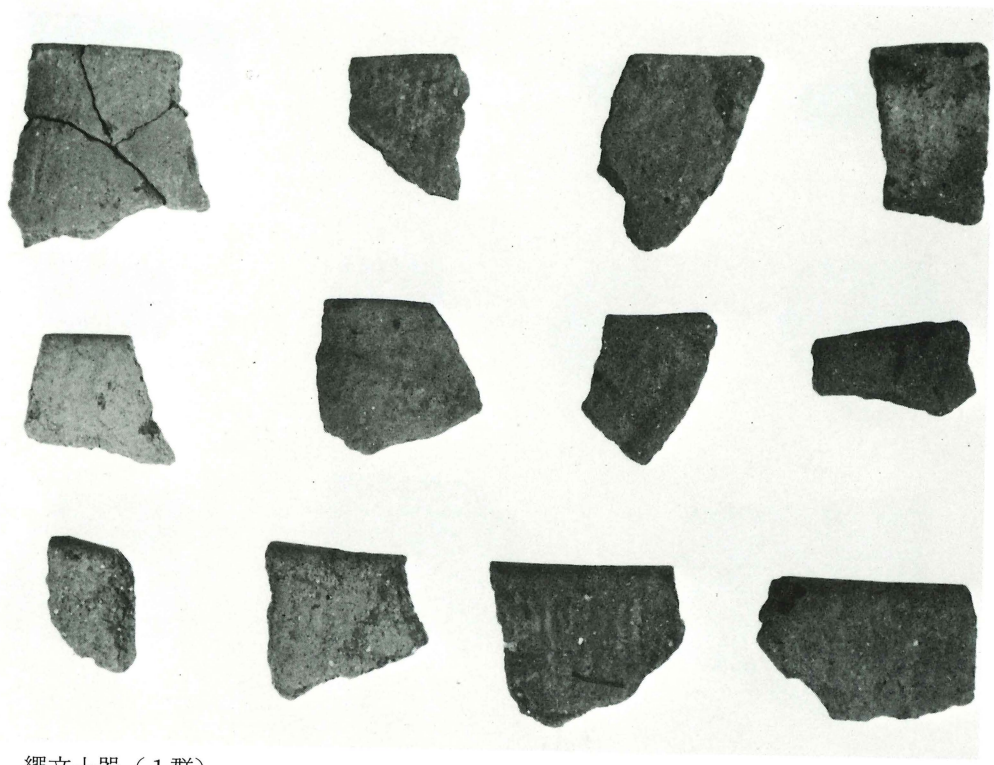


縄文土器（1群）

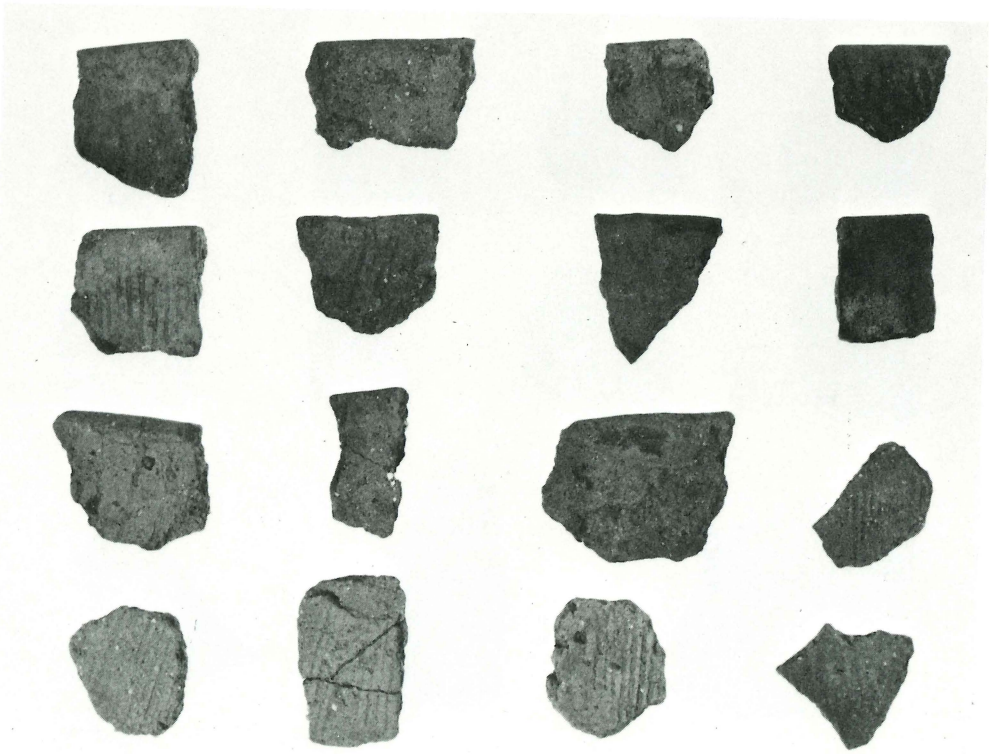


縄文土器（1群）

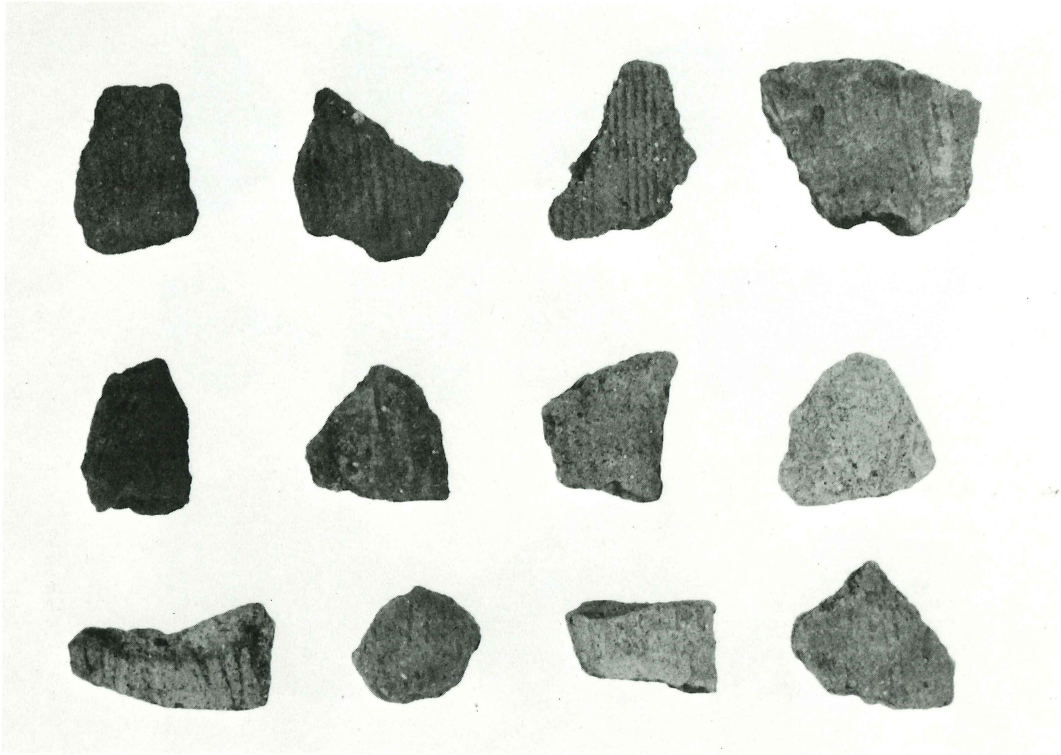
図版10



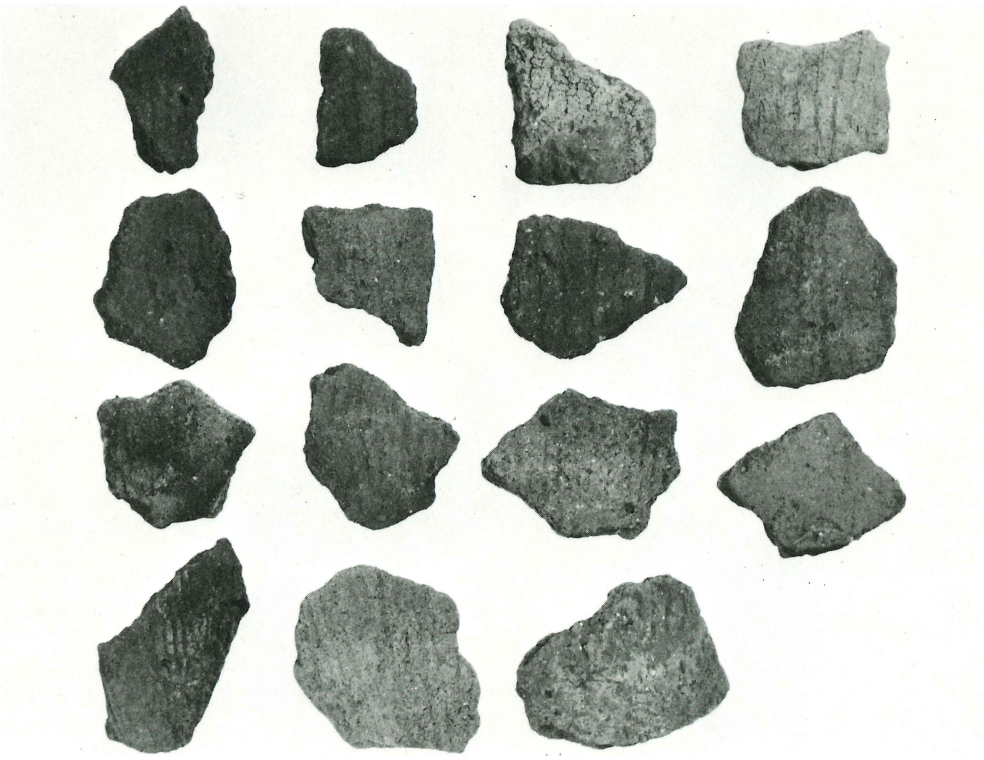
縄文土器（１群）



縄文土器（１群）

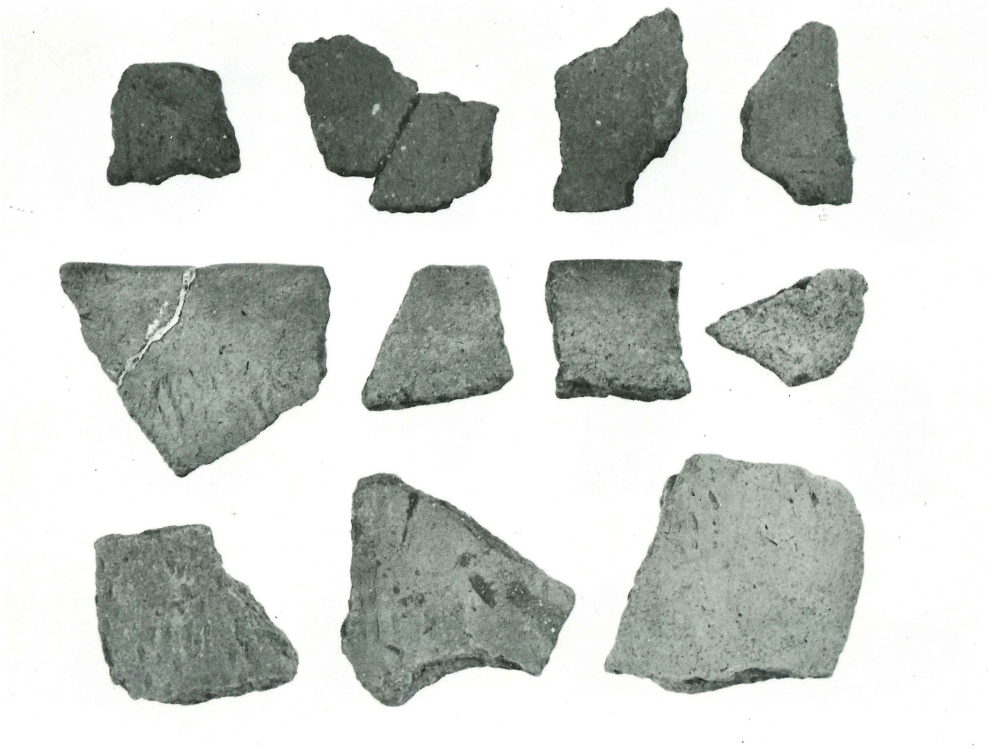


縄文土器（１群）

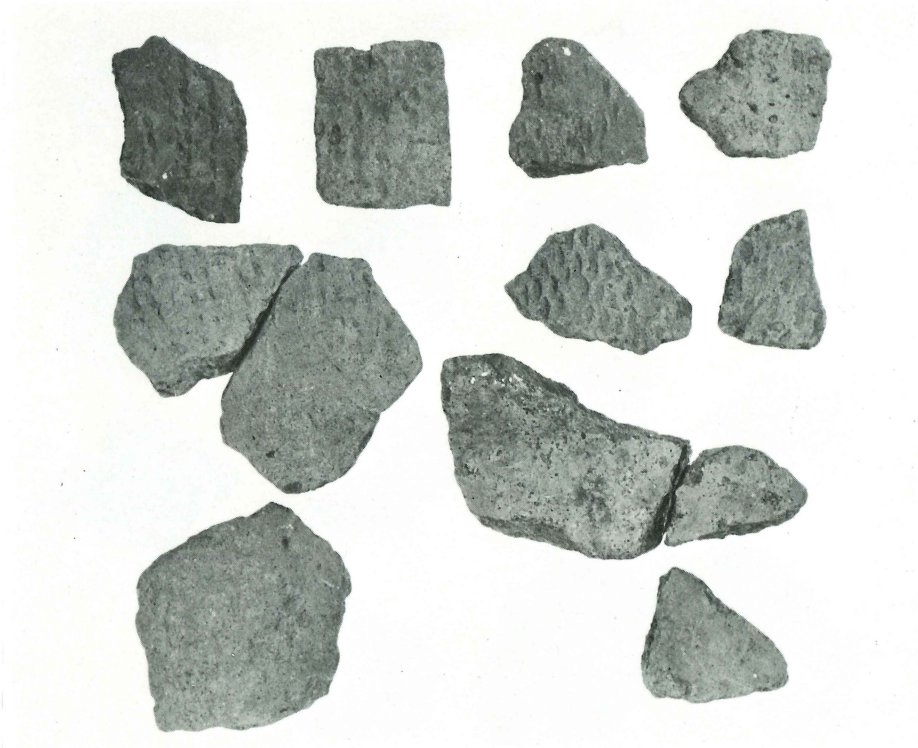


縄文土器（１群）

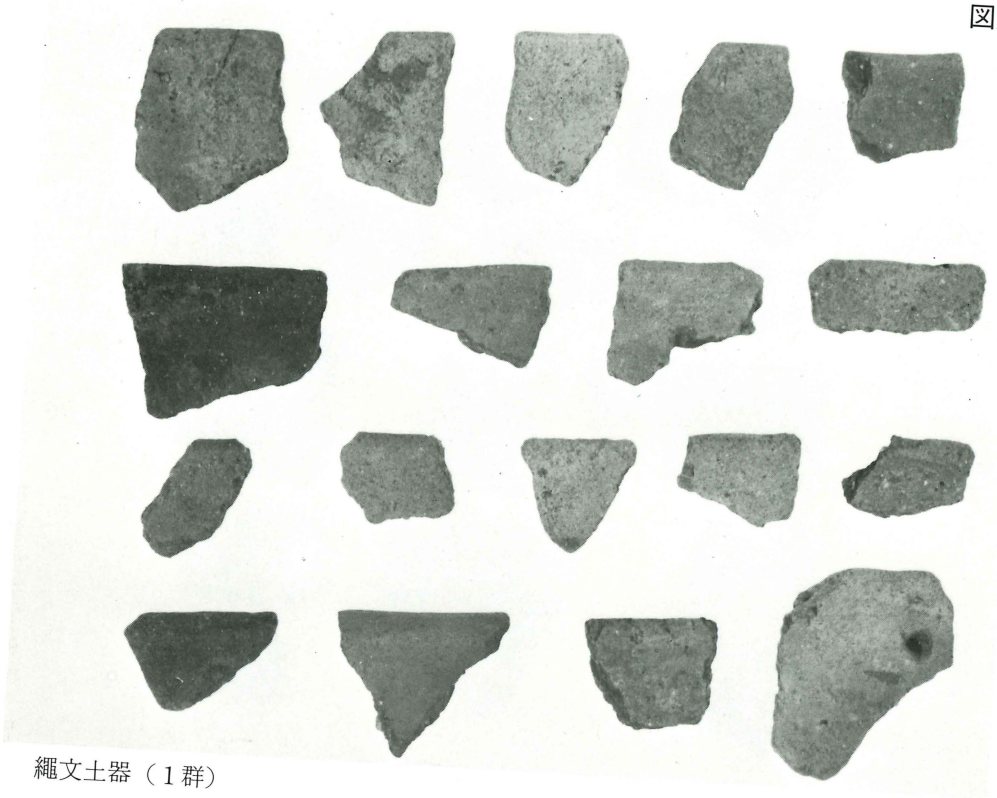
図版12



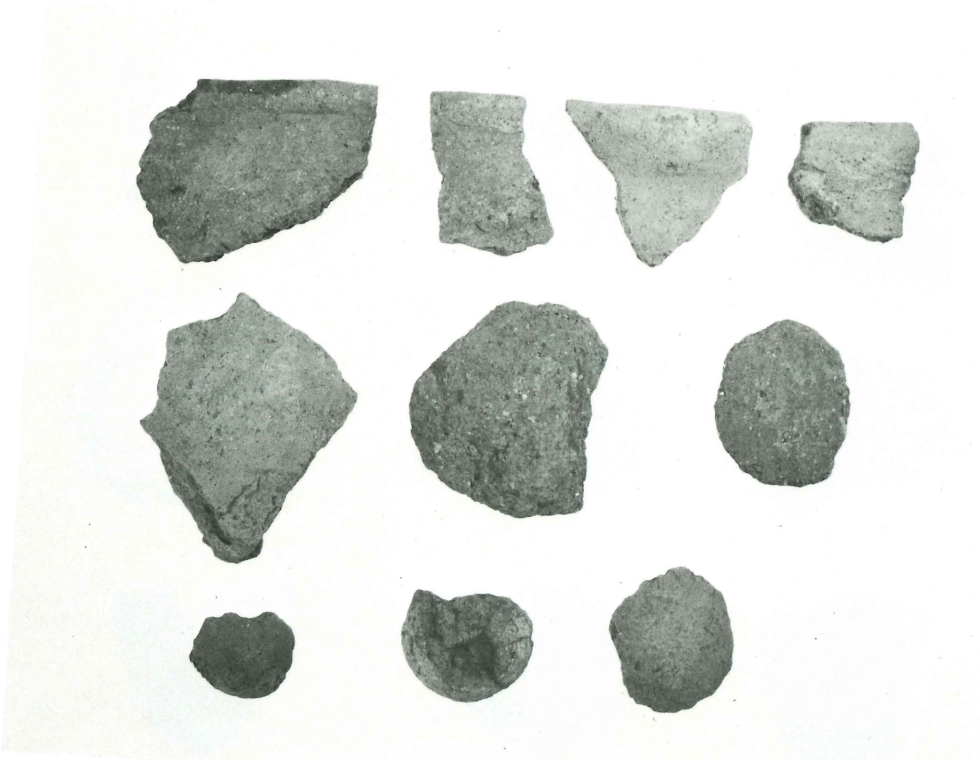
縄文土器（１群）



縄文土器（１群）



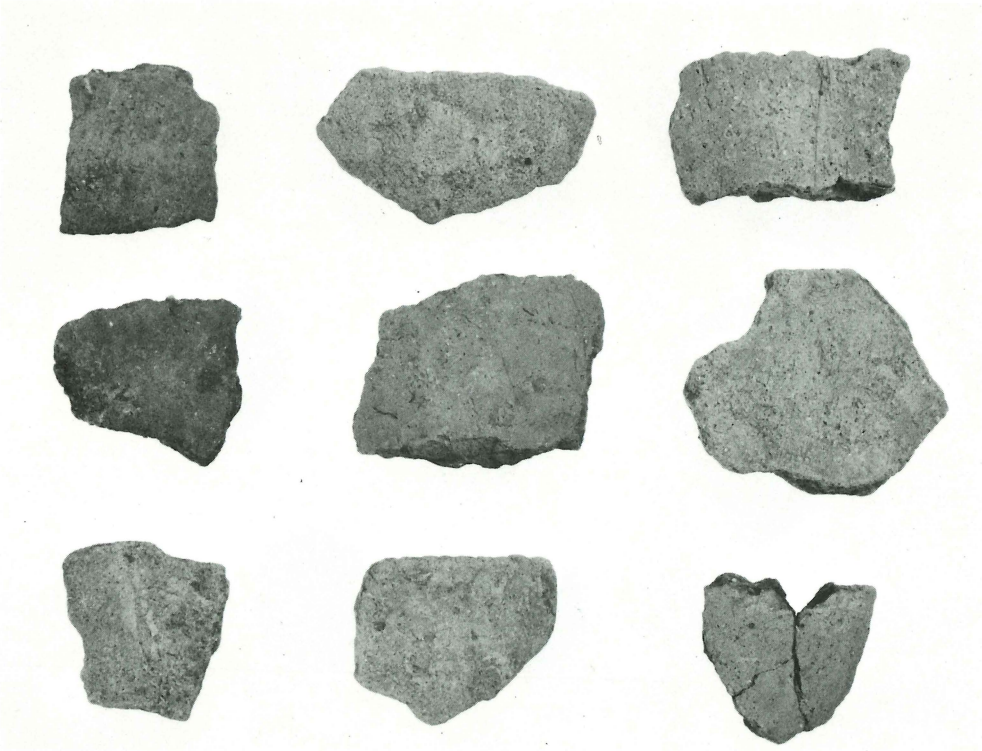
縄文土器（1群）



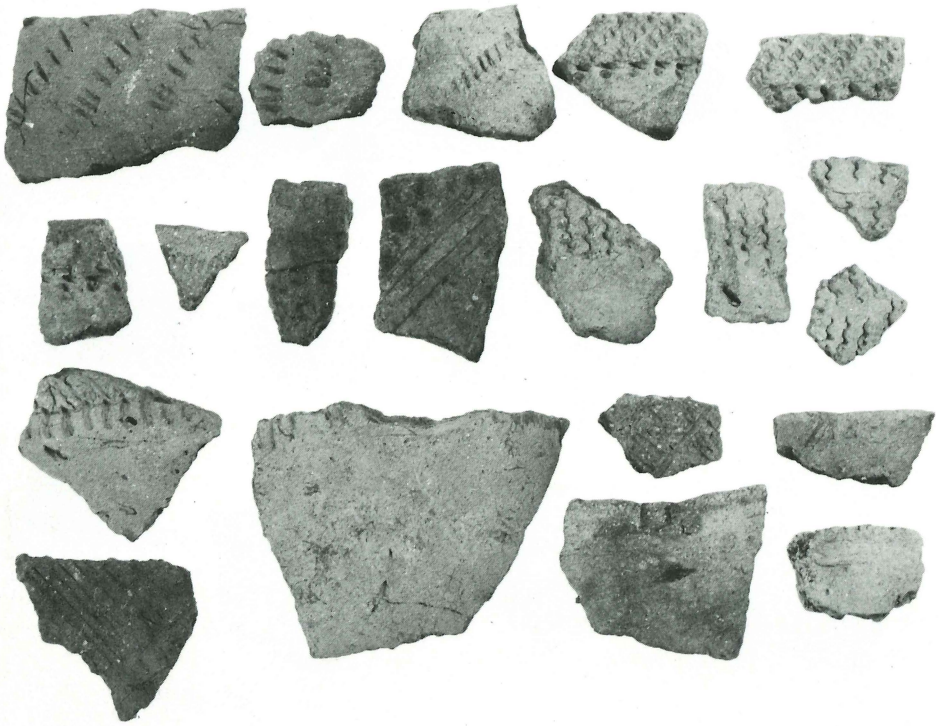
縄文土器（1群）

図版14

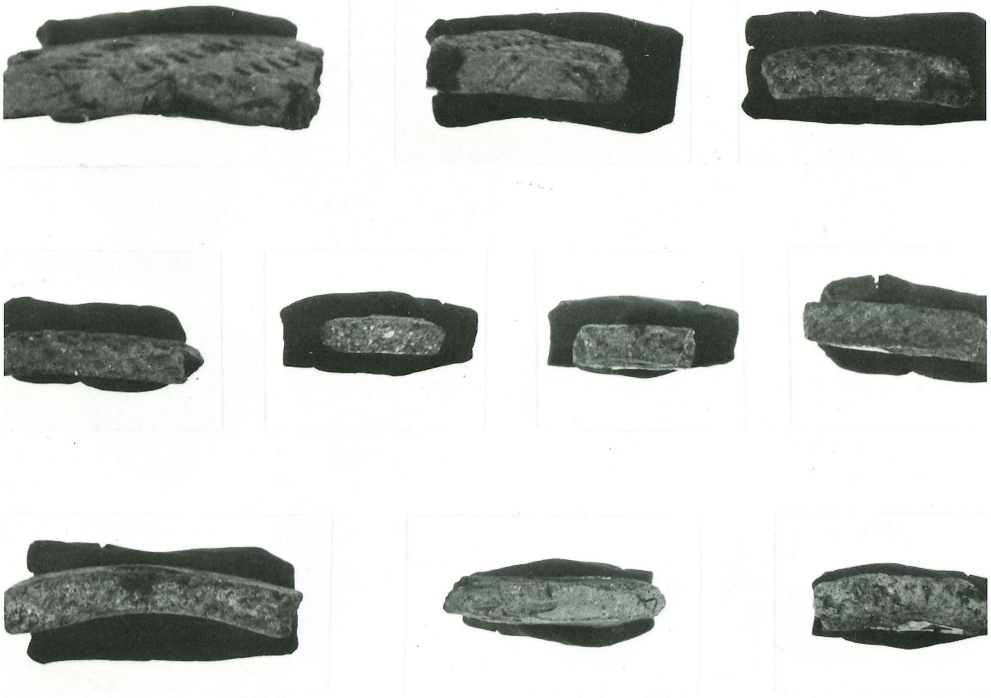
縄文土器（１群）



縄文土器（１群）

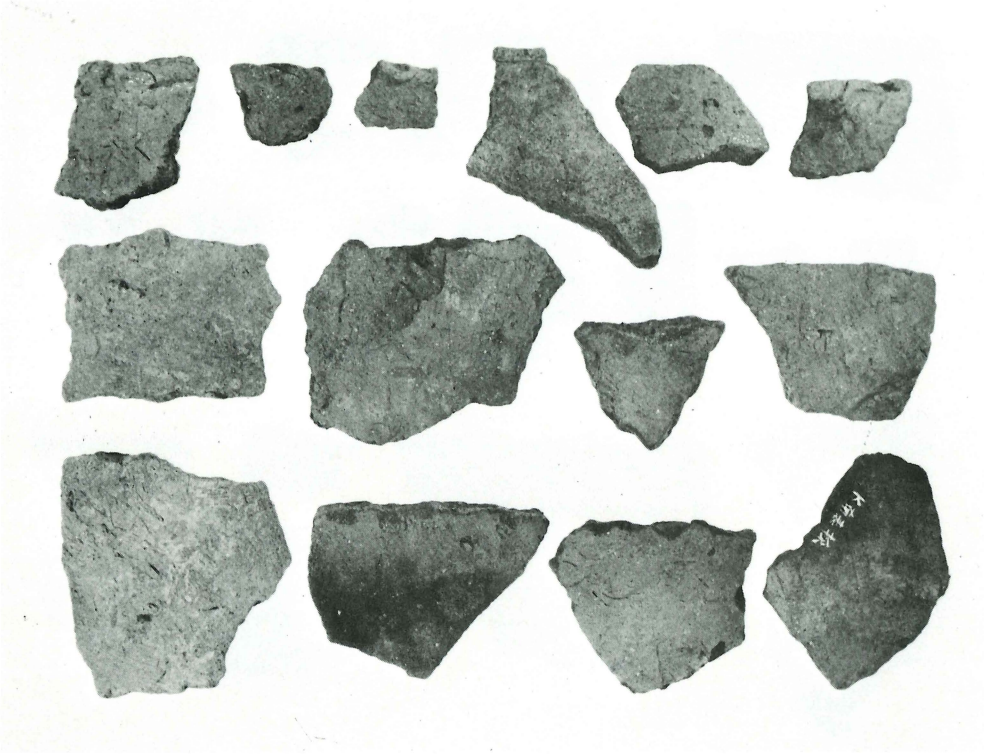


縄文土器（２群）



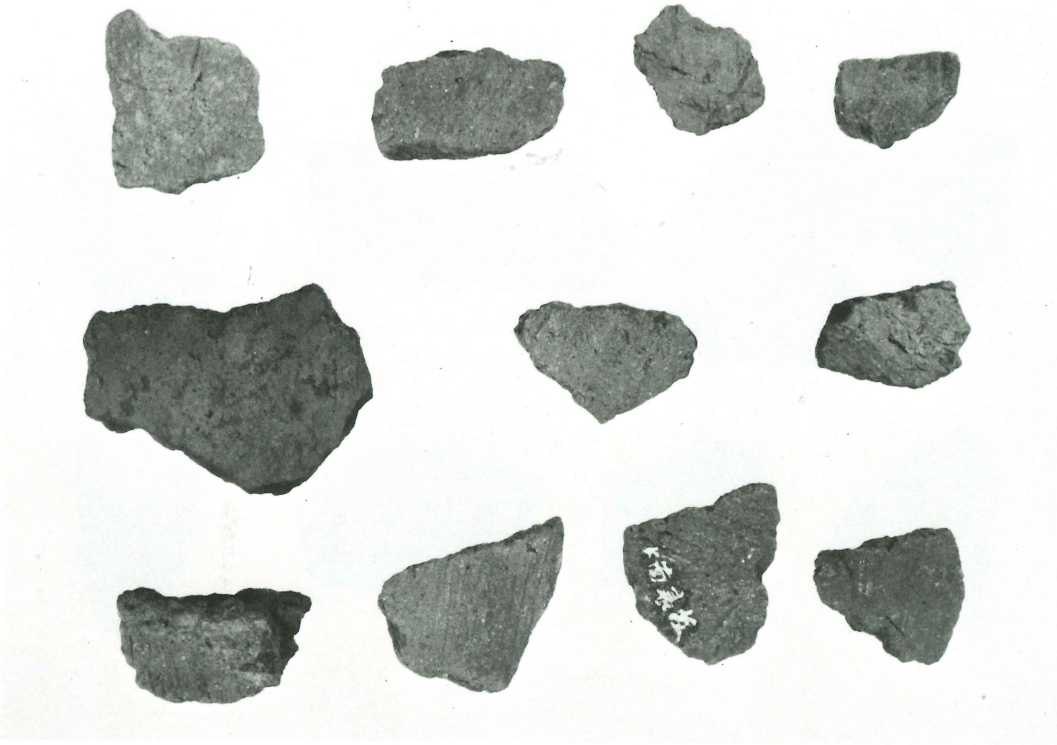
縄文土器（２群口唇部）

図版16

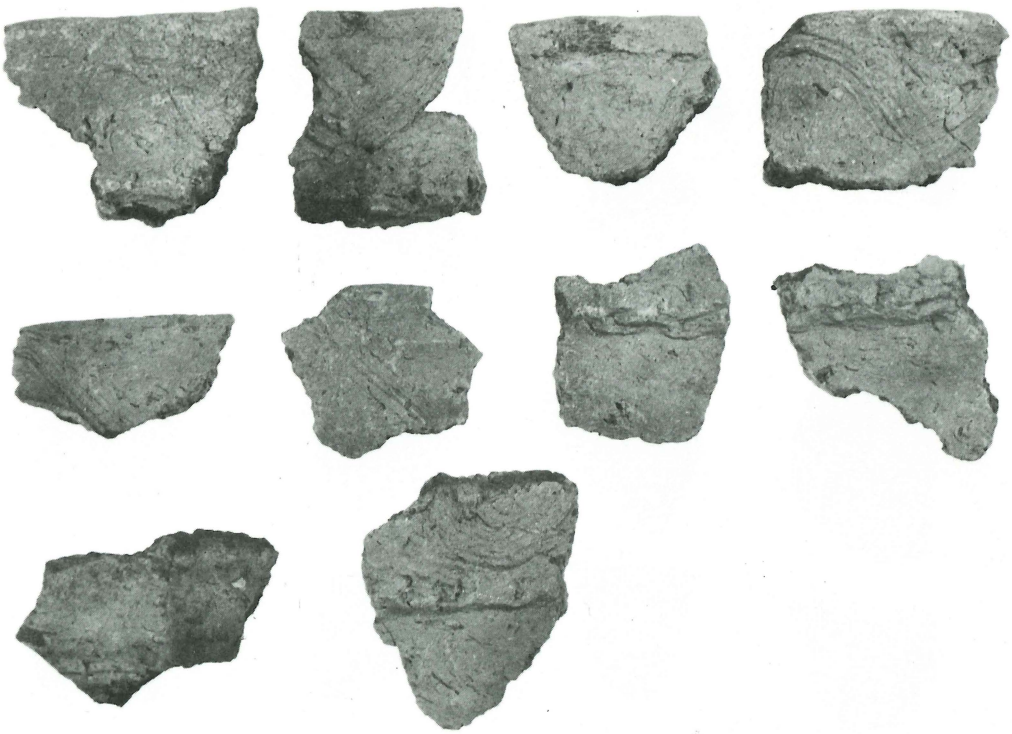


縄文土器（２群）

縄文土器（２群）

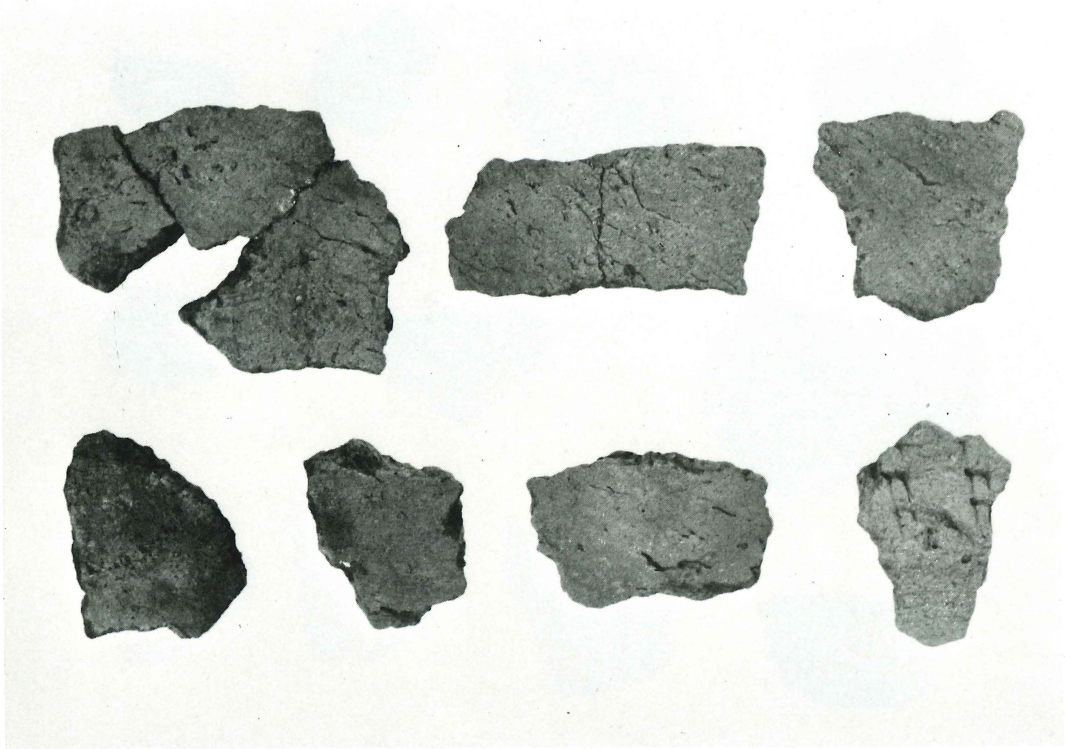


縄文土器（２群）

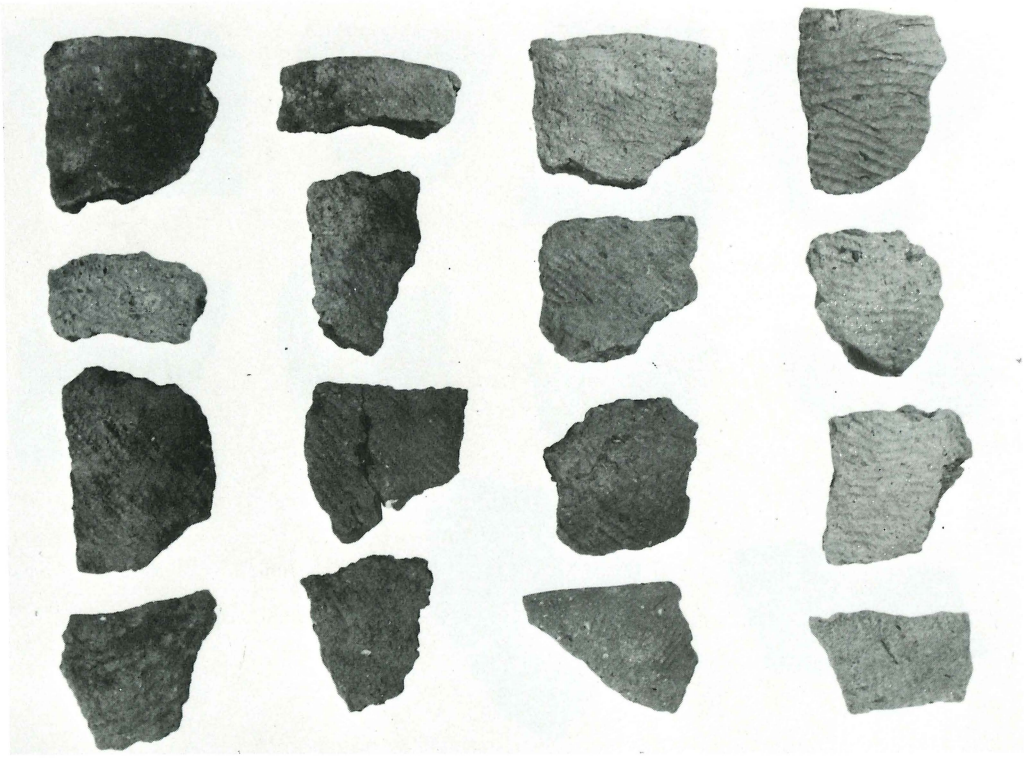


縄文土器（３群）

図版18



縄文土器（3群）

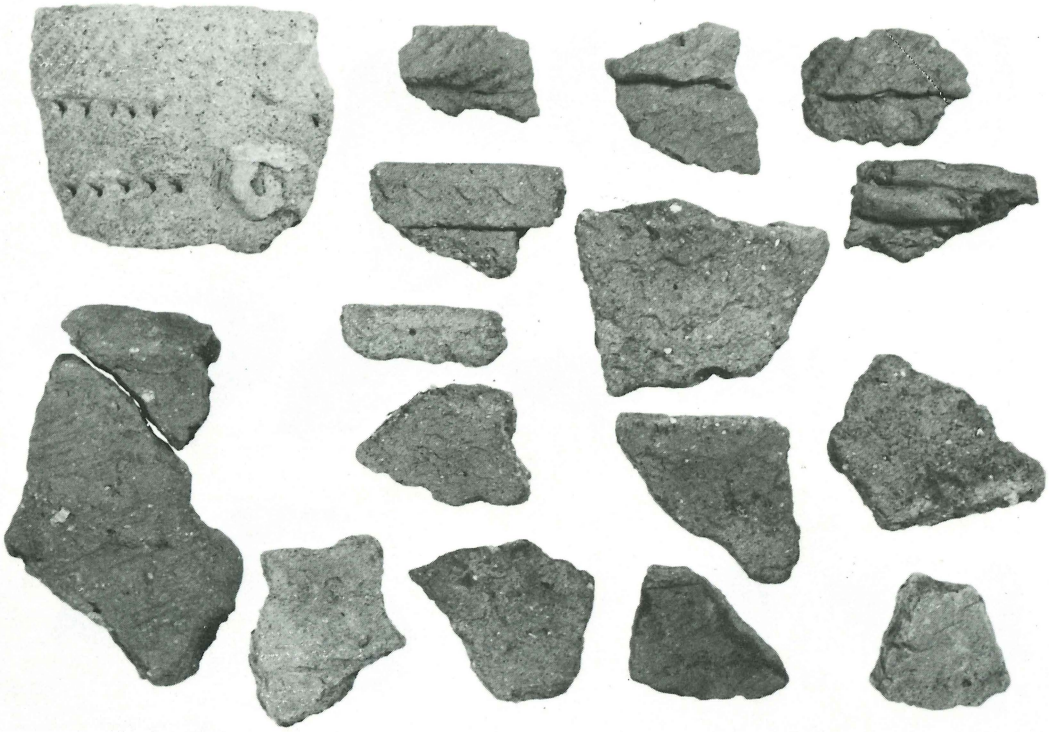


縄文土器（4群）

縄文土器（5群・6群）

縄文土器（7群）

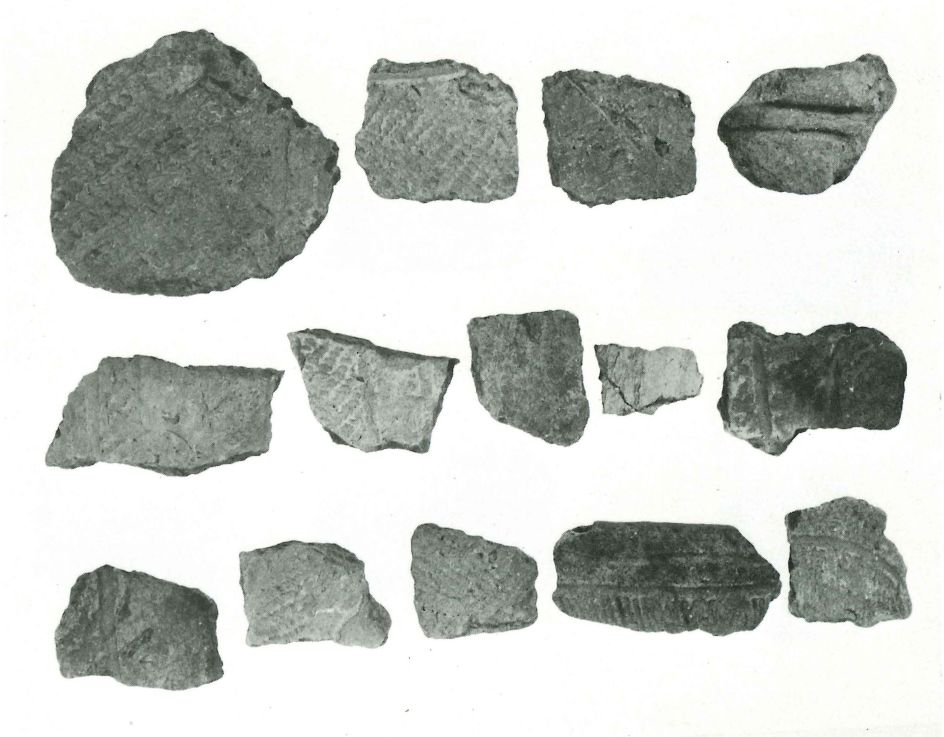
図版20



縄文土器（７群）

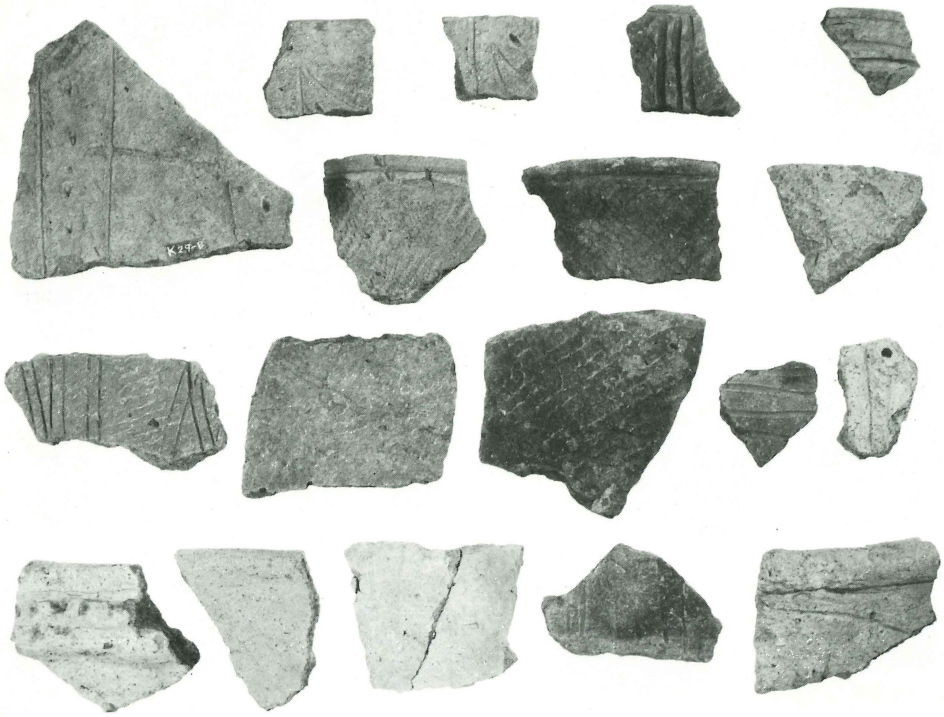
縄文土器（８群）

縄文土器（8群）

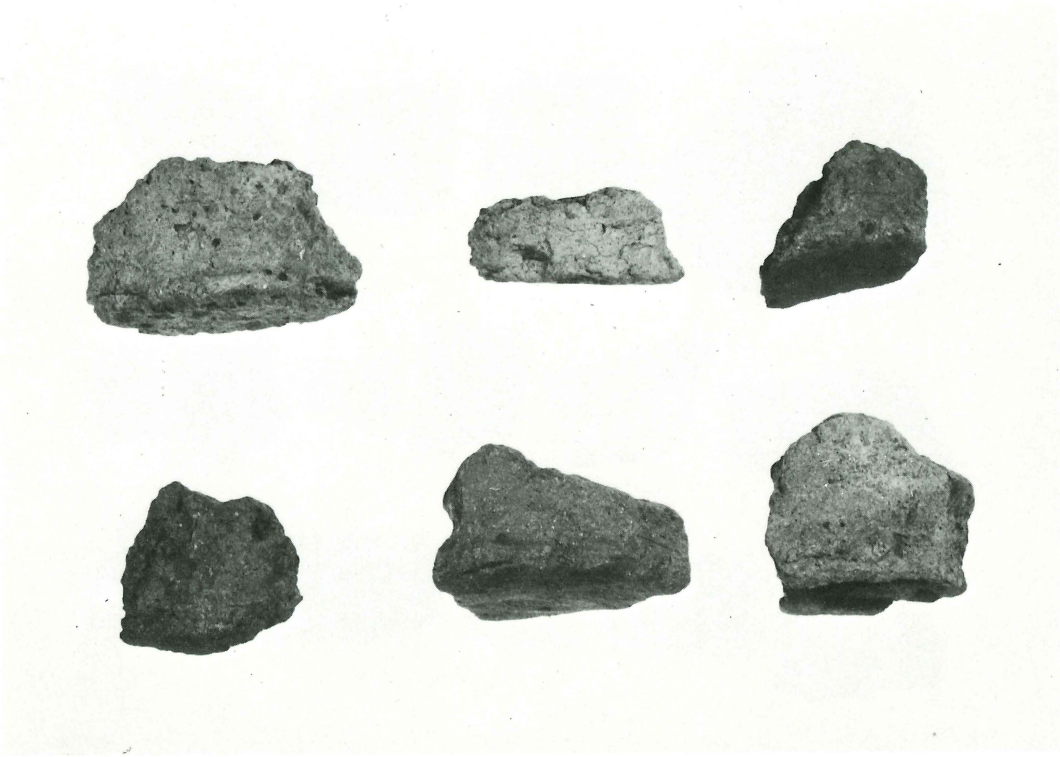


縄文土器（9群）

図版22

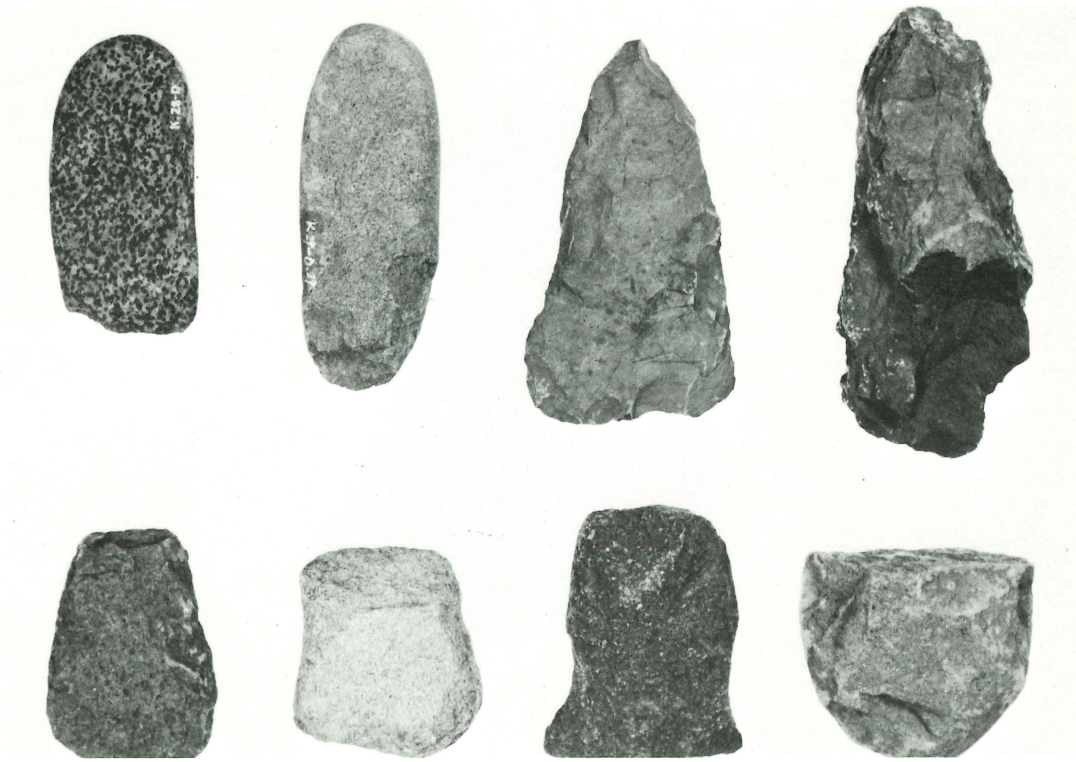


縄文土器（10群・11群・12群）



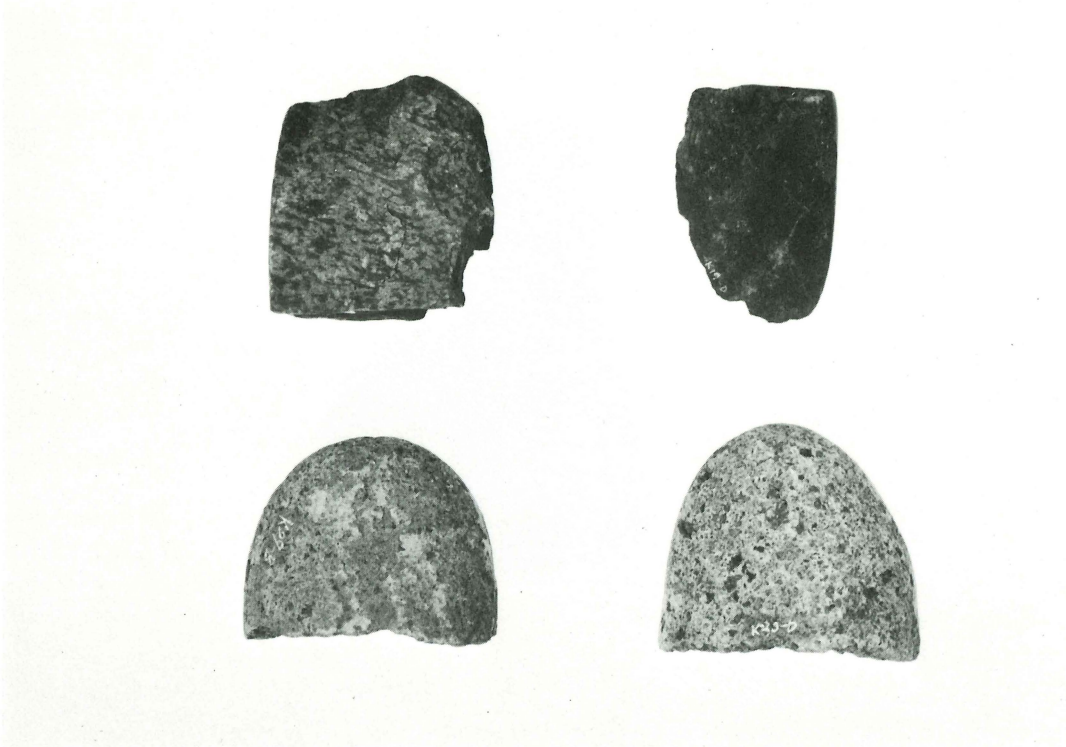
縄文土器（底部）

石　器（スタンプ形）



石　器（石斧）

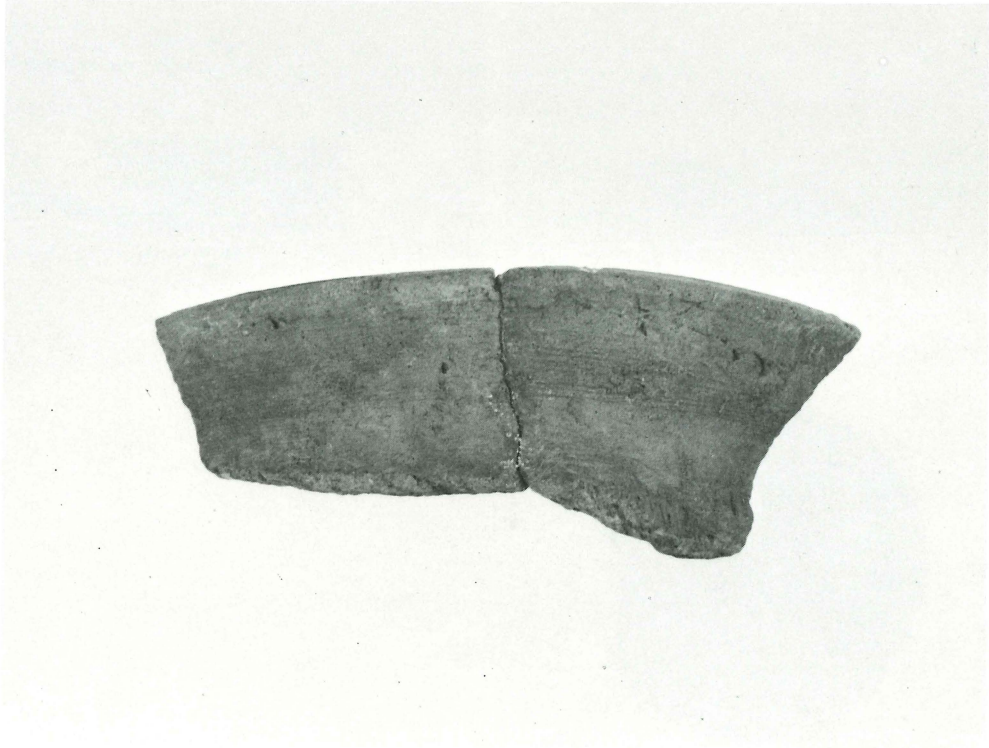
図版24



石　器（石斧・磨石）

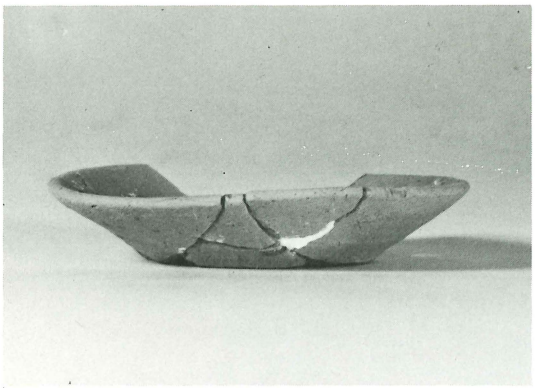
石　　器

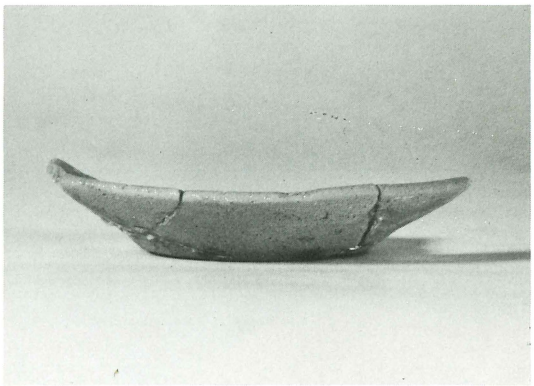
1号住居跡出土土器

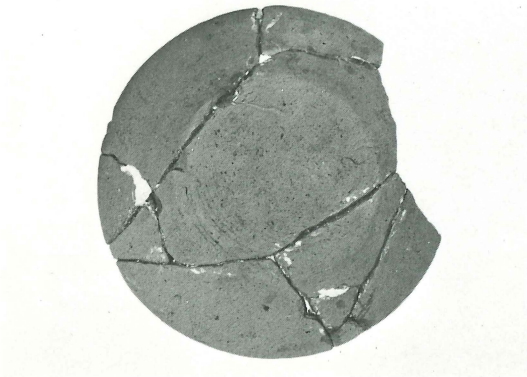


1号住居跡出土土器

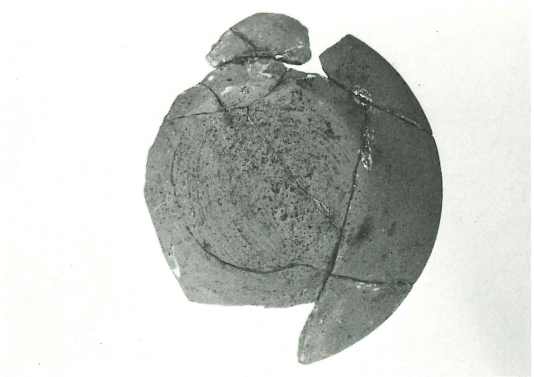
図版26



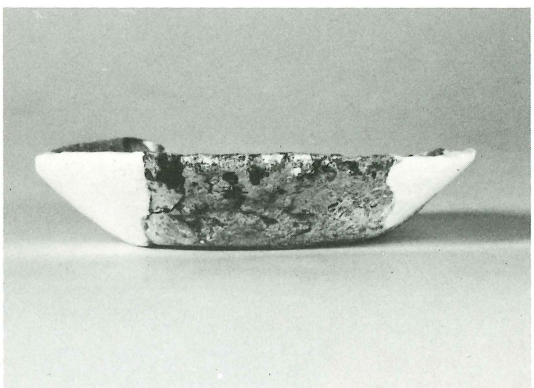




かわらけ



かわらけ



かわらけ

かわらけ

古　　銭

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第30集

県道大宮東京線関係
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ

中原前・駒前

昭和58年3月25日　印刷
昭和58年3月31日　発行

発行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷　アサヒ印刷株式会社